

# 福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

- 1 -

福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡第2次調査

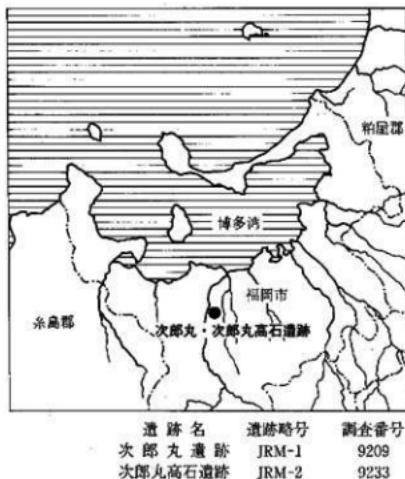
1996

福岡市教育委員会

# 福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 1 —

福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡第2次調査



1996

福岡市教育委員会



福岡外環状道路（IV工区）予定地の景観



次郎丸高石遺跡第2次調査俯瞰

## 序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までの都市計画道路で、延長26.4kmをいいます。本道路は福岡市西南部交通対策の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれており、現在、志免町と月隈間、姪浜と福重間など一部の供用が開始されております。

今回報告する次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡は、福岡外環状道路の福重・野芥間に所在し、道路建設工事に先だって発掘調査を実施いたしました。

次郎丸遺跡の調査では、古墳時代の祭祀を行なった溝や中世の建物や井戸からなる集落が発見され、次郎丸高石遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代初頭の建物や井戸からなる集落が発見され、多くな成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、建設省福岡国道工事事務所の関係者および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の助となり、広く活用されることを願っております。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

## 例　言

1. 本書は、福岡外環状道路の建設省施行区间にあたる福重・野芥間の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1992年の5月から11月にかけて発掘調査を実施した次郎丸遺跡第1次調査・次郎丸高石遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治、山口朱美、石本恭一、岡崇、後藤和武、柳沢竜広、小川勝彦、清川朋和、高山義克、太田寿和、宮本周作、永井大志、斎藤裕志が作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、平川敬治がおもに行い、第5号上塙出土遺物を山口朱美が、石器を山口謙治が作成した。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治が、遺物を平川敬治が撮影した。
5. 本書使用の図面の整図は、山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆・編集は山口謙治が行なった。
8. 本調査出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

# 本文目次

## I 序説

1.はじめに.....	1
2.各調査の概要	
1) 次郎丸高石遺跡第3次調査.....	4
2) 免遺跡第2次調査.....	5
3) 次郎丸遺跡第2次調査.....	6
4) 橋本・丁田遺跡第2次調査.....	7
5) 野芥大蔵遺跡第1次調査.....	8
6) 野芥遺跡第5次調査.....	9
3.1992・1993年度の調査体制.....	10

## II 遺跡の位置と環境

1.本書報告遺跡の位置.....	11
2.本書報告遺跡をめぐる環境.....	11

## III 発掘調査の記録

1.次郎丸遺跡第1次調査	
1) 調査概要.....	13
2) 弥生時代の遺構と出土遺物.....	16
3) 古墳時代の遺構と出土遺物.....	19
4) 中世の遺構と出土遺物.....	51
5) 本調査の成果.....	77
2.次郎丸高石遺跡第2次調査	
1) 調査概要.....	79
2) I区の遺構と出土遺物.....	81
3) II区の遺構と出土遺物.....	90
4) III区の遺構と出土遺物.....	99
5) 本調査の成果.....	100

## 挿 図 目 次

Fig. 1	福岡外環状道路路線図	1
Fig. 2	福岡外環状道路IV区内調査遺跡位置図	2
Fig. 3	次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡の位置と周辺の遺跡	12
Fig. 4	次郎丸遺跡第1~3次調査地形実測図	(付図. 1)
Fig. 5	次郎丸遺跡第1次調査造構配置実測図	(付図. 2)
Fig. 6	第12号溝出土土器実測図	16
Fig. 7	出土弥生土器実測図	16
Fig. 8	出土縄文土器拓影実測図	18
Fig. 9	出土石器実測図	18
Fig. 10	次郎丸遺跡第1次調査第6・15号溝 (SD-06・15) および遺物出土状態実測図	(付図. 3)
Fig. 11	次郎丸遺跡第1次調査第6・15号溝 (SD-06・15) 上層断面実測図	(付図. 4)
Fig. 12	第6号溝出土土師器壺実測図(1)	22
Fig. 13	第6号溝出土土師器壺実測図(2)	24
Fig. 14	第6号溝出土土師器壺実測図(3)	26
Fig. 15	第6号溝出土土師器壺実測図(4)	28
Fig. 16	第6号溝出土土師器壺実測図(1)	31
Fig. 17	第6号溝出土土師器壺実測図(2)	32
Fig. 18	第6号溝出土土師器壺実測図(5)	34
Fig. 19	第6号溝出土遺物実測図	36
Fig. 20	第6号溝出土土師器高杯実測図(1)	39
Fig. 21	第6号溝出土土師器高杯実測図(2)	41
Fig. 22	第6号溝出土土師器高杯実測図(3)	43
Fig. 23	第6号溝出土土師器高杯実測図(4)	45
Fig. 24	第15号溝出土土師器実測図	48
Fig. 25	出土土師器実測図	50
Fig. 26	次郎丸遺跡第1次調査古代・中世造構配置実測図	(付図. 5)
Fig. 27	第20号掘立柱建物 (SB-20) 実測図	52
Fig. 28	第21号掘立柱建物 (SB-21) 実測図	53
Fig. 29	各掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1)	55
Fig. 30	第22・23号掘立柱建物 (SB-22・23) 実測図	56
Fig. 31	第24・25号掘立柱建物 (SB-24・25) 実測図	57
Fig. 32	第26・27号掘立柱建物 (SB-26・27) 実測図	58
Fig. 33	第28~30号掘立柱建物 (SB-28~30) 実測図	59
Fig. 34	各掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(2)	60
Fig. 35	第1号井戸 (SE-01) 実測図	62
Fig. 36	第1号井戸出土遺物実測図	63
Fig. 37	第3号土壤出土遺物実測図	65
Fig. 38	第4・7号井戸 (SE-04・07) 実測図	66
Fig. 39	第5号土壤 (SK-05) 実測図	68
Fig. 40	第5号土壤出土遺物実測図(1)	71
Fig. 41	第5号土壤出土遺物実測図(2)	72
Fig. 42	第11号井戸出土遺物実測図	75
Fig. 43	第14号溝出土遺物実測図	75
Fig. 44	出土古代・中世遺物実測図	76
Fig. 45	次郎丸高石遺跡第2次調査地形実測図	80
Fig. 46	次郎丸高石遺跡第2次調査I~III区北壁上層断面実測図	(付図. 6)

Fig. 47	I 区遺構配置実測図	81
Fig. 48	第1号井戸(SE-01)および出土土器実測図	82
Fig. 49	第2号井戸(SE-02)および出土土器実測図	84
Fig. 50	第3号溝(SD-03)および出土土器実測図	86
Fig. 51	第4号土壤(SK-04)および出土土器実測図	87
Fig. 52	I区各柱穴出土土器実測図	88
Fig. 53	II区遺構配置実測図	89
Fig. 54	第1~3号土壤(SK-01~03)実測図	90
Fig. 55	第4号土壤(SK-04)土層断面実測図	91
Fig. 56	第11・12号掘立柱建物(SB-11・12)実測図	92
Fig. 57	第13・14号掘立柱建物(SB-13・14)実測図	93
Fig. 58	第15・16号掘立柱建物(SB-15・16)実測図	94
Fig. 59	第17・18号掘立柱建物(SB-17・18)実測図	96
Fig. 60	II区各遺構出土土器実測図	97
Fig. 61	出土局部磨製石斧実測図	98
Fig. 62	第20号柱穴出土土器実測図	99
Fig. 63	III区遺構配置実測図	100

## 図版目次

卷頭 1	福岡外環状道路(IV工区予定地の景観)	
卷頭 2	次郎丸高石遺跡第2次調査俯瞰	
Ph. 1	次郎丸遺跡調査風景(1)	2
Ph. 2	次郎丸高石遺跡第2次調査風景	3
Ph. 3	次郎丸遺跡調査風景(2)	13
Ph. 4	次郎丸遺跡調査区全景(1)	14
Ph. 5	次郎丸遺跡調査区全景(2)	15
Ph. 6	第12号溝および繩文・弥生時代出土遺物	17
Ph. 7	第6号溝遺物出土状態	20
Ph. 8	第6号溝遺物出土状態および第15号溝完掘状況	21
Ph. 9	第6号溝出土土師器窯(1)	23
Ph. 10	第6号溝出土土師器窯(2)	25
Ph. 11	第6号溝出土土師器窯(3)	27
Ph. 12	第6号溝出土土師器窯(4)	29
Ph. 13	第6号溝出土土師器窯・鉢	30
Ph. 14	第6号溝出土土師器小形丸底窯	33
Ph. 15	第6号溝出土土師器窯	35
Ph. 16	第6号溝出土土師器高窯(1)	37
Ph. 17	第6号溝出土土師器高窯(2)	38
Ph. 18	第6号溝出土土師器高窯(3)	40
Ph. 19	第6号溝出土土師器高窯(4)	42
Ph. 20	第6号溝出土土師器高窯(5)	44
Ph. 21	第6号溝出土土師器高窯(6)	46
Ph. 22	第6号溝出土遺物	47
Ph. 23	第6号溝出土砥石および第15号溝出土土師器	49
Ph. 24	各柱穴出土遺物	61
Ph. 25	第1号井戸出土遺物	64
Ph. 26	第1号井戸・第5号土壤	67

Ph. 27	第5号土壤出土遺物(1) .....	69
Ph. 28	第5号土壤出土遺物(2) .....	70
Ph. 29	第5号土壤出土遺物(3) .....	73
Ph. 30	各遺構出土遺物 .....	74
Ph. 31	第14号溝出土遺物 .....	75
Ph. 32	古代・中世の出土遺物 .....	76
Ph. 33	次郎丸遺跡調査終了状況 .....	78
Ph. 34	次郎丸高石遺跡第2次調査俯瞰 .....	79
Ph. 35	I区俯瞰 .....	81
Ph. 36	第1号井戸遺物出土状態および出土土器 .....	83
Ph. 37	第2号井戸遺物出土状態および出土土器 .....	85
Ph. 38	第3号溝出土上器 .....	86
Ph. 39	第4号土壤遺物出土状態および出土土器 .....	87
Ph. 40	各柱穴出土遺物 .....	88
Ph. 41	II区俯瞰 .....	88
Ph. 42	II区検出掘立柱建物 .....	95
Ph. 43	II・III区各遺構出土土器 .....	97
Ph. 44	II区出土石器 .....	98
Ph. 45	III区俯瞰 .....	99

## I 序 説

## 1. はじめに

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された都市計画道路・井尻柏屋線・井尻姪浜線で、西区姪浜から柏屋町戸原間の延長26.4kmである。そのうち建設省施行の福重から月隈間の16.2kmの区间は、一般国道202号福岡外環状道路とよばれています（『外かんだより創刊号』昭和63年11月1日発行より引用）。（Fig. 1）

昭和から平成に元号が変わると、平成7年度のユニバーシアード福岡大会開催決定などを受け都巿基盤整備が進められることになり、福岡外環状道路建設が具体化してきた。平成元～3年に、建設省福岡国道事務所より福岡外環状道路線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に提出された。これを受けて、埋文課は平成2年2月にI工区の井相田地内、平成3年11月にIV工区内の野芥・福重間などで、遺跡の有無および遺構の遺存状態確認のため、用地更地分について試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、博多区井相田地内では中世の水田跡が検出され、本調査実施と決定し、平成3年9月から翌年3月にかけて発掘調査を実施した（西側隣接路線内も本調査対象となっており、報告はT工区内遺跡調査報告のなかで行なう予定である）。

IV T.区内の試掘調査の結果、野芥大藪遺跡内（野芥二丁目、賀茂二丁目）、免造跡内（賀茂二丁目）、橋本一丁田遺跡内（福重二丁目）のほか、次郎丸二・四丁目地内（次郎丸遺跡）、次郎丸一・六丁目、賀茂三丁目地内（次郎丸高石遺跡）、野芥地内（野芥遺跡）で、弥生・古墳時代、古代・中世の遺構の遺存が確認された。この試掘調査結果を受け、埋文課は遺構が遺存している路線内については、記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。

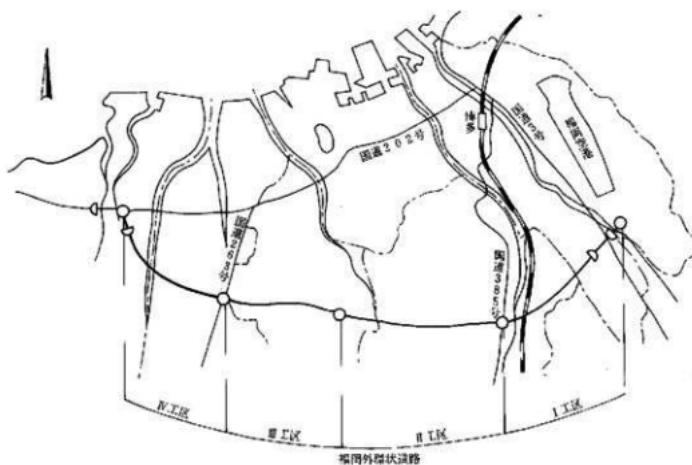


Fig. 1 福岡外環状道路路線図

9209 次郎丸遺跡第1次調査

所在地 早良区次郎丸二丁目地内  
本報告書摘要  
(II 発掘調査の記録 1)



Ph. 1 次郎丸遺跡調査風景(1)



Fig. 2 福岡外環状道路IV工区内調査遺跡位置図

9327 橋本一丁田遺跡第2次調査

所在地 西区橋本一丁目地内  
調査期間 平成5年9月1日～平成6年3月31日  
調査面積 9,178m<sup>2</sup>  
調査担当 池田裕司・中村勢太郎  
報告予定 平成10年度

9510 橋本遺跡第1次調査

所在地 西区橋本地内  
調査期間 平成7年5月22日～平成7年6月15日  
調査面積 1,050m<sup>2</sup>  
調査担当 松山富雄  
報告予定 平成10年度

9303 次郎丸遺跡第2次調査

所在地 早良区次郎丸二丁目地内  
調査期間 平成5年4月19日～平成5年7月26日  
調査面積 1,600m<sup>2</sup>  
調査担当 山崎龍造  
報告予定 平成8年度

## 9233 次郎丸高石遺跡第2次調査

所在地 早良区次郎丸一丁目地内  
本報告書掲載  
(Ⅲ 発掘調査の記録 2)



Ph. 2 次郎丸高石遺跡第2次調査風景



## 9238 次郎丸高石遺跡第3次調査

所 在 地 早良区賀茂三丁目地内  
調査期間 平成4年9月24日～平成5年3月29日  
調査面積 7,955m<sup>2</sup>  
調査担当 山口謙治・中村博太郎  
報告予定 平成8年度

## 9261 免遺跡第2次調査

所 在 地 早良区賀茂二・三丁目地内  
調査期間 平成5年1月6日～平成5年9月21日  
調査面積 2,543m<sup>2</sup>  
調査担当 山口謙治・池田松司・中村博太郎  
報告予定 平成8年度

## 9307 野芥大糞道路第1次調査

所 在 地 早良区賀茂二丁目地内  
調査期間 平成5年5月18日～平成6年6月27日  
調査面積 8,752m<sup>2</sup>  
調査担当 山崎龍雄  
報告予定 平成9年度

## 9454 野芥遺跡第5次調査

所 在 地 早良区野芥二丁目地内  
調査期間 平成6年4月20日～平成6年12月15日  
調査面積 5,555m<sup>2</sup>  
調査担当 山崎龍雄  
報告予定 平成10年度

発掘調査実施予定地については、福岡国道事務所と福岡市土木局外環状道路推進部と埋文課の三者で、発掘調査順・契約などについて協議を重ね、工事工程に合わせた形で、IV工区路線内遺跡の調査を実施した(Fig. 2)。なお、埋文課は福岡外環状道路内遺跡の発掘調査が今後継続すると考えられることから、外環担当職員を配置した。

## 2. 各調査の概要

福岡外環状道路IV工区は、早良平野中央部を横断しており、路線内で、橋本一丁田・橋本・次郎丸・次郎丸高石・免・野芥大蔵・野芥遺跡の7遺跡の本調査を実施した。これらの遺跡については、これまでほとんど発掘調査例がなく、今回の調査で初めて遺跡の様相の一部がわかったといえよう。次郎丸遺跡第1次調査・次郎丸高石遺跡第2次調査については、本書「III 発掘調査の記録」のなかで詳述するが、ここで路線内の他の7調査の概要を調査順にみていき、遺跡の位置と環境を補強することにする。

### 1) 次郎丸高石遺跡第3次調査 (Fig. 2)

#### (1) 位置と環境

調査地は、金屑川中流域西岸の標高10m前後の低位段丘上に位置し、調査前は大半が水田として使用され、一部は盛土され宅地となっていた。

本調査地は地番が賀茂三丁目にあっており、金屑川沿いが免遺跡の線引き内であること、次郎丸高石遺跡第1・2次調査の知見で、第1・2次調査と本調査地間に谷が入ることなどから免遺跡第3次調査として、調査を実施し、調査登録した。しかし、分布地図改訂作業(平成5年度)のなかで検討した結果、金屑川までを次郎丸高石遺跡とすることに決定したため、免遺跡第3次調査(旧)を次郎丸高石遺跡第3次調査(新)と改め、調査登録を行なうこととする。

#### (2) 検出遺構と出土遺物

現代水田耕耘を除去した標高9m前後の面で遺構を検出した。出土遺物としては、石鎌がもっとも古い遺物で、縄文時代か弥生時代のものであろう。古墳時代後半期の遺構は、自然流路と溝があり、須恵器が出土した。奈良時代の遺構は自然流路があり、墨書きのある須恵器・土師器壺が10点前後出土した。12世紀後半頃の遺構は、条里の区画をなすと考えられる溝があり、竜泉窯青磁などが出土した。中世末の遺構は、掘立柱建物・土塹・溝などがあり、青白磁・土師器・墨書きなどがある。

#### (3) まとめ

奈良時代の自然流路から出土した遺物は少量であるが、「城司」などの墨書き土器が目立ち、土器の遺存状態が良いことから、近接地に官衙がある可能性があることがわかった。中世末の建物群は整然とした配置をもっており、富豪層の居住地であったといえよう。また、母屋と考えられる建物の各柱穴から



I・II 調査区 埋蔵

は「一切悪日皆成善日…宿…曜…時…」の墨書きが出土し、当時の風習を考えるうえで参考となろう。

## 2) 免遺跡第2次調査 (Fig. 2)

### (1) 位置と環境

調査地は、金屑川中流域東岸の標高10.5m前後の低位段丘上に位置している。調査前は、対象地の西側は水田、東側は盛土され工場敷地としてそれぞれ使用されていた。

本調査地は、当初、免遺跡第4次調査として調査登録を行なっていたが、平成5年度の分布地図改訂作業の結果、金屑川西岸は次郎丸高石遺跡とし、免遺跡の発掘調査は今回が2回目の実施となるため、ここで免遺跡第4次調査(旧)を免遺跡第2次調査と改めて調査登録する。なお、免遺跡第1次調査は1973年9月から1974年2月にかけて本調査を実施し、報告書が刊行された鶴町遺跡をあてる(力武卓治編1976年『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集)。



井堀検出状況（南から）

### (2) 検出遺構と出土遺物

盛土および現代水田耕土を除去した標高9.2m前後の面で遺構を検出した。

もっとも古い時期のものとしては、アカホヤを除去した面で、遺構は確認できなかったが縄文時代前期の遺物包含層を検出した。この包含層からは、轟式土器とともに石匙・削器などの石器と剝片・削片が出土した。

弥生時代早期から中期の遺構としては、早期・前期・中期の水利施設と考えられる溝・橋・井堀がある。各時期の水利施設からは、突帯文土器・前期・中期の弥生土器とともにそれぞれの時期の諸手鋸・杣・杭などの木製品が出土した。

古墳時代の遺構としては、初頭と後期の溝・自然流路および水利施設であるアーチ状をなす井堀や橋がある。初頭の遺物としては、土師器壺などとともに、平鉗・二又鉗・三又鉗・鏃・建築部材・杣などの木製品が出土した。後期の遺物としては、須恵器の壺身・壺蓋・壺などと、平鉗・板材・建築部材・杭などの木製品がある。



井堀検出状況（上から）

### (3) まとめ

本調査では、弥生時代早期から中期の溝と、古墳時代初頭(弥生時代終末期以前?)から古墳時代後期の旧河川を検出した。弥生時代早期から中期の溝はいずれも幅1m前後で、両側に護岸と考えられる

矢板を並べた構があり、井堰も検出された。水田は未検出であるが、本調査で、早期のものと考えられる諸手鍬があること、免遺跡第1次調査でも前期前半の諸手鍬があること（本調査地出土はクヌギ製、第1次調査出土例はカシ製）と本調査での用水溝・井堰が検出できたことなどから、弥生時代早期から前期前半頃この一帯も水稻耕作が行なわれていたといえよう。

台地際で検出した旧河道は、10m前後の幅をもち、アーチ状をなす井堰が設けられていた。井堰はまず径20cm前後の丸太材を流路方向に敷き詰め、柱材（径30cm前後）を直交して置き、それを径5～15cmの丸杭を用いて多数打ち込み固定している。アーチ状をなす井堰は大きく2ヶ所あり、これに小規模のアーチが数ヶ所付設されている。これら大小の各井堰には土器・木器などの遺物が流れ込んだ状態で出土したが、古墳時代初頭の土器と木器が溜っているところと後期の須恵器と木器が溜っているところがある。このことは、当初、設けられた井堰が洪水等で機能を失うとすぐ近くで再構築が行なわれたことを示しているといえよう。この旧河川は弥生時代の終末期には所在していたと考えられるが、本調査の知見から、少なくとも古墳時代初頭には旧河道に水利施設を設け直接利用するようになったといえると同時に、古墳時代後期まで利用されたと考えられる。

### 3) 次郎丸遺跡第2次調査 (Fig. 2)

#### (1) 位置と環境

本調査地は、室見川の中流域東岸の標高10m前後を測る低位段丘上に位置している。第1次調査地の東側にあたり、県道四箇・次郎丸・弥生線を挟み対面している。なお、第3次調査地は本調査地の南西隣接地にあたる。調査前は水田の上に約1m前後盛土され、工場敷地として利用されていた。

#### (2) 検出遺構と出土遺物

1m前後の盛土および現代水田耕土を除去した標高9.2～9.8mの面で遺構を検出した。遺構は第1・3次調査地と同様、褐色シルトおよび砂礫層を基盤としている。なお、調査区の北東側は灰色シルト中で遺構を検出した。

検出遺構としては、掘立柱建物8棟、櫛3条、石組み井戸2基を含む井戸3基、溝3条、土塙・柱穴多数がある。また、高所部からの落ち際には自然流路や礫群を伴った小溝が巡っている。これらの各遺構からは、古代末から中世にかけての土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器・滑石製石鍋などが出土し、各遺構ごとに時期的にまとまった良好な遺物を得ることができた。

以上の面から30cm前後下位の面で、段落ち状遺構や遺物包含層を検出した。出土遺物としては、突帯文土器・弥生土器・石器類がある。

#### (3) まとめ

本調査地第2面出土の突帯文土器は完形の壺形土器などがあり、遺物に傷みがなく（第1次調査出土は、傷みが激しく小片が多い）、本調査地の南側隣接地周辺に弥生時代早期から前期の集落を予知できる成果といえよう。



調査区全景（東から）

古代末から中世初めの掘立柱建物のなかには2間×3間の身舎に縦廻を巡らす建物があり、建物主軸は東西・南北にとっている。第1・3次調査においても掘立柱建物・井戸・土塙からなる古代末から中世の集落が検出されている。第1・2次調査および福岡外環状道路建設に伴う埋蔵文化財事前調査によって、古代末から中世の集落の幅がわかるとともに、第3次調査によって、集落の南限を抑えることができた。同時期の集落の北限は調査例がないため断言できないが、東西幅120m前後、南北約300mの規模をもっていると考えられる。なお、本調査では第1・3次調査で検出されている古墳時代前半期の遺構はなく、遺物も出土しなかった。

(山崎龍雄 山口加筆)



石組み井戸検出状況（南東から）

#### 4) 橋本一丁田遺跡第2次調査 (Fig. 2)

##### (1) 位置と環境

本調査地は、室見川・十郎川の沖積作用によって形成された標高6.5mの沖積微高地上に位置している。十郎川の東岸にあたり、第1次調査地は本調査地の北西隣接地にあたる。調査前は水田として使用されていた。

##### (2) 検出遺構と出土遺物

調査は、現代水田耕土を除去することから始めた。その結果、耕土直下で中世の遺物を含む溝が検出されたので、これを第1面として調査を行なった。磁北方向の1条を含む溝3条と近世土壙1基を検出した。

第1面下では第1次調査でも検出されている古墳時代前期の面を検出し、これを第2面として調査を行なった。その結果、古式土器がまとまっている土器溜りや土壙と溝1条を検出した。

第2面下の茶褐色土層上面で径5cm前後の小穴を多数検出し、この面を第3面として調査を行なった。その結果、弥生時代早期の突帯文土器を含む前期の土器がかたまとった土器溜りや杭列、土壙、旧河道を検出した。水田址と考えられるが、検出できなかった。

さらに下位の暗褐色粘質土面を第4面として調査を行なった。この面では、井堰と考えられる矢杭列がある河道を検出した。ほかに杭列2ヶ所、土壙、土器溜りを検出した。これらの遺構は刻目突帯文土器単純期のものであり、比較的まとまとった刻目突帯文土器、柳葉形磨製石鎌、打製石鎌を含む石器類、大型蛤刃石斧柄・クヌ



調査区全景

ギ製鍼類・建築部材を含む木製品が出土した。なお、暗褐色粘質土の上部は縄文時代前半の遺物包含層であることがわかった。

### (3)まとめ

4面の調査を行ない、各層で稲のプラントオーバールが検出されており水田の存在が予想されるが、明確な水田は検出できなかった。しかし、突帯文土器単純期・弥生時代前期の井堰など水利施設および鍼類が出土しており、本地域においても弥生時代早前期に水稻耕作が始まったといえよう。また、弥生時代早前期の集落は本調査地の東に所在していると考えられる。

(池田祐司 山口加筆)



井 壕 検 出 状 況

## 5) 野芥大蔵遺跡第1次調査 (Fig. 2)

### (1) 位置と環境

本調査地は室見川の支流である金屑川の東側の微高地上に立地し、標高は約14~15mを測る。当遺跡の西側隣接地には井堰が出土した免遺跡がある。

### (2) 検出遺構と出土遺物

調査は、道路を基準に5区画に区分して調査を実施した。表土は重機で除去し、トラックで場外へ搬出した。各区で検出したおもな遺構は以下のとおりである。

1区 一部2面の調査を実施した。縄文時代晚期の旧河川3条、古墳時代の井堰をもつ水路1条、中世の溝2条、古墳時代の土壙群、近世の溝・土壙・井戸・建物・馬骨土壙群など。

2区 古墳時代以前の旧河川1条、古墳時代前期の溝・土壙、中世の溝など。

3区 2区から続く旧河川と古墳時代の溝、土壙。

4区 縄文時代から古墳時代の旧河川4条、江戸時代の溝2条・土壙、平安時代の埋甕1基。

5区 縄文時代晚期の旧河川1条。

遺物は、縄文時代晚期から奈良時代にかけてと、近世の江戸時代後期から明治にかけての遺物が多く出土した。遺物としては縄文土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の須恵器、中世の陶磁器・土師器、近世の陶磁器などがある。



1 区 遺構検出状況

## (3) まとめ

今回の調査では、縄文時代の旧河川のほか、古墳時代前期の遺構・遺物などが出土している。調査区内では竪穴住居址は確認されていないが、周辺に集落が存在する可能性がある。微高地で遺構は確認されており、各微高地に集落が点在している可能性がある。また、井堰が検出されたことから水田遺構が存在すると考えられる。

各調査区で検出された旧河川は、縄文時代から奈良時代までのもので、金屑川の支流であろうか。

(山崎龍雄)

## 6) 野芥遺跡第5次調査 (Fig. 2)

## (1) 位置と環境

本調査地は、標高15~16mを測る扇状地上の地形に位置している。本遺跡は、従来の分布調査で確認されていたものではなく、福岡外環状道路建設に伴う埋蔵文化財事前調査のなかで実施した試掘調査によって遺構の遺存が検出され、埋蔵文化財包蔵地と認定されたものである。調査前は、一部は水田に盛土され宅地化していた。

## (2) 検出遺構と出土遺物

道路を基準に調査区を設定した。表土は重機で除去し、トラックで場外に搬出した。沖積地であったため、調査は2面ほど行なった。調査区は西側の野芥大蔵遺跡からの通し番号である。

6区 調査は3面について行なった。検出した遺構はピット・溝・土壙などである。溝には水口らしきものもあり、水田遺構の存在した可能性がある。

7区 調査面積が狭く、ピットだけである。

8区 検出した遺構は古墳時代の溝・土壙・ピットのみである。

9区 2面の調査を実施した。古墳から弥生時代の溝・古墳時代前期の竪穴住居址3棟、溝2条、掘立柱建物2棟、横1条、土壙、中世から近世にかけての水田から畑に伴う溝・ピットがある。



1区井堰検出状況（南から）



6区遺構検出状況



9区遺構検出状況

また、西側を中心に水田に伴うと思われる人や牛の足跡が検出された。2面は水田面とピットである。水田面では鞋跡は確認できなかったが、プラントオバールを検出している。

遺物は、縄文時代後期から近世にかけての遺物が出土した。量的には古墳時代の遺物が多く、竪穴住居址や溝から古墳時代の前期から中期にかけての土師器が多量に出土している。おもな遺物としては縄文土器・石器・弥生土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器・陶磁器、近世の陶磁器、古墳時代のガラス玉などがある。

### (3)まとめ

古墳時代の集落を確認できた。遺跡周辺の微高地には集落が点在する可能性がある。また、弥生時代の溝からは突堤史上器期の上器片がかなり出土している。調査区から北側には水田遺構が存在する可能性が高い。

(山崎龍雄)

## 3. 1992・1993年度の調査体制

調査体制としては、1992年度に福岡外環状道路担当として主任文化財主事1名を4月に配置し、10月に文化財主事1名を追加配置した（1993年度は、主任文化財主事1名と文化財主事2名となる）。充分なる調査体制は組むことはできませんでしたが、建設省福岡国道事務所および本市土木局外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力のもとに、本調査・整理・報告からなる発掘調査は順調に進行いたしました。関係者各位に謝意を表します。

調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課 教育長 井口雄哉（前） 尾花剛 前文化部長 花田兎一 文化財部長 後藤直 埋蔵文化財課長 折尾学（前） 荒巻輝勝
1992年度調査担当	山口誠治（主任文化財主事） 中村啓太郎（文化財主事）
1993年度調査担当	山崎龍雄（主任文化財主事） 池田祐司・中村啓太郎（文化財主事）
試掘調査担当	井澤洋一（主任文化財主事） 瀧本正志・加藤良彦・吉武学（文化財主事）
事務担当	入江幸男
調査・整理調査員	大丸陽子 平川敬治 山口朱美
調査・整理協力者	石本恭二・岡崇・後藤和武・柳澤竜廣・小川勝彦・清川朋和・太田寿和・高山義克・永井大志・柴藤裕志・官本周作（以上、福岡大学歴史研究部）赤星播有吉千栄子 池田礼子 大久保沙波 太田明子 吉良山益美 武田裕子 堀江佐和子 松下節子 村田洋子 矢川みどり

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 本書報告遺跡の位置 (Fig. 2・3)

福岡平野は、東から多々良川を中心に広がる柏原平野、御笠・那珂川両河川を中心とする福岡平野、室見川を中心とする早良平野などからなっている。早良平野は、油山系から北へ延びる丘陵と王丸・高祖山を頂とし長垂へ延びる山塊に区切られ、海岸部6kmを底辺とし、南北10kmの二等辺三角形状をなし、その中央を室見川が北流し、博多湾に注いでいる。序説で述べたように、福岡外環状道路IV工区は早良平野のほぼ中央を東西に横切っている。本書報告の次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡は、福岡外環状道路IV工区のはば中央にあたり、次郎丸遺跡が室見川省りで、その東600mに次郎丸高石遺跡は位置している。

次郎丸遺跡第1次調査地（以下、第1次とする）は、室見川中流域東岸の標高10m前後の低位段丘上に位置している。第2・3次は、県道を挟んで第1次の東および東南隣接地にある。第1次は、国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」の北から25.6cm、西から15.2cmにあたる。

次郎丸高石遺跡第2次調査地（以下、第2次とする）は、室見川・金屑川中流域の両河川の中間の標高11.5m前後の沖積微高地に位置している。第1次は第2次の南50m前後、第3次は第2次の東南東100mにあたる。

### 2. 本書報告遺跡をめぐる環境 (Fig. 3)

次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡は、前者が初回、後者が2回の調査であり、福岡外環状道路IV工区近隣の調査はほとんど行なわれていなかった。今回の福岡外環状道路IV工区内7遺跡の調査は、早良平野中央での遺跡の様相把握を可能にしたといえよう（序説・各調査の概要参照）。

早良平野の海岸部には、砂丘が発達し、弥生時代から古墳時代初期の墓地が所在する藤崎遺跡や同時期の集落が所在する西新町遺跡がある。平野中央の洪積台地および低位段丘・沖積微高地上にも多くの遺跡が所在している。その一つが、先土器時代・縄文時代中期～後期・弥生時代から近世初期の大集落が所在する有田遺跡である。平野南奥の扇状地帯をなす沖積微高地上にも、縄文時代から中世にかけての大集落が所在している。弥生時代中期の首長系葬の墓地が所在する東入部遺跡はその一つであり、四箇遺跡では縄文時代前・後・晚期の遺物がまとまってみられる。

室見川西岸の中位・低位段丘上には、先土器時代から古墳時代の人遺跡が所在している。吉武遺跡は、先土器時代・縄文時代後期・弥生時代から古墳時代にかけての大遺跡であり、とくに、弥生時代中期初頭前後には多くの副葬品をもつ木榔墓・甕棺墓からなる首長墓群、大形遺物などが検出されている（国史跡大石遺跡）。国史跡野方遺跡は、弥生時代終末から古墳時代初頭の環濠集落遺跡である。また、中位段丘から山塊にかけては後期古墳群が所在している。

室見川支流金府川東岸の中位・低位段丘上にも、弥生時代から古墳時代の集落が所在している。飯倉遺跡もその一つである。また、中位段丘から油山山塊にかけては後期古墳群が密集している。

福岡外環状道路IV工区路線内7遺跡の調査をとおしてみていくと、いずれも水稻耕作にからむ水利施設が検出されている。早良平野においても、橋本・丁田遺跡の調査から、弥生時代早期の突堤式土器單純期に水稻耕作が開始されたと考えられる。拾六町ツイジ・免・四箇・田村・湯納・下山門遺跡で、弥生時代から古墳時代の水田・水利施設が検出され、農具が出土している。



0315 次郎丸遺跡群	0252 鮎舟 E 遺跡	0313 鮎東遺跡群	0347 三郎丸古墳群	0402 刃切遺跡群
2447 次郎丸高石遺跡	0253 鮎舟 F 遺跡	0317 田村遺跡群	0359 穂乃久遺跡群	0403 刃切高石町遺跡群
0240 西御町遺跡群	0254 鮎舟 G 遺跡	0318 免道跡群	0360 徒木ノ口遺跡	0405 吉武遺跡群
0243 鮎舟 H 遺跡	0269 クヌノ遺跡	0319 伊勢浜跡群	0391 奈木浜跡群	0523 野方中浪遺跡
0245 鮎舟 I 遺跡	0307 霧崎遺跡群	0320 円塚丘跡群	0395 奈木浜田遺跡	0541 羽村口原 A 遺跡群
0246 鮎舟 C 遺跡	0339 有田遺跡群	0322 F1型窓邊櫛群	0393 奈木浜田遺跡	2412 双ヶ丘遺跡群
0247 鮎舟 J 遺跡	0311 里遺跡群	0323 霧崎遺跡群	0296 羽根川原 B 遺跡群	2448 芹泽大森遺跡
0248 村山遺跡	0312 有田 E 遺跡	0324 重説村下毛跡	0299 有田 F/H/C 遺跡群	

Fig. 3 次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡の位置と周辺の遺跡

### III 発掘調査の記録

#### 1. 次郎丸遺跡第1次調査

遺跡調査番号 9209 遺跡略号 JRM-1 分布地図番号 092-0315  
調査地地籍 早良区次郎丸二丁目563~570外 調査実施面積 1,955m<sup>2</sup>  
調査期間 1992年5月19日~1992年8月29日

## 1) 調査概要 (Fig. 4・5)

道路建設予定地は、幅40mで次郎丸・四丁目地内を東西に横断している。平成2・3年度の試掘調査によって、中世の遺構の所在が確認され、次郎丸遺跡が南へ拡がっているとして本調査の対象となった。この地区で本調査の対象となったのは、県道四箇・次郎丸・弥生線を挟み東側と西側である。本調査は、県道東側が未買収地であるため県道西側から実施することとなった（県道東側は第2次調査とし実施）。調査対象地は幅40m（南北）で、東側が県道、西側が市道によって区切られた台形をなす区域と市道の西側の三角地である。台形の区域をI区、三角地を0区として対象地全域の調査をめざした。しかし、I区の北側は水田として使用されており、I区北西部には幅60cm前後の用水溝があるため、約300m<sup>2</sup>については調査対象から除外した。また、南北の水田との境界は水田が今後も使用されるため2m前後の引きを取り、調査区を設定した。

調査はI区から着手し、盛土（東側）および現代水田耕土をバックホーを使用し除去することから始めた。その結果、標高9.5m前後の黄褐色シルトおよび砂礫層上面で、古墳時代と古代末から中世の遺構が確認できたので、この面を第1面として精査した。古墳時代の大溝中から弥生時代の土器が一定量出土したため、北側の320m<sup>2</sup>について下層遺構の確認を行なった結果、標高9.2m前後の面と柱穴や溝状をなす弥生時代早期から中期前半の遺構を検出した。なお、0区は盛土および水田耕土を除去した9.5m前後の面で、古墳時代の溝および古代末から中世の遺構を検出した。

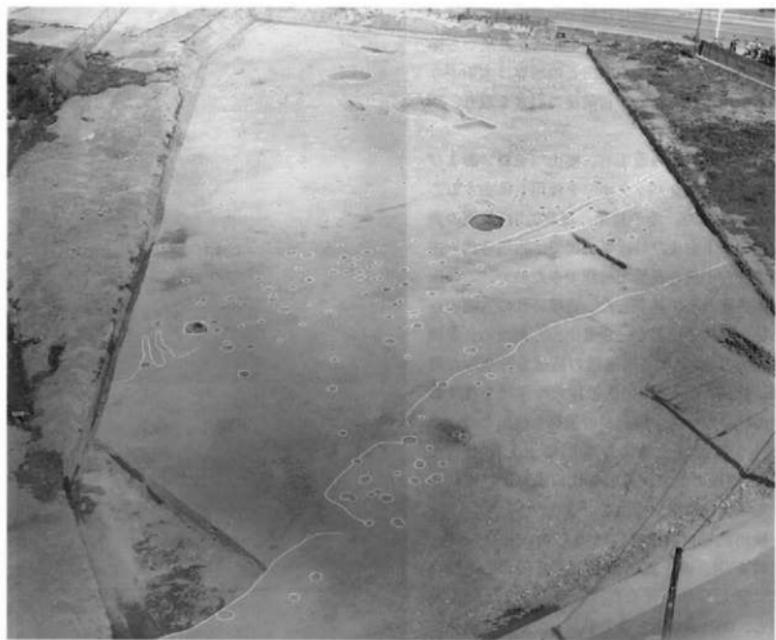
検出遺構は、掘立柱建物をSB、井戸をSE、土壙をSK、溝をSDと遺構記号を使用し、検出順に通し番号を付した。また、柱穴はSPを使用し、0001から通し番号を付した。出土遺物については、土器は920900001から、石器は920901001から、鉄器は920902001から通し番号



Ph. 3 次郎丸遺跡調査風景 (2)



1) 調査区全景（西から）



2) I区上層遺構検出状況（西から）

Ph. 4 次郎丸遺跡調査区全景 (1)



1) 拡張区遺構分布状況



1) 0区遺構分布状況

Ph. 5 次郎丸道路調査区全景 (2)

を付し、登録番号とした。本書においては、遺構名・遺構記号を併記し、遺物は登録番号を使用する。

## 2) 弥生時代の遺構と出土遺物

標高9.2mの黄灰色シルト面で、SD-12・13の溝状をなす上器面りと柱穴を検出した。

### (1) 第12号溝状遺構 (SD-12) (Fig. 6, Ph. 6)

幅6m、深さ35cm前後で暗灰色シルトを覆土とし、突帯文土器・弥生土器が出土した。SD-13も同様の覆土上で、遺物も同じようなものと黒曜石・古銅輝石安山岩製の剝片・削片が出土した。溝状遺構としたが自然作用によって生じた窪地に遺物が流れ込んだものか。

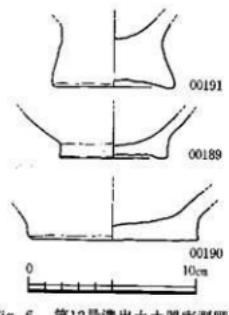


Fig. 6 第12号溝出土土器実測図

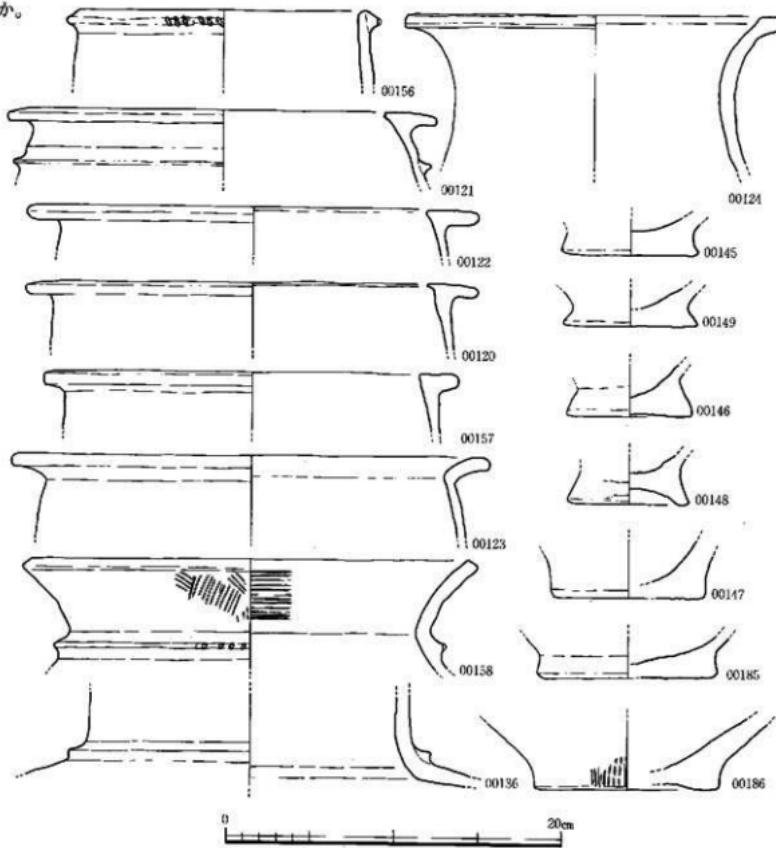
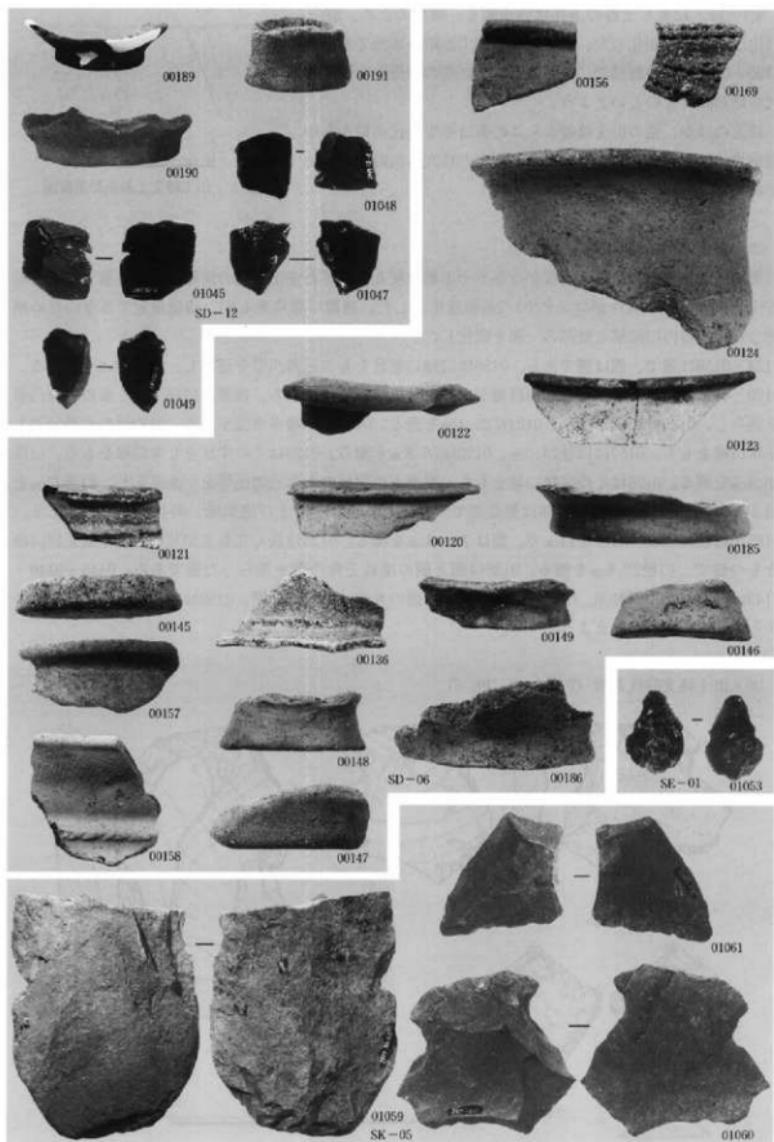


Fig. 7 出土弥生土器実測図



Ph. 6 第12号溝および縄文・弥生時代出土遺物

SD-12・13とも土器の遺存状態が悪く、細片のため、SD-12出土の3点を図化した。0189は突帯文土器期の底部で壺か。0190・0191は壺の底部で、後者は厚い上げ底の特徴から弥生時代中期初頭のものといえよう。

以上のほか、他の出土遺物からこの面は弥生時代前期から中期前半にかけての面であり、この面検出の柱穴は同時期のものであろう。

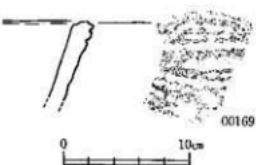


Fig. 8 出土縄文土器拓影実測図

#### (2) 出土弥生土器 (Fig. 7, Ph. 6)

第6号溝積塗中に、弥生土器がコンテナ1箱程度と古銅輝石安山岩製の削器、黒曜石製・古銅輝石安山岩製の剝片・削片がコンテナ1/2箱程度出土した。削器は数点あるが、時期限定できないため割愛した。土器の口縁部と底部の一部を図化した。

0124・0136は壺で、他は壺である。0156は口縁に刻目をもつ三角凸帯を巡らし、口径18.6cmを測る。0120・0121は、逆L字状をなし口縁端がやや垂れ気味の口縁をもち、後者は口縁下に一条の三角凸帯を巡らし、0120は口径26.8cm、0121は25.4cmを測る。0157は口縁平坦面が短く、0122はやや長い逆L字状口縁をもち、0157は口径24.6cm、0122は26.8cmを測る。0123はくの字状をなす口縁をもち、口径28.4cmを測る。0158はくの字状口縁をもち、屈曲下に刻目のある三角凸帯を一条巡らし、口径27cmを測る。0145～0149・0185・0186は壺底部で、0146と0186はやや上げ底気味、0148は上げ底である。0185が底径10.6cm、0186が11cmで、他は7～8cmを測る。0124は長く立ち上がりや広く鋸先状口縁をもつ壺で、口径22.6cmを測る。0136は頸と胴の境に三角凸帯を巡らした壺である。0145・0146・0149は前期から中期初頭、0121・0156は中期初頭のもの、0123は後期、0158は終末期、他は中期前半から中期末のものといえよう。

#### (3) 出土縄文時代遺物 (Fig. 8・9, Ph. 6)

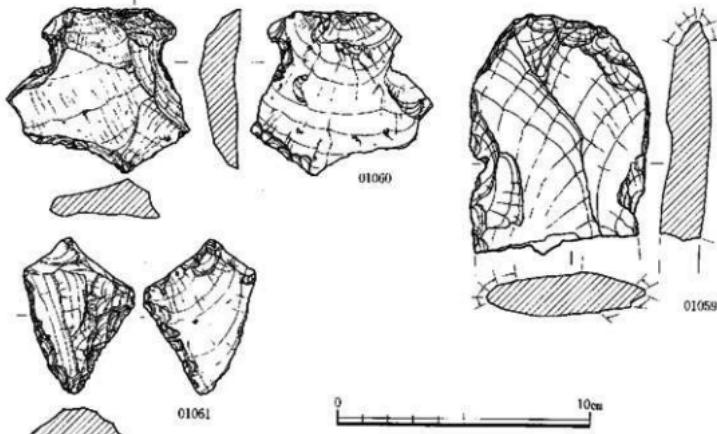


Fig. 9 出土石器実測図

0169は第6号溝から出土した。胎土に滑石を多く含み、沈線・指突文を配置し文様としている。中期の並木式上器の範疇。1060・1061・1059の石器は第5号土壤出土で、前二者は古鋼輝石安山岩製の石匙と削器であり、後者は打製石斧か。後期か。

### 3) 古墳時代の遺構と出土遺物

#### (1) 第6号溝 (SD-06) (Fig. 10~11, Ph. 7~8)

本溝は調査区I区西側で検出し、N-26°-Eの主軸をとっている。輪は南側で6.5mで50cm前後の深さをもち、北側では幅10m前後で深さ90cm前後となっており、北へいくにしたがって幅広となり、深くなっている。灰色・黒色・褐色の砂礫・砂・シルト・粘土が互層となって堆積して覆土となっている。横断面でみると中途に標をもち、2段掘り状をなしている。溝検出面下10~30cmの溝西側では、高坏・小形丸底壺・壺などの上器が並べ置かれた状態で出土した。高坏は坏部と脚部が遊離したものが多いが、坏部は口縁を上に、脚部は底が下になるように置かれており、出土遺物のなかでもっとも多い。次に多いのが小形丸底壺で、ほぼ完形が多く、口縁が上で底を下に据え置くという状態で出土した。壺は小形から中形のものが多く、小形は小形丸底壺と同様な状態で出土したが、中形・大形のものは横になって潰れた状態で出土した。

以上のように、坏部のみや脚部のみの高坏、小形丸底壺などの上器が据え置かれた状態で出土した。また、土器が置かれたところから上の堆積層（第1~5・8層）が水平層をなし、人為的に埋められたと考えられる。以上から本溝は、洪水などで機能を失った用水に土器などの遺物を並び置き祭祀を行なったといえよう。本調査および次郎丸遺跡第3次調査で、本溝と本溝切り換え溝と考えられる大溝が検出されている。本溝での祭祀例は、古墳時代における用水廃棄に伴う祭祀の一つのあり方であるといえよう。

#### (2) 第6号溝出土遺物 (Fig. 12~23, Ph. 9~23)

本溝からは、壺、鉢、小形丸底壺等の壺、高坏等の多量の上器、砥石、鉄器、鐵滓など古墳時代の遺物と前述した弥生時代・繩文時代の遺物が出土した。以下、出土上器からみていくことにする。  
**壺 (Fig. 12~15・18, Ph. 9~13, 00014 (以下、2桁か4桁で記す)・23・45・46・48~51・65・66・72~76・98・99・0101・0109・0111・0112・0115・0116・0118・0119・0125~0131・0133~0135・0150~0152・0161・0162・0179・0180・0183・0184) :** 出土壺のうち44点を図化した。いくつかの器形に分けてみていくことにする。23・50・51は、球状をなす肩から屈曲してやや開き気味に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端はナデ調整などによって面をなしている。肩外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施され、器壁は薄い。口径は51が15cm、23が16cm、50が18.4cmである。45・48・73・74・0111・0119・0179は、球状に近い肩から屈曲してやや開き気味に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。肩外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施され、口縁内外面はナデ調整によってハケ目調整を消しているが、一部にハケ目調整がみられる。器壁は74が薄いが、23などよりは厚い。74は口径12.5cm、器高19.8cm。他の口径は0179が12.5cm、0119が18.6cm、45が14.8cm、48が14cm、73が14.6cmである。46・75・0101・0180は球状に近い肩をもち屈曲してやや開き気味に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。肩外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施され、口縁内外面もハケ目調整が施されている。口縁外面上から口縁端にかけてはナデ調整が加えられている。なお、口縁・肩とも器厚がほぼ同じである。46は口径14cmで器高16.5cm、0180は口径11.8cmで器高18.4cm。他の口径は75が14.4cm、0101が16.7cmである。49・72は肩が張った肩から屈曲



1) 検出状況（北から）



2) 北から

Ph. 7 第6号溝遺物出土状態



1) 第6号溝（南から）



2) 第15号溝（東から）

Ph. 8 第6号溝遺物出土状態および第15号溝完掘状況

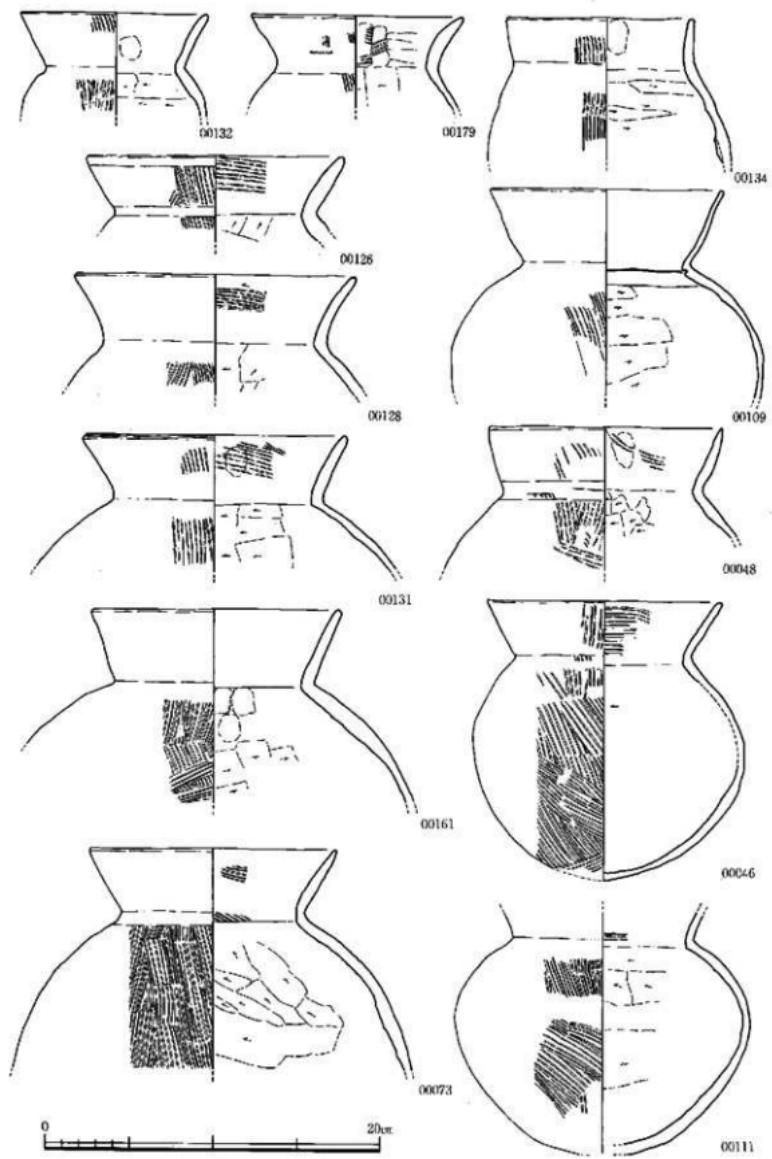


Fig. 12 第6号溝出土土師器壺実測図(1)



00109



00180



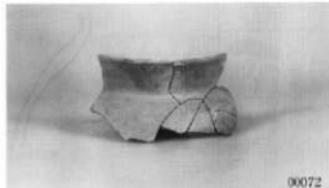
00161



00074



00044



00072



00046

Ph. 9 第6号溝出土土器甕(1)

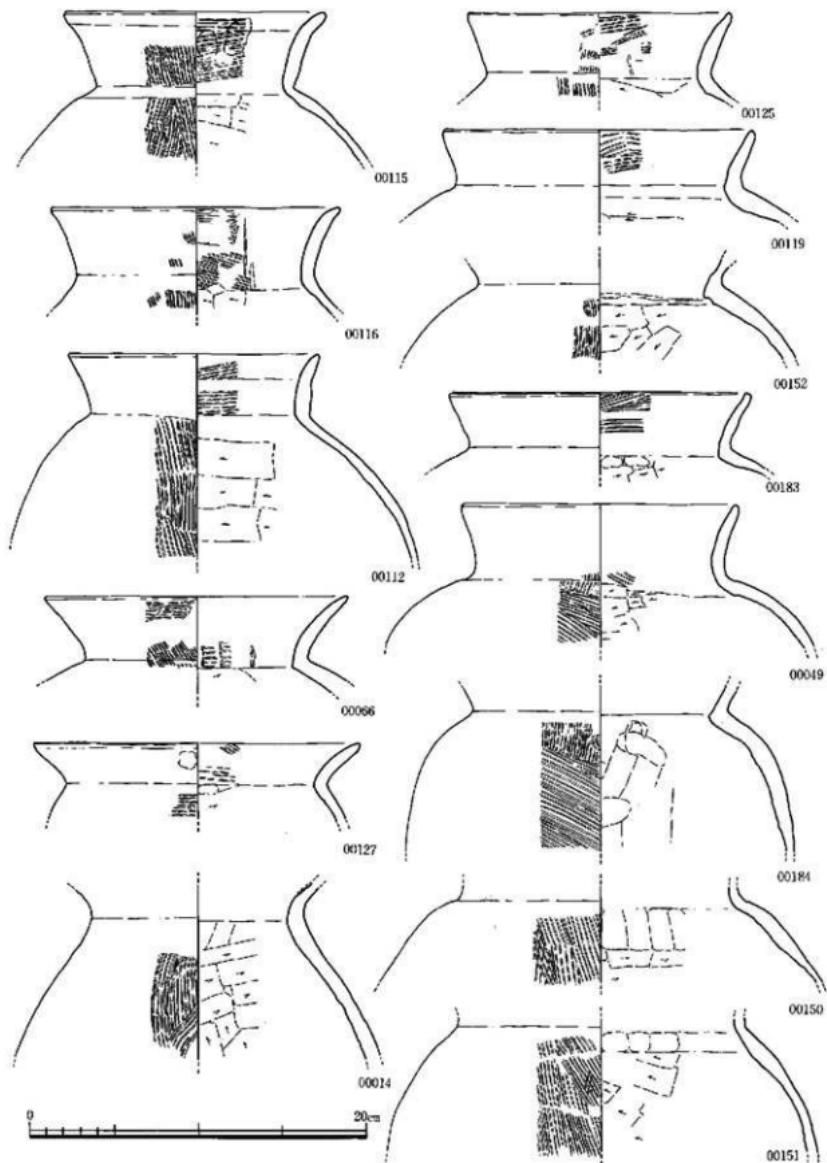
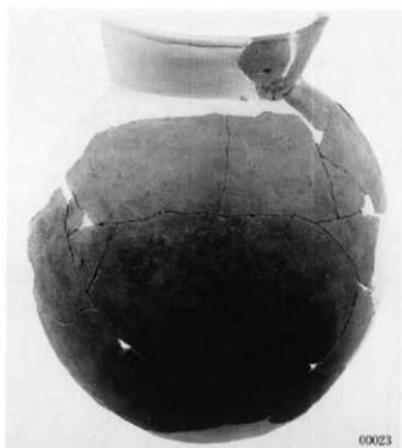


Fig.13 第6号溝出土上部器物実測図(2)



Ph.10 第6号溝出土土師器壳(2)

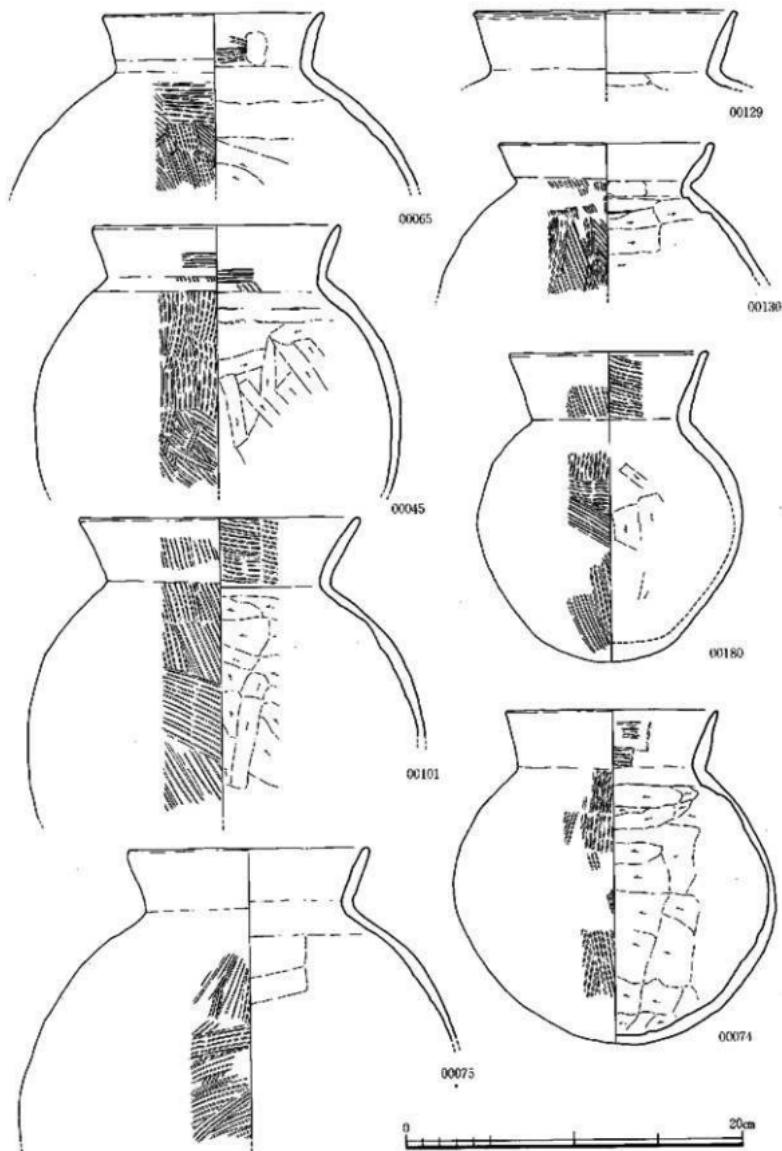
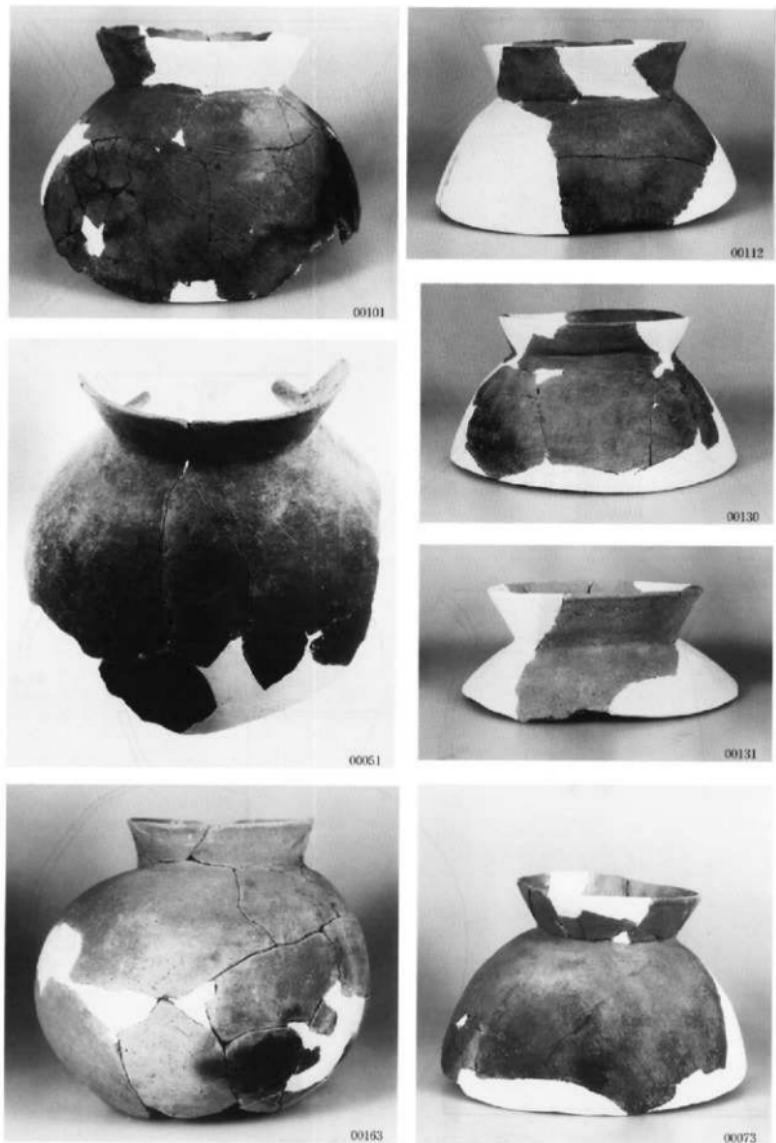


Fig.14 第6号溝出土土器壺尖測図(3)



Ph.11 第6号溝出土土師器壺(3)

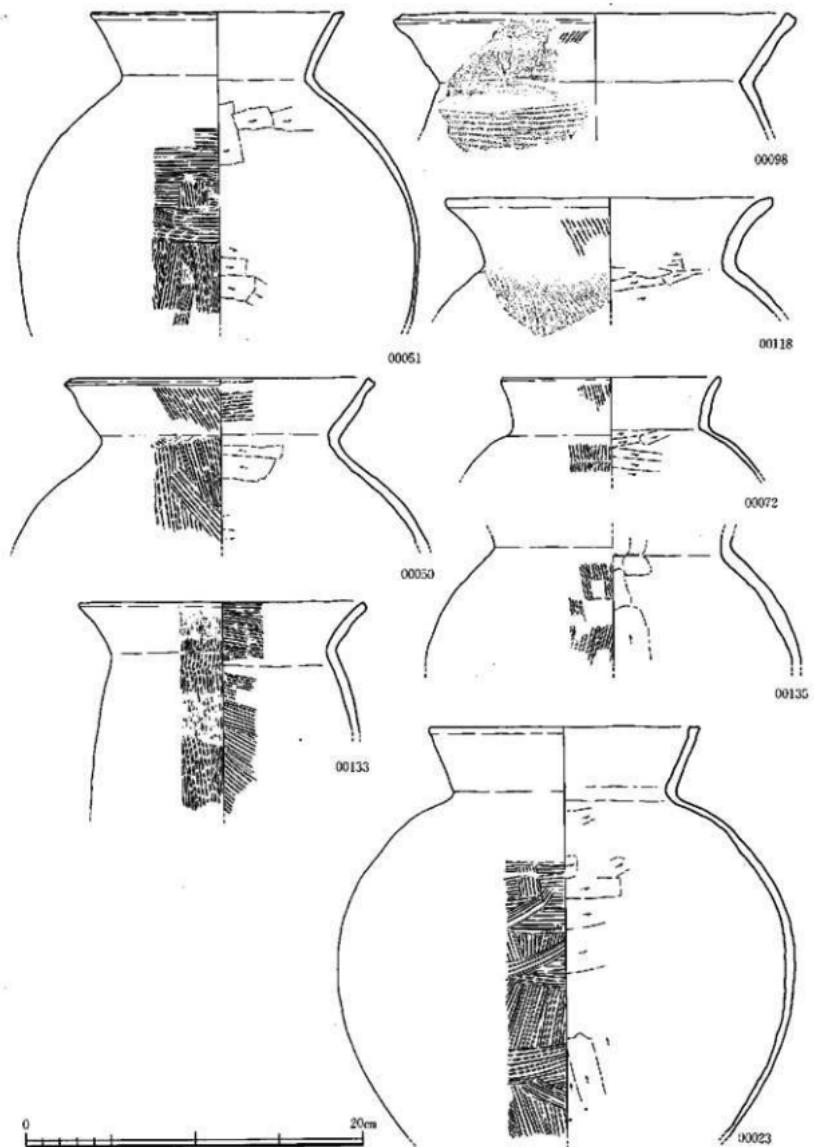
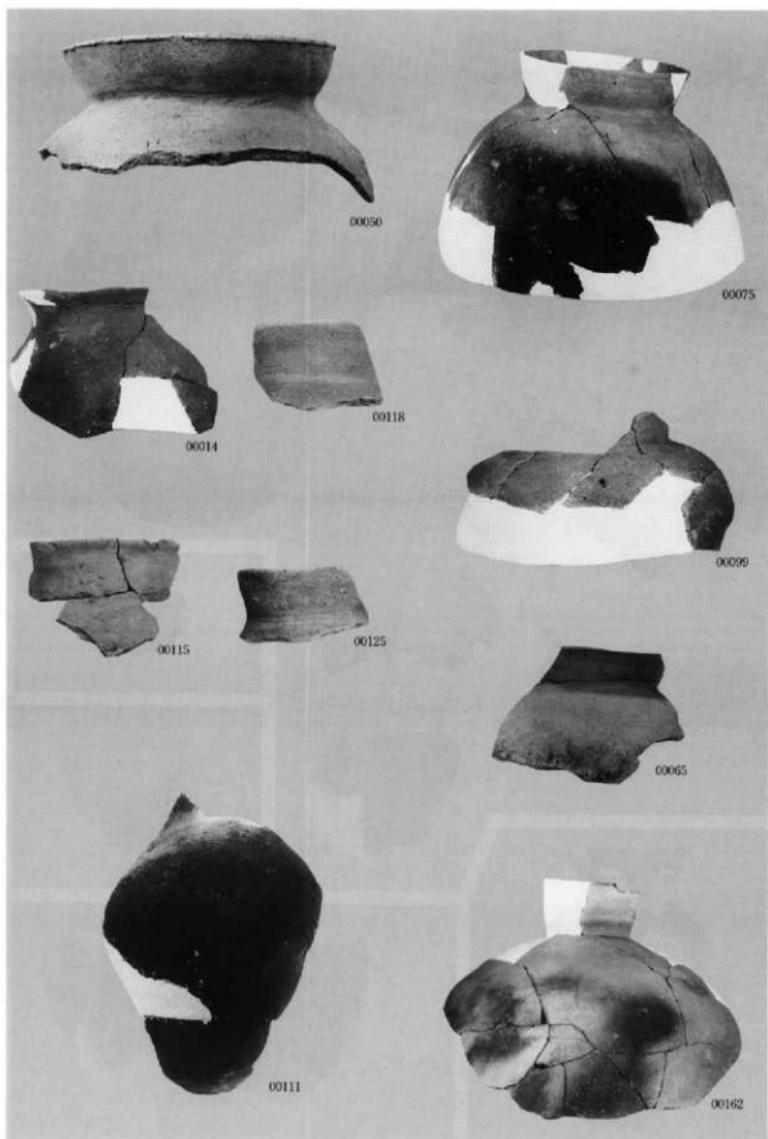
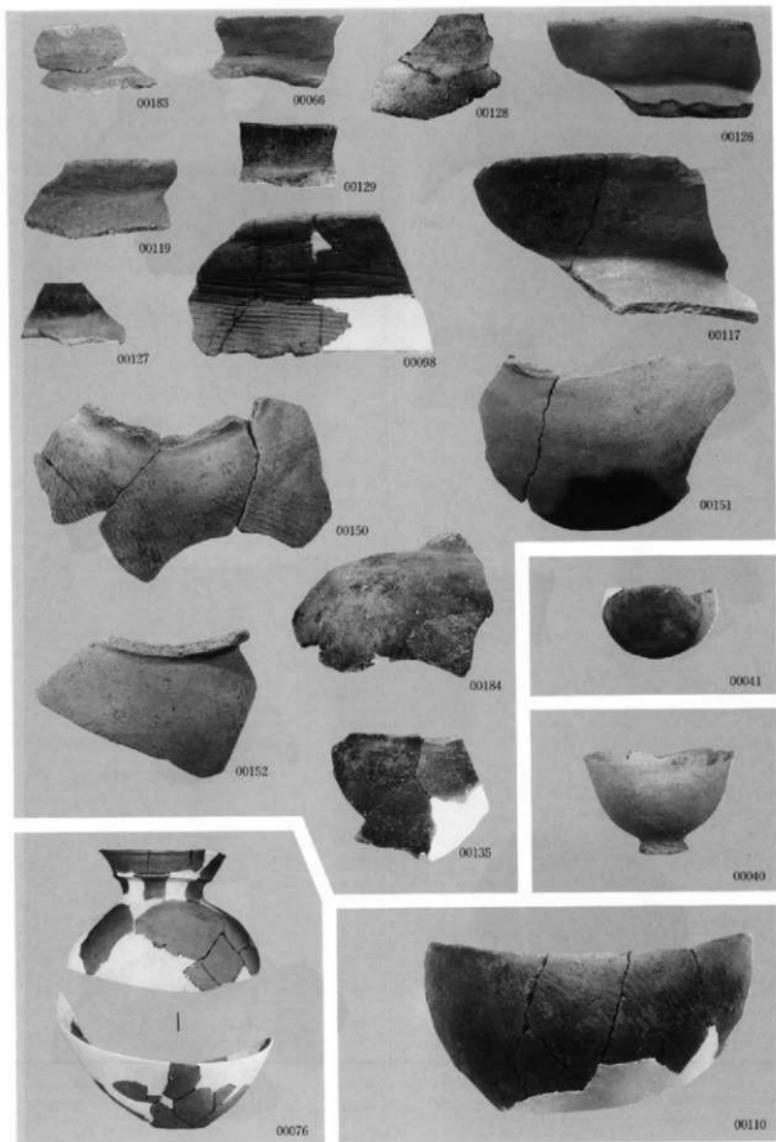


Fig. 15 第6号溝出土土師器甕実測図(4)



Ph.12 第6号溝出土土師器壺(4)



Ph.13 第6号溝出土土師器壺・鉢

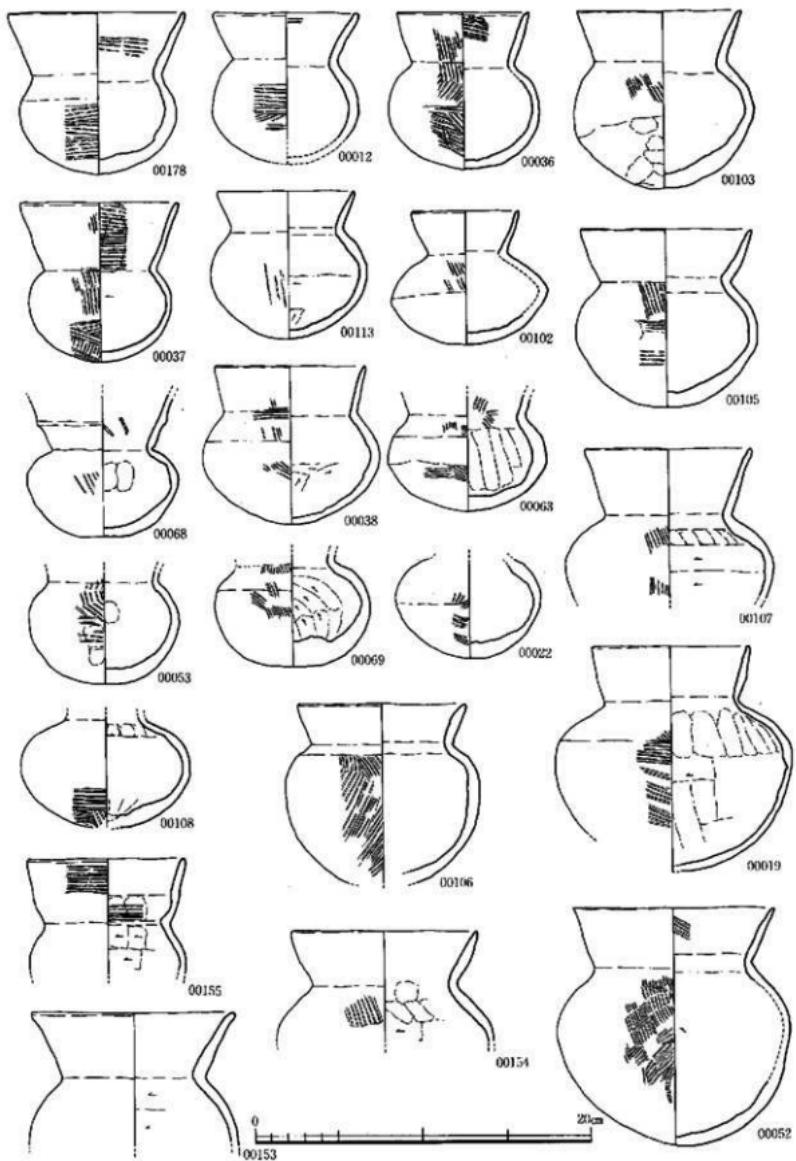


Fig. 16 第6号溝出土土器器表斜面図(1)

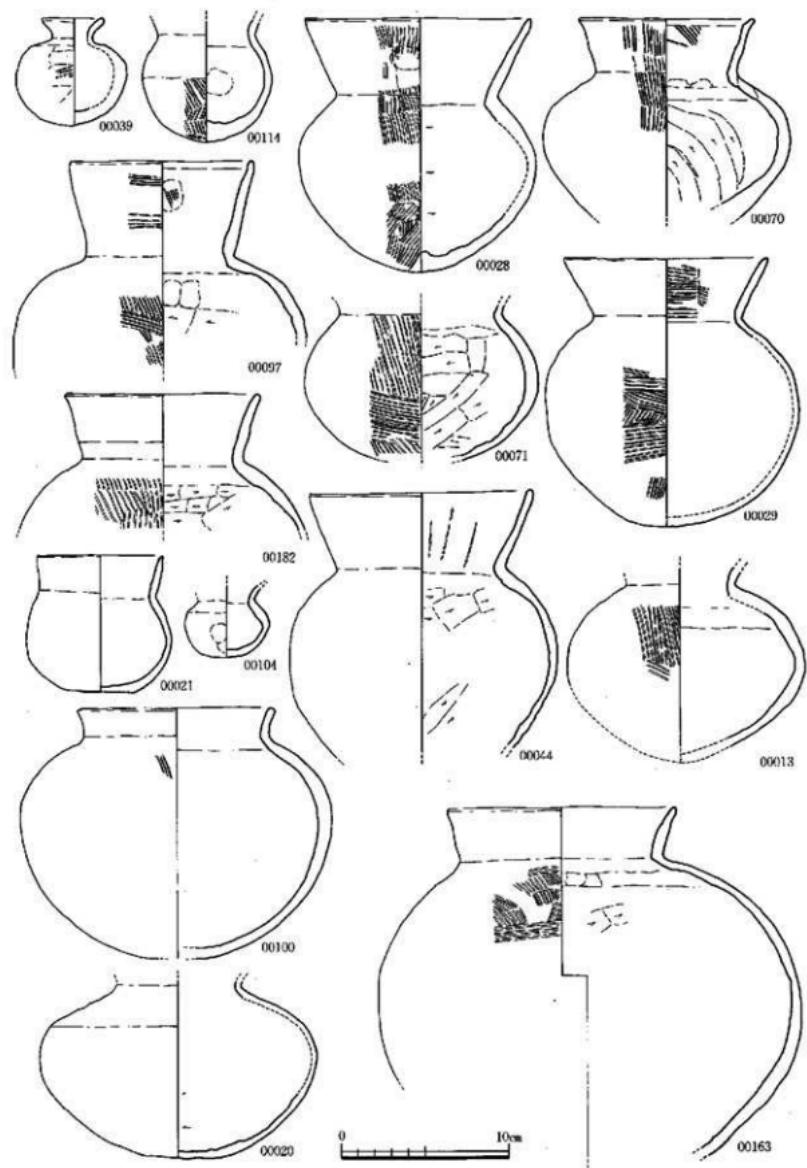
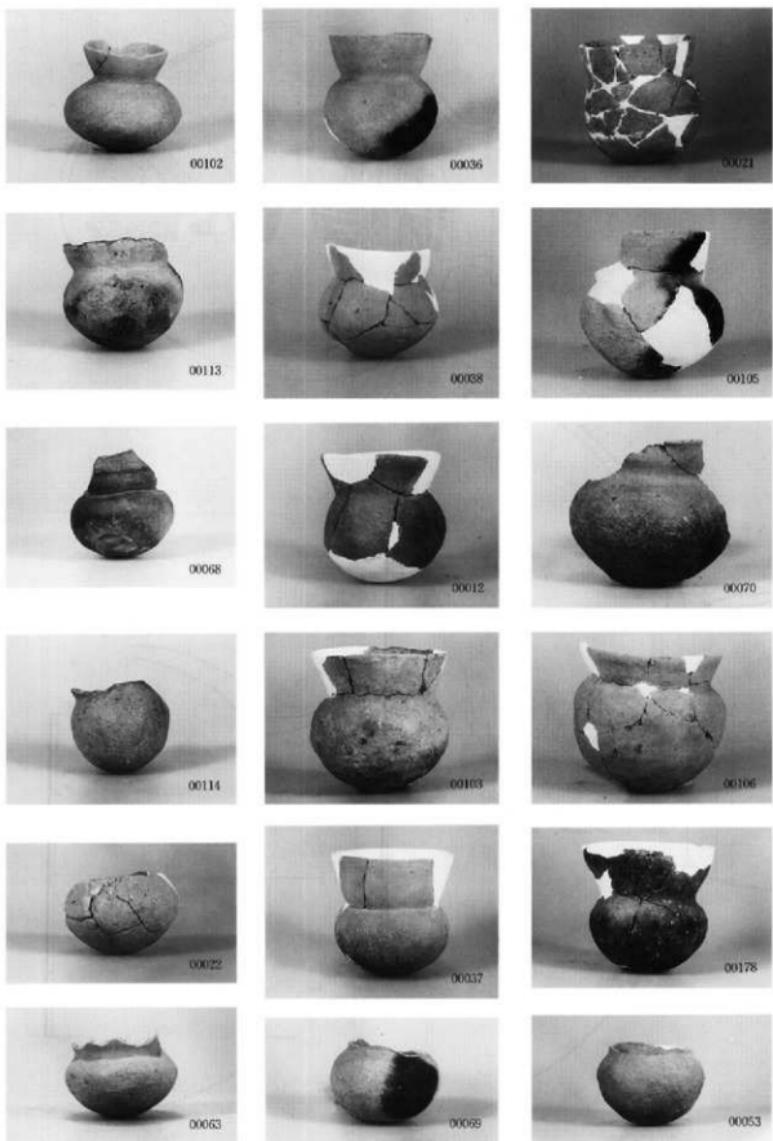


Fig. 17 第6号溝出土土師器蓋実測図(2)



Ph. 14 第6号溝出土土師器小形丸底壺

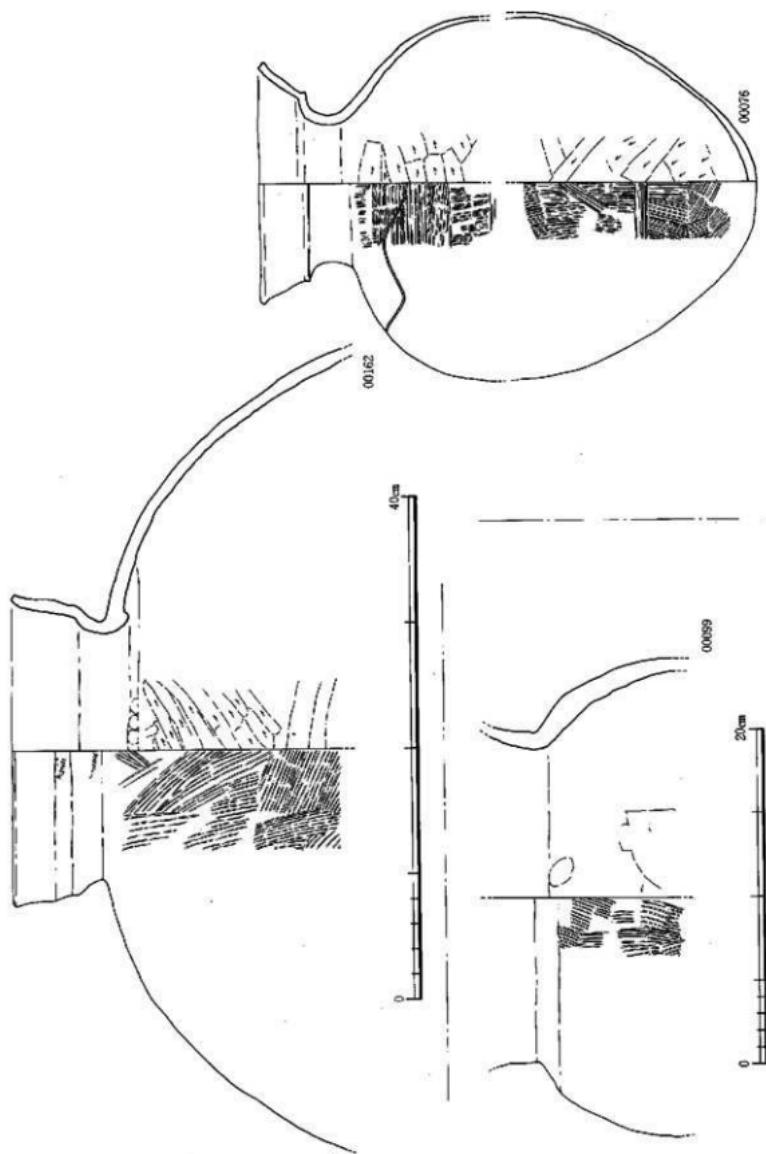
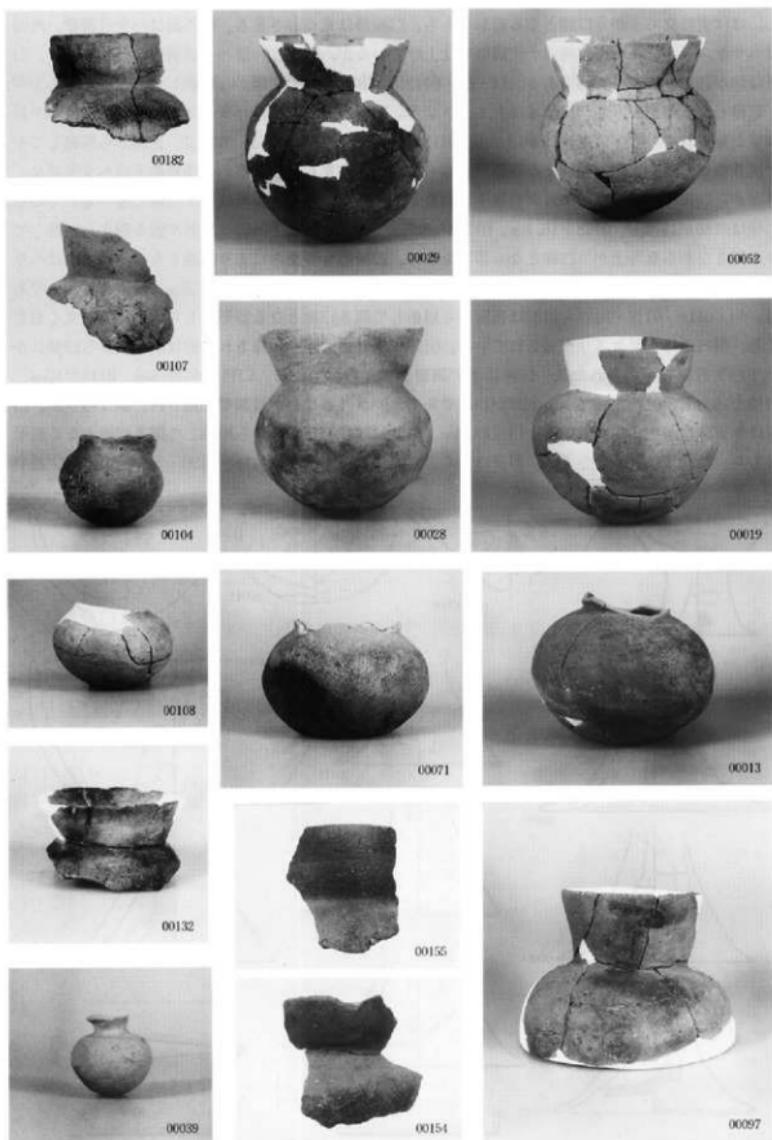


Fig. 18 第6号墳出土土師器壺実測図(5)



Ph.15 第6号溝出土土師器壺

し、ほぼ直に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。胴外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施され、口縁はナデ調整で仕上げているが、外面に一部ハケ目調整が残っている。口径は49が16.4cm、72が13cmである。14・65・0112は、丸みをもつ長胴から屈曲してほぼ直に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。屈曲下の内面にはヘラケズリ、胴外面にはハケ目調整が施されている。口径は65が13.2cm、0112が14.8cm。0126・0128・0131は、長胴から屈曲してやや開きながら立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。内面屈曲下はヘラケズリ、外面から口縁にかけてはハケ目調整後ナデ調整が加えられている。器壁は胴・口縁とも一定している。口径は0126が15.2cm、0128が16.8cm、0131が15.7cmである。0129・0183は、肩が張る胴から屈曲してやや開きながら立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端をつまみにより沈線をもつ。胴内面はヘラケズリ、外面から口縁にかけてはナデ調整が施されている。口径は0129が15.6cm、0183が17.8cmである。66・0116・0118・0125・0127は長胴から屈曲して開き口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。胴内面はヘラケズリが施されている。0118の胴外面は叩きが施され、他は胴外面から口縁にかけてハケ目調整が施された後、口縁はナデ調整が加えられている。口径は66が18cm、0116が17cm、0118が19.4cm、0125が15.5cm、0127が19cmである。98は外面はハケ目調整が施され、胴は叩きが、口縁はナデ調整が加えられている。口径23.8cm。0109は球状をなす胴から屈曲して開き口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさまる。器壁は薄く、口径13.8cmを測る。0115・0130・0133・0161は、長胴

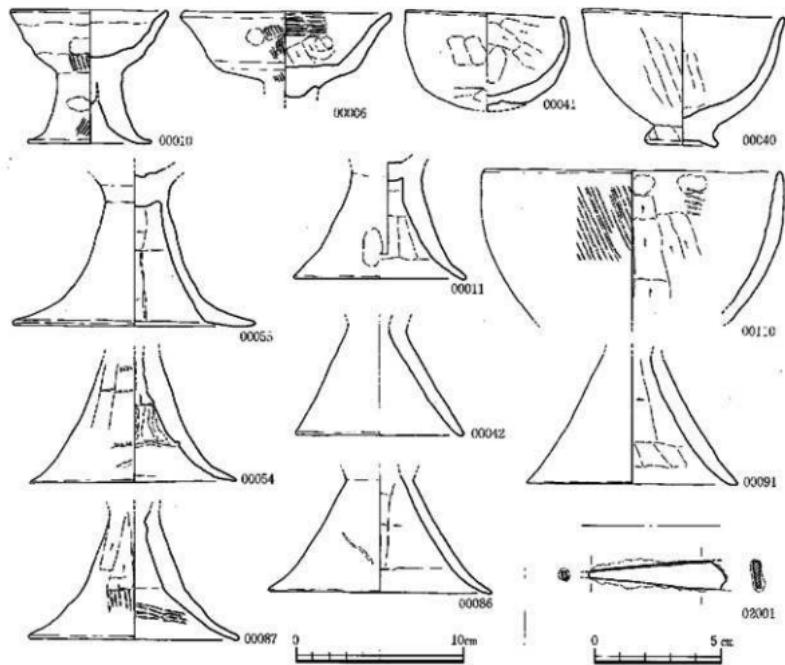


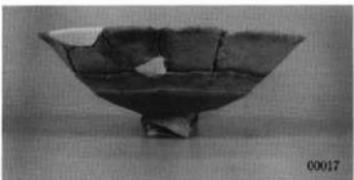
Fig. 19 第6号溝出土遺物実測図



Ph.16 第6号溝出土土師器高杯(1)



00137



00017



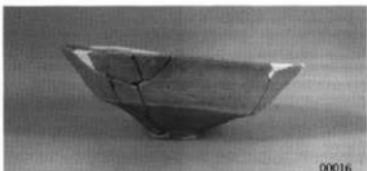
00015



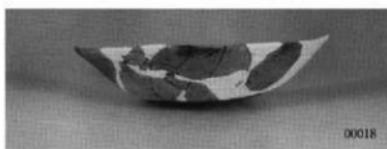
00142



00001



00016



00018



00125



00141



00138



00005



00139

Ph.17 第6号溝出土土師器高坏(2)

三 発掘調査の記録

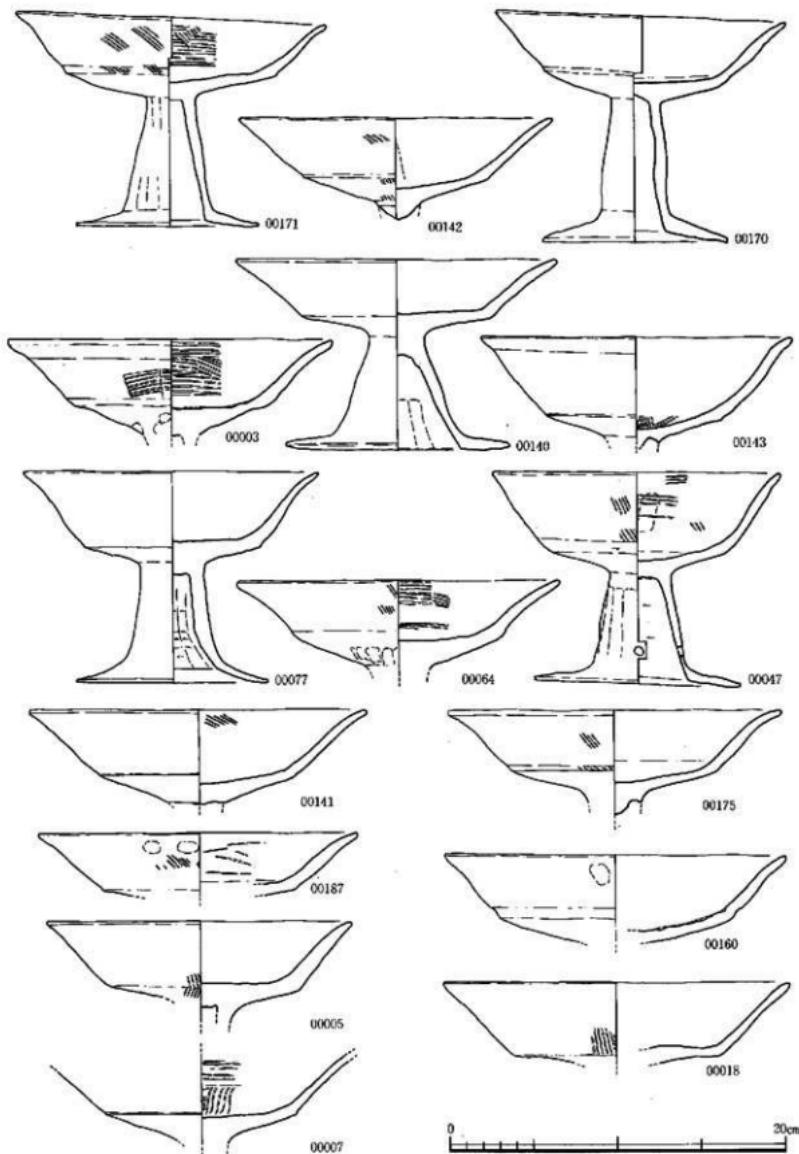
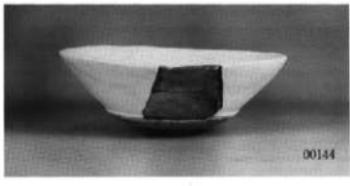
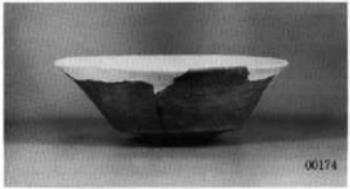


Fig. 20 第6号溝出土土師器高坏実測図(1)



Ph.18 第6号溝出土土器高坏(3)

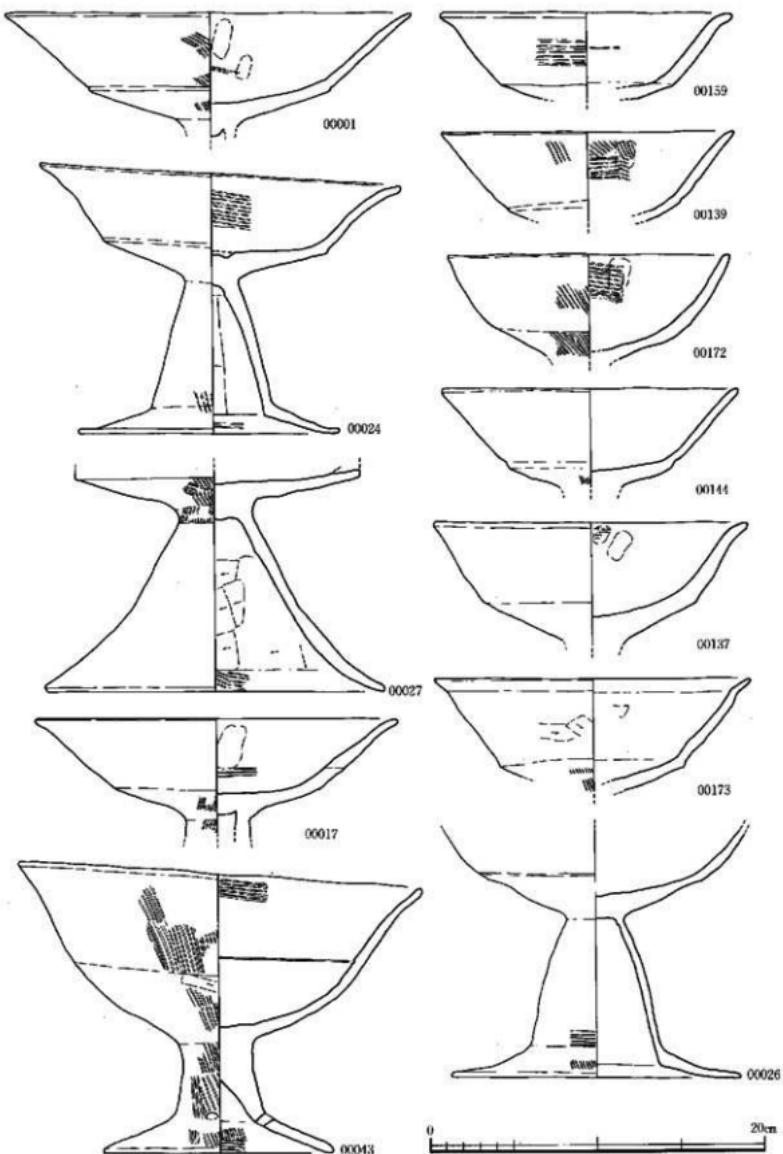


Fig. 21 第6号溝出土土師器高坏実測図(2)



00003



00187



00007



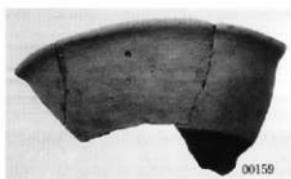
00064



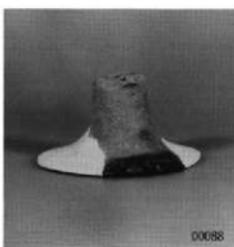
00095



00084



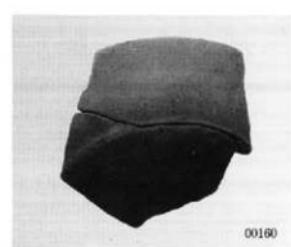
00159



00088



00089



00160



00176



00094



00027

Ph.19 第6号溝出土土師器高坏(4)

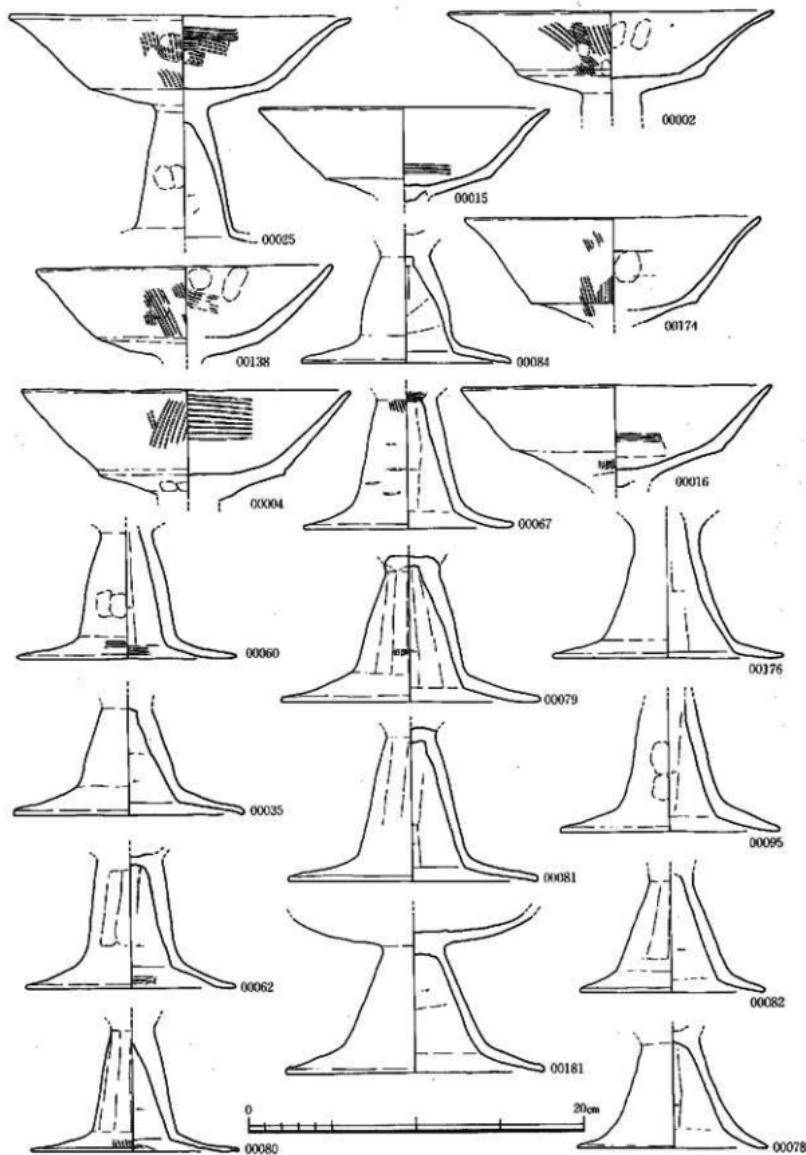
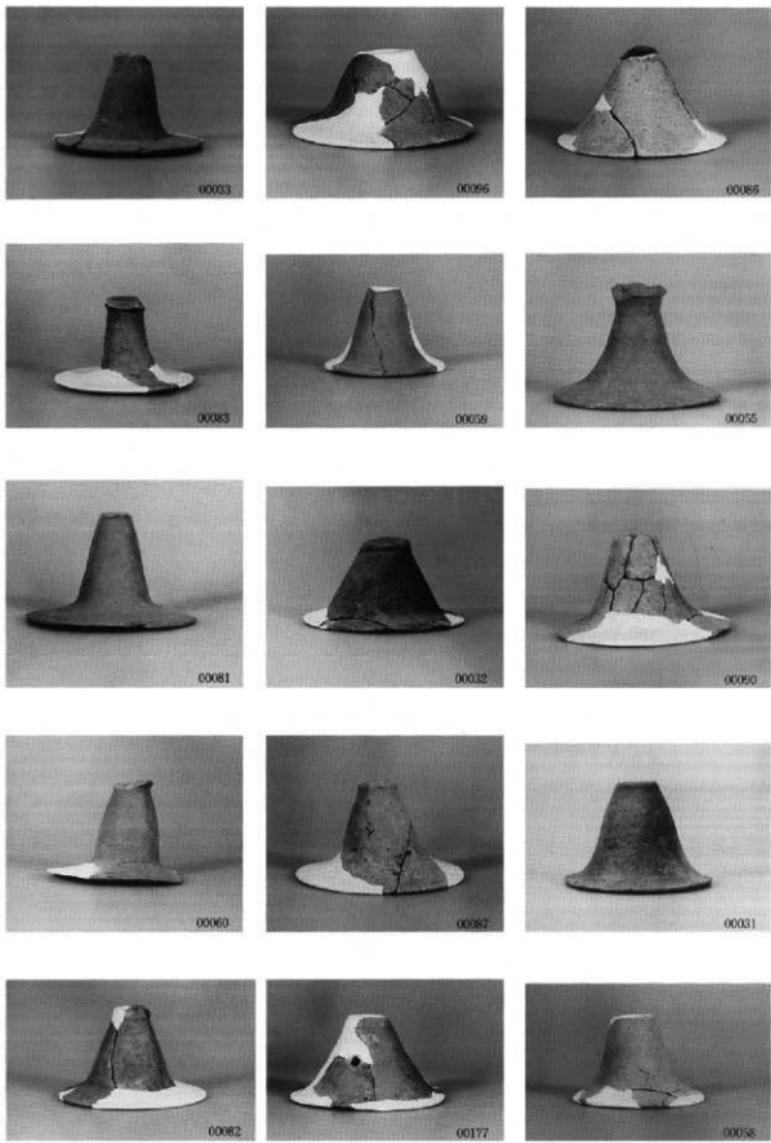


Fig. 22 第6号海出土土師器高环実測図(3)



Ph.20 第6号溝出土土器高坏(5)

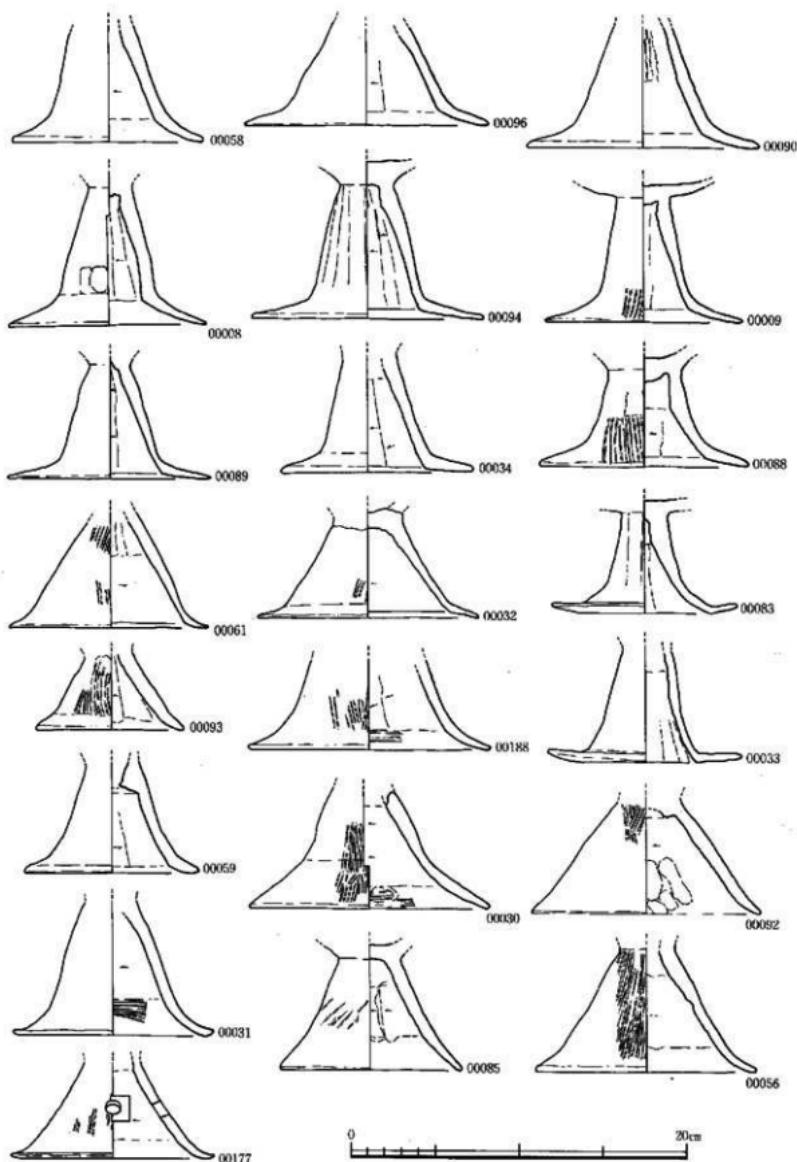
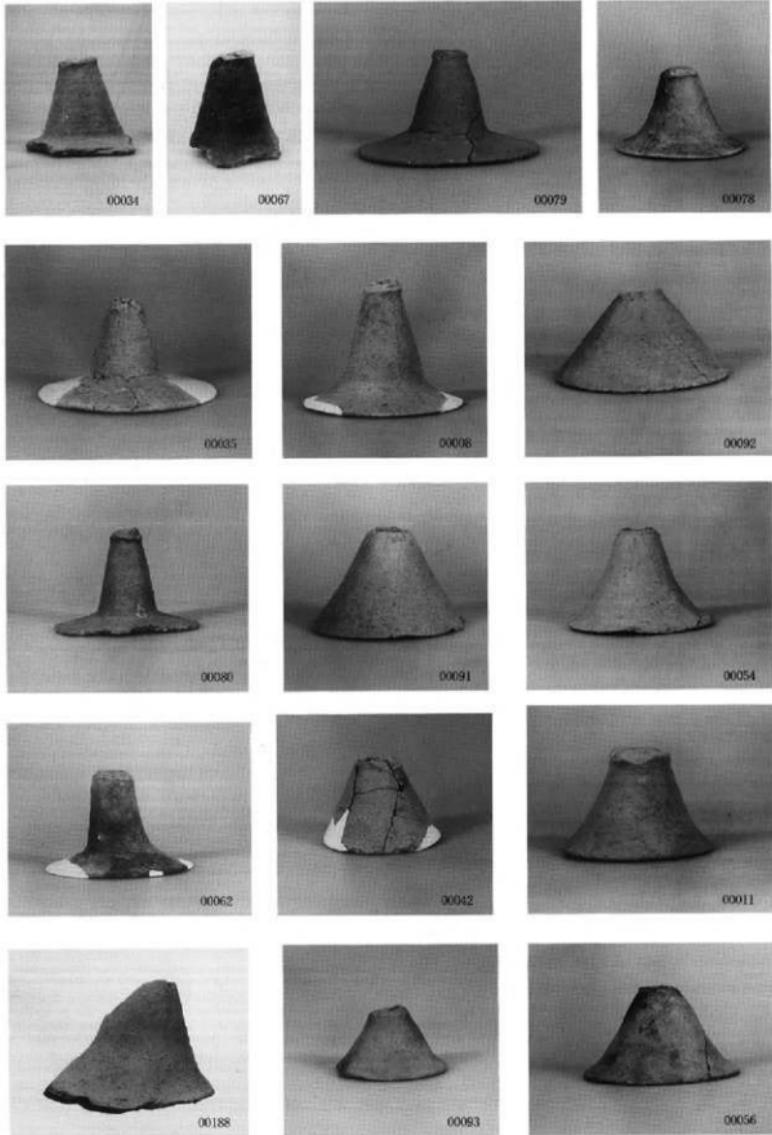
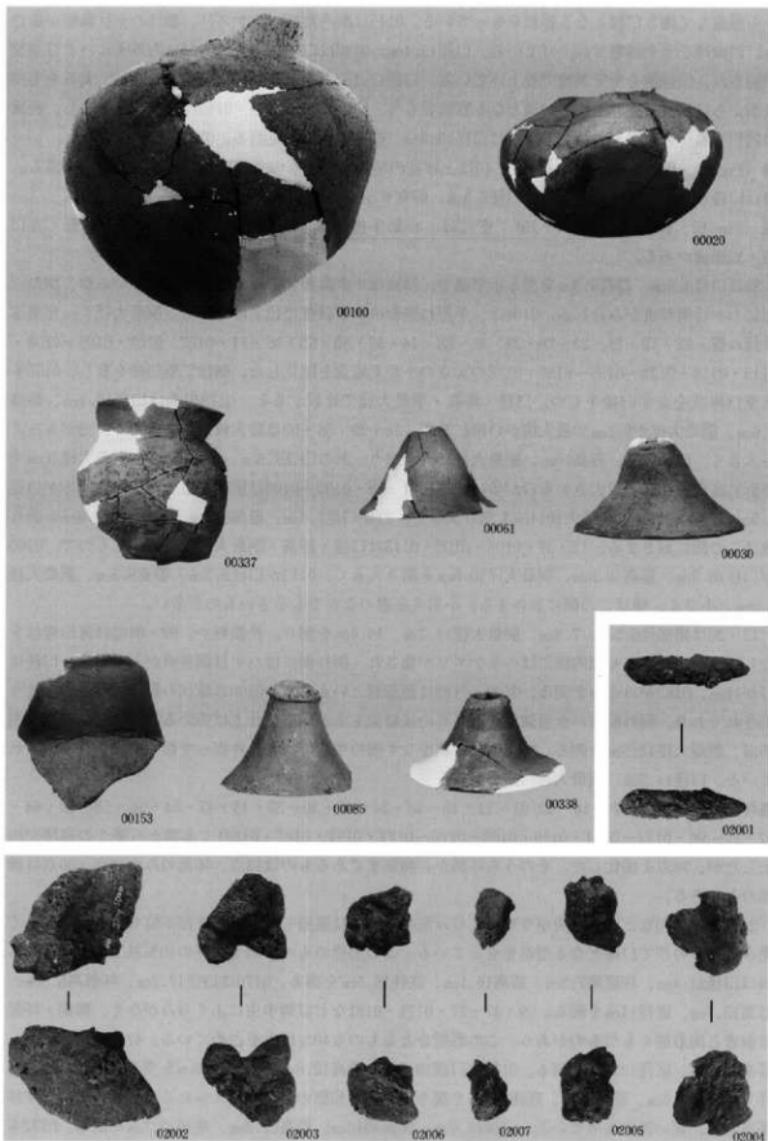


Fig. 23 第6号構出土上部器高実測図(4)



Ph.21 第6号溝出土土師器高坏(6)



Ph.22 第6号溝出土遺物

から屈曲して開き口縁となる器形をもっている。0115は胴内面はヘラケズリ、他はハケ目調整が施され、口縁端をナデ調整で仕上げている。口径15.4cm。0130は口径12.8cm。0133は外外面にハケ目調整が施され、口縁端をナデ調整で仕上げている。口径17.1cm。0161は口径14.8cm。0134は、丸みをもつ長胴からほぼ直に立ち上がり口縁となる器形をもち、口径11.1cm。76・0162は二重口縁を有し、長胴の器形をもつ大形のものである。76は口径19.2cm、器高40cm前後を測る。0162は口径24.8cm。

**鉢** (Fig. 19, Ph. 13, 40~42・0110) : 40は上げ底の塊形をなすもので、口径12cm、器高81cmを測る。41は口縁がやや内傾する塊形で、口径9.5cm、器高6cmを測る。0110は口径17.8cm。42は台か。

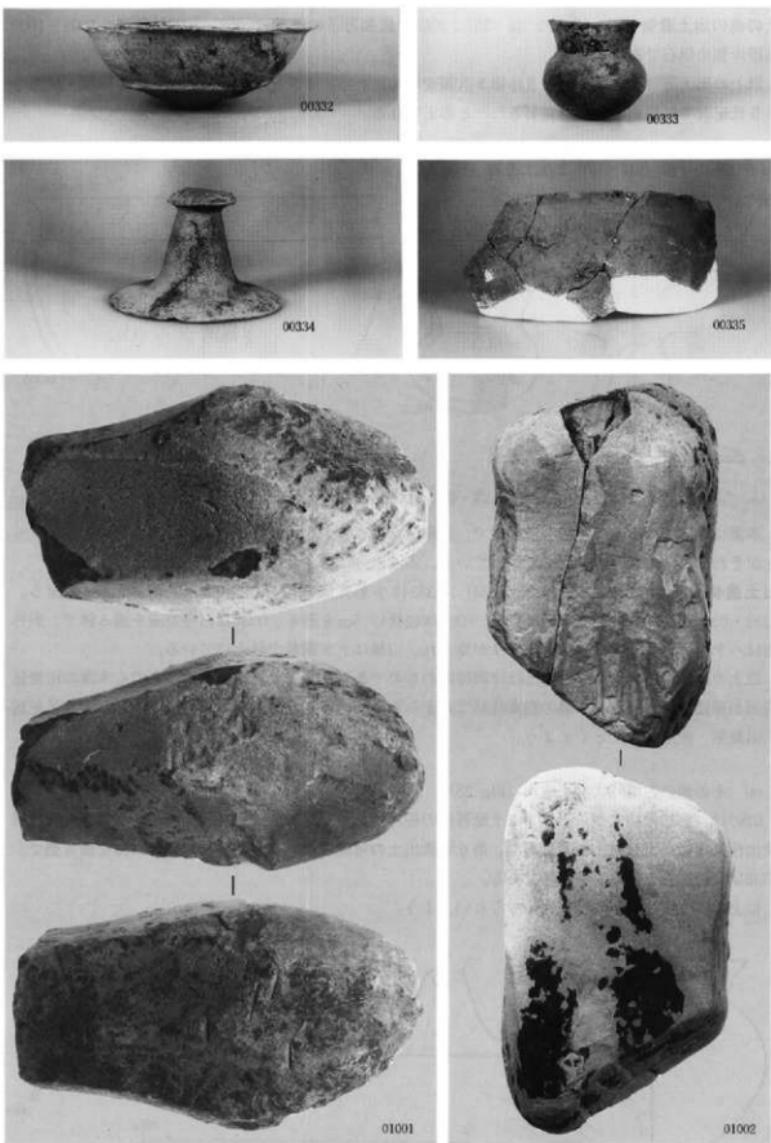
**壺** (Fig. 12・16・17, Ph. 14・15) : 壺には、小形手捏ね壺・小形壺・小形丸底壺・長頸壺・直口壺・短頸壺がある。

39は口径3.6cm、器高6.3cmを測る小形壺で、器面はナデ調整によって仕上げられているが、胴の一部にハケ目調整痕がみられる。0104は、手捏ね整形後ナデ調整で仕上げている。胴最大径5cmを測る手捏ね壺。12・19・21・22・28・29・36~38・44・52・53・63・68・71・0102・0103・0105~0108・0113・0114・0132・0153~0155・0178の30点の小形丸底壺を図化した。68は二重口縁を有し、0155も二重口縁状をなす口縁をもつ。口径・器高・胴最大径で比較すると、0178のみは口径10.4cm、器高9.6cm、胴最大径が9.2cmで最大値が口縁にある。28・29・36・52は最大値が器高にあり、29がもっとも大きく、口径12cm、器高16cm、胴最大径15cmを測り、36の口径7.8cm、器高9.3cm、胴最大径9cmで、小形丸底壺のなかでは大きいものが多い。19・21・38・0102・0106は胴径に最大値をもち、19が口径9.5cm、器高13.3cm、胴最大径14cmを測り大きく、21が口径7.4cm、器高8.2cm、胴最大径8.6cmを測り、他はこの間におさまる。12・37・0103・0105・0113は口径・器高・胴最大径がほぼ同じもので、0105が口径10.2cm、器高10.5cm、胴最大径10.8cmを測り大きく、0113が口径8.2cm、器高8.8cm、胴最大径8.9cmと小さく、他はこの間におさまる。小形丸底壺のなかでも小さいものが多い。

13・20は頸部径6.5cm、7.4cm、胴最大径14.2cm、16.4cmを測り、長頸壺か。97・0182は直口壺状をなしている。2点とも胴内面にはヘラケズリが施され、胴外面にはハケ目調整痕がみられる。口径は97が11cm、0182が11.6cmを測る。0100・0163は短頸壺といえよう。0100は球状の胴に短い口縁が造り出されており、胴外面上にハケ目調整が施された後器面をナデ調整で仕上げている。口径11.8cm、器高15cm、胴最大径18.5cmを測る。0163は、球状をなす胴の中心ではなく片寄って短い口縁が造り出されている。口径13.5cm、胴最大径25cmを測る。

**高坏** (Fig. 19~23, Ph. 16~22, 01~11・15~18・24~27・30~35・43・47・54~56・58~62・64・67・77~96・0137~0144・0159・0160・0170~0177・0181・0187・0188) : 本溝から多くの高坏が出士したが、78点を図化した。そのうち坏部から脚部まであるものは13点、坏部のみが26点、39点は脚部のみである。

24~26・0170などは脚中央がややふくらみ気味で脚裾は屈曲して開き、坏部下位で屈曲して大きく開きながらのびて口縁となる器形をもっている。この形態のものが出土高坏の40%以上を占めている。24は口径21.4cm、坏部高7.3cm、器高16.1cm、底径15.5cmを測る。0170は口径17.2cm、坏部高5.3cm、器高13.7cm、底径11cmを測る。09・47・77・0171・0181などは脚中央にふくらみがなく、脚裾・坏部は前者と同形態をもつものがあり、この形態をとるものも40%以上を占めている。47は口径17.1cm、器高14.8cm、底径12.2cmを測る。0171は口径18.3cm、器高12.8cm、底径10.8cmを測る。10は小形の高坏で、口径9.2cm、器高8cm、底径7.2cmを測り、06も同形態のものと考えられる。43は塊状をなす坏部をもち、短い脚をもっている。口径23.9cm、坏部高10cm、器高17.3cm、底径13.7cmを測る。0172も同様の形態をとると考えられる。



Ph.23 第6号溝出土砥石および第15号溝出土土器

その他の出土遺物 (Fig. 19, Ph. 22・23) : 2001は鉄製刀子の基部、2002～2007は鉄滓、1001・1002は砂岸製の砥石である。

以上の出土遺物および次郎丸遺跡第3次調査の知見から、4世紀代から用水溝として掘削・使用され5世紀前半に祭祀を行ない廢棄されたと考えられる。

#### (3) 第15号溝 (SD-15) と出土遺物 (Fig. 11, Ph. 8)

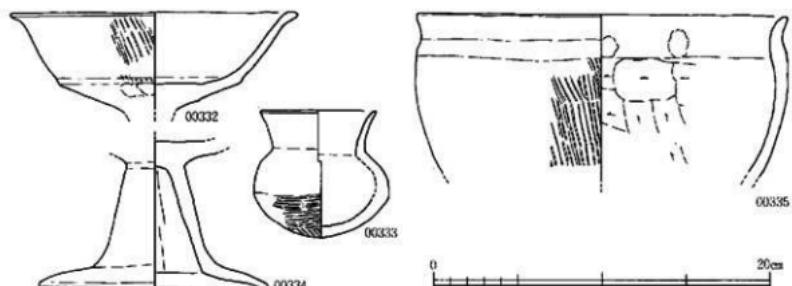


Fig. 24 第15号溝出土土師器実測図

本溝は0区で検出した。幅8m前後で、砂礫層を掘り抜き1m前後遺存している。粗砂・砂・シルトがそれぞれ薄く瓦層をなして堆積している。本溝からは、少量の土師器が出土した。

出土遺物 (Fig. 24, Ph. 23, 0332～0335) : 0333は小形丸底壺で、口径6.8cm、器高7.5cmを測る。0332・0334は高壺で、0332は口径17cm、0334は底径13.5cmを測る。0335は口徑22cmを測る鉢で、胴外面はハケ目調整、胴内面はヘラケヅリが施され、口縁はナデ調整で仕上げている。

以上の出土遺物は、第6号溝とはほぼ同時期のものであり、次郎丸遺跡第3次調査でも本溝の南側延長部が確認されている。本溝の廢棄時期はわからないが、第6号溝の切り換え用水溝として5世紀前半頃掘削・使用されたといえよう。

#### (4) その他の古墳時代出土遺物 (Fig. 25)

0297は、第35号柱穴から出土した土師器壺の破片である。0337・0338は、I区の表上剥ぎから遺構検出作業中に出土した土師器であり、第6号溝出土の可能性が高い。0337は口径11.4cmを測る壺で、0338は底径10cmを測る高壺脚部である。

以上の出土遺物は、5世紀代のものといえよう。

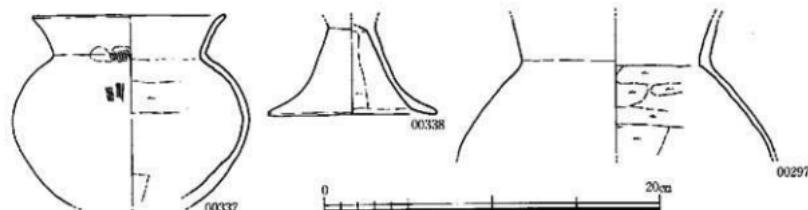


Fig. 25 出出土師器実測図

#### 4) 中世の遺構と出土遺物

標高9.5m前後の黄褐色シルトおよび砂礫層上面で、古代末から中世の遺構を検出した。この時期の検出遺構としては、掘立柱建物（以下、本文中では建物とする）11棟、井戸4基、土塹3基、溝4条、柱穴多数と水田がある。古代末から中世の集落は、I区全域と0区の第14号溝際まで広がっており、第14号溝際から西は水田となっている。

##### (1) 掘立柱建物と出土遺物

###### 第20号掘立柱建物 (SB-20) (Fig. 27・29, Ph. 30)

第20号建物はI区の中央からやや南寄りで検出し、第10号溝に切られている。第0115・0102・0105・0107・2007・2008・10・0110・2011・2013・2017・0113・2019・2020号柱穴の19個の柱穴からなる3間×4間の母屋的な建物で、側柱と東柱からなっている。各柱穴は径20~40cmの平面形円形の掘り方をもち、16~40cm遺存している。なお、柱痕跡から径15~20cmの丸柱を用いていたと考えられる。柱間は、側柱からみていくと、北側梁行の柱間が、西から250cm・190cm・155cmで、南側が260cm・192cm・136cmとなり、588~595cmの梁行をもっている。西側桁行の柱間は、北から135cm・185cm・115cm・205cmで、東側が145cm・287cm・215cmとなり、640~647cmの桁行をもっている。なお、東側桁行の中央の柱が検出できなかったが、玄間にあたり、存在しない可能性もある。東柱の柱間は、個柱に規制されており、梁行からみていくと、北から245cm・200cm・146cm、次列が260cm・200cm、次列が260cm・192cm・135cmとなり、西側柱間が245~260cmと広く、東側柱間が135~155cmと狭い。桁行は東から140cm・185cm・115cm・205cm、次列が136cm・182cm・122cm・207cmとなる。南側柱間が広く、その北がもっとも狭く、その北はやや広くなり、北側柱間は狭くなる。

**出土遺物** (Fig. 29, Ph. 30) : 0325~0327は糸切り底の土師器皿で、外底に板状圧痕がみられる。0326・0327は口径が9.6cm・8cm、底径が6.4cm・6cm、器高が1cm・1.2cmを測る。0329は口径12cm前後を測る黒色上器の小片である。0326・0327は第0103号柱穴、0329は第0113号柱穴、0325は第0102号柱穴の掘り方から出土したものである。以上のはか7個の柱穴から土師器皿の小片が出土している。

以上から、第20号建物はN-11°-Wに主軸をとる3間×4間の東柱をもつ母屋的な建物で、中世の中頃のものであろう。

###### 第21号掘立柱建物 (SB-21) (Fig. 28・29, Ph. 30)

本建物はI区のほぼ中央で検出した。第20号建物の東隣に位置し、第27号建物と切り合い関係にあるが、柱穴が切り合っていないので先後関係はわからない。第87・89・90・71・2101・92・96・2113・98・93・2107・2105号柱穴の12個の柱穴を確認し、建物としてまとめた。北側と東側に廂をもつ2面廂の2間×2間の母屋的な建物といえよう。本体の柱穴は25~35cmの平面形円形の掘り方をもち、14~42cm遺存している。廂柱穴は25cm前後の平面形円形の掘り方をもち、4~18cm遺存している。なお、柱痕跡から径15cm前後の円柱が用いられたと考えられる。本屋の梁行柱間は北側が198cm・194cm、南側は中央柱穴が浅かったと考えられ、梁行402cm、桁行柱間は西側が226cm・230cm、東側が236cm・225cmである。なお、北側廂柱穴と梁行柱間は108cm・116cmで、東側は94cm・114cmが確認できている。

**出土遺物** (Fig. 29, Ph. 30) : 0318・0321とも灰白色を呈する瓦器の塊で、前者は第93号柱穴、後者は第96号柱穴から出土した。0321は貼付けの高台をもち、口径18.5cm、器高5cm、底径7cmを測る。

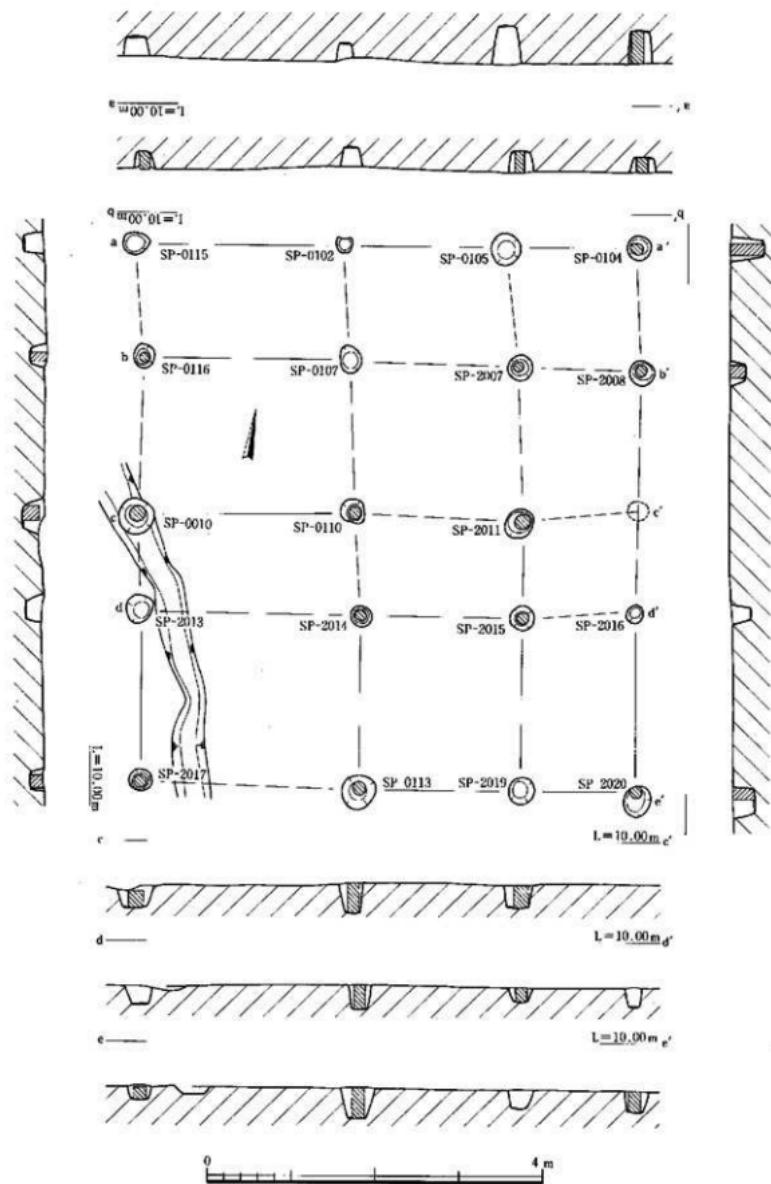


Fig. 27 第20号掘立柱建物 (SB-20) 実測図

0318の口径は15cmを測る。以上のはか、6個の柱穴から瓦器・土師器の小片が出土している。

以上から、第21号建物はN-13°-Wの主軸方向をとる2間×2間の2面廂の母屋的な建物で、出土遺物から12世紀前半頃のものといえよう。

#### 第22号掘立柱建物 (SB-22) (Fig. 29・30, Pl. 30)

本建物はI区中央部で検出した。第21・24号建物の間に位置している。第83・2202・82・80・86・

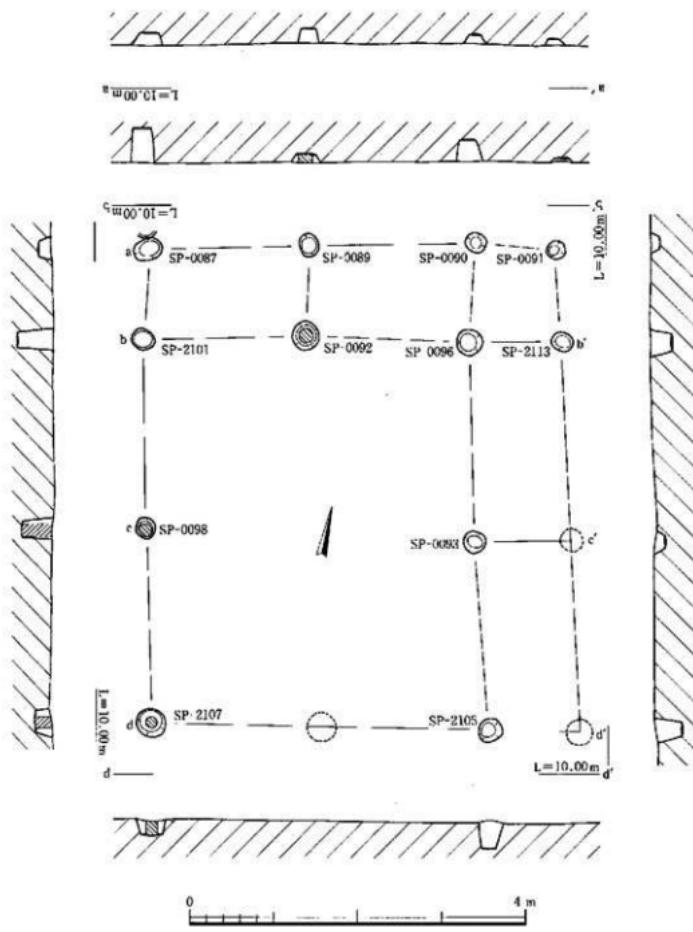


Fig. 28 第21号掘立柱建物 (SB-21) 実測図

88・2207・2208号柱穴の8個の側柱と、第81・85号柱穴の2個の棟持柱からなる東西棟である。柱穴は25cm前後の円形の掘り方をもち、12~30cm遺存している。桁行柱間は北側が西から220cm・236cm・228cm、南側は226cm・218cm・233cmで、梁行は355cmである。また、棟持柱間は720cm。

**出土遺物** (Fig. 30, Ph. 30) : 0314~0317は糸切り底の土師器皿で、0314・0315は口径8.8cm、器高が1cm・0.8cmを測る。0316・0317は口径が9cm・8.6cm、器高が0.9cm・1cmを測る。1062は径2.8cm、最大厚0.4cmを測る滑石片岩製の有孔円盤で、古墳時代遺物の混入品と考えられる。0314は第80号柱穴、0315・1062は第83号柱穴、0316は第85号柱穴、0317は第88号柱穴からそれぞれ出土したものである。

以上から、本建物はN-79°-Eの方位をとる梁行355cm、桁行680cmの棟持柱をもつ建物で、出土遺物から中世後半期のものといえよう。

#### 第23号掘立柱建物 (SB-23) (Fig. 29・30, Ph. 30)

本建物は、I区の中央からやや北寄りで検出した。第22号建物の東側にあたる。第0121・74・2304・2306・2307・76号柱穴の6個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴は径20~25cmの円形の掘り方をもち、8~24cm遺存している。梁行西側柱間は205cm・215cm、東側は210cmで、桁行は436~455cmを測る。

**出土遺物** (Fig. 29, Ph. 30) : 0330・0311は土師器で、前者は口径15cm、器高4.3cmを測る壺、後者は皿で口径7.4cm、器高0.9cmを測る。0330は第0121号柱穴、0311は第74号柱穴出土である。

以上から、本建物は2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-77°-Eに主軸をとっている。出土土師器および建物配置から、中世後半期のものといえよう。

#### 第24号掘立柱建物 (SB-24) (Fig. 31)

本建物はI区の中央から北寄りで検出され、第22号建物の北側にあたる。第2401・2402・0119・84・2408・2409号柱穴の6個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴は径30cm前後の掘り方をもち、20~43cm遺存している。梁行西側柱間は180cm・196cm、桁行は195cm・215cmを測る。

本建物は2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-80°-Eに主軸をとっている。建物配置および出土土師器小片から、中世後半期のものといえよう。

#### 第25号掘立柱建物 (SB-25) (Fig. 29・31, Ph. 30)

本建物はI区中央部南側に位置し、第6号溝を切り、第10号溝に切られている。第20号建物とも切り合い関係にあるが、先後関係はわからない。第07・2502・0109・2504・2506・2508・2509号柱穴の7個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。四角の柱穴は径40cm前後の掘り方をもち、20~41cm遺存している。他の柱穴は径20~30cmの掘り方をもち、4~22cm遺存している。梁行北側柱間は225cm・213cm、桁行東側柱間は202cm・222cmである。

0287は第07号柱穴から出土した口径13.6cmを測る白磁碗である。

以上から、本建物は2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-14.5°~18°-Wに主軸をとっている。出土遺物から中世前半期のものか。

#### 第26号掘立柱建物 (SB-26) (Fig. 32)

本建物はI区の中央南側で検出し、第20号建物と切り合い関係にあるが先後関係はわからない。第

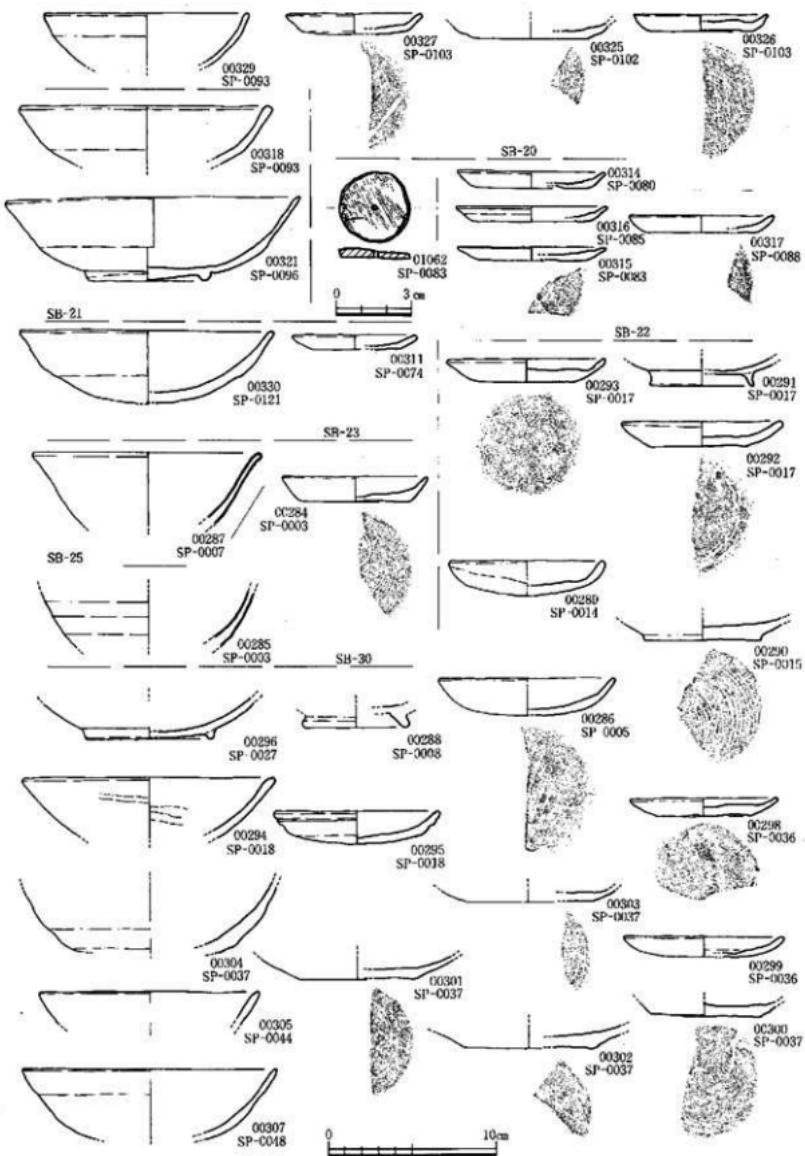


Fig. 29 各掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1)

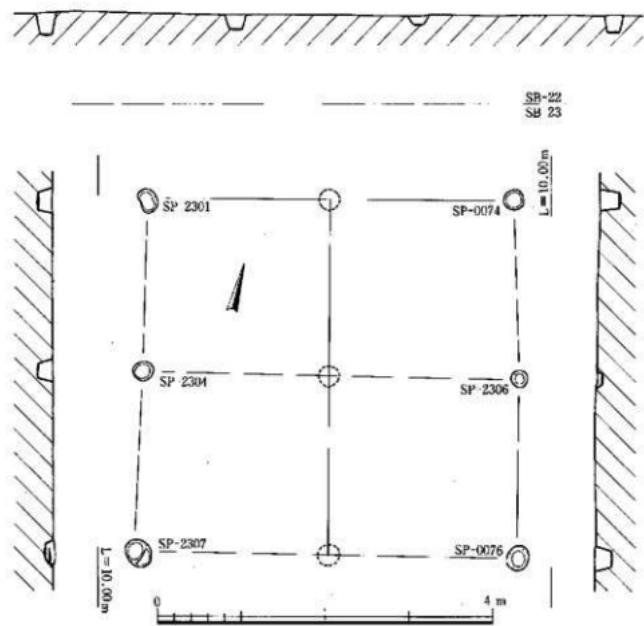
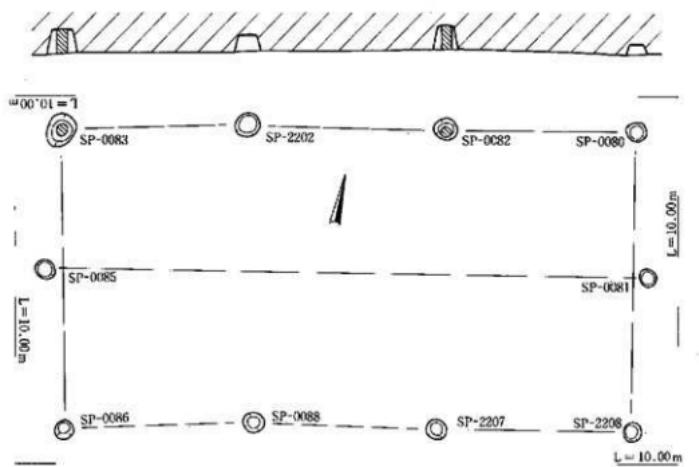


Fig. 30 第22·23号据立柱建物(SB-22·23)実測区

III 発掘調査の記録

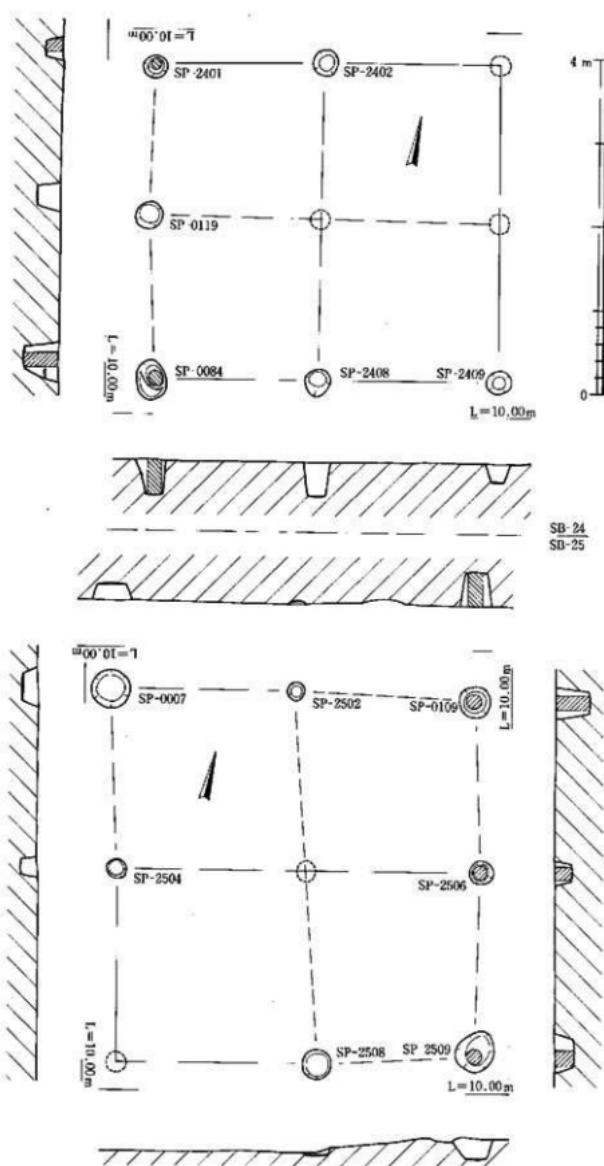


Fig. 31 第24・25号掲立柱建物 (SB-24・25) 実測図

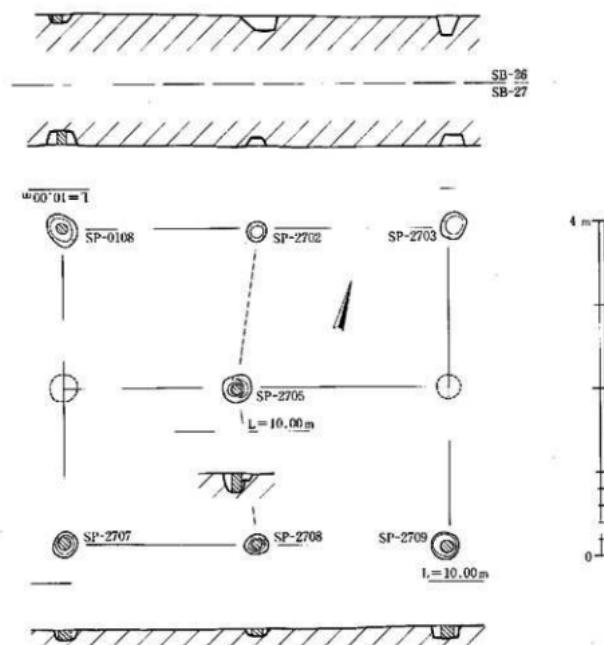
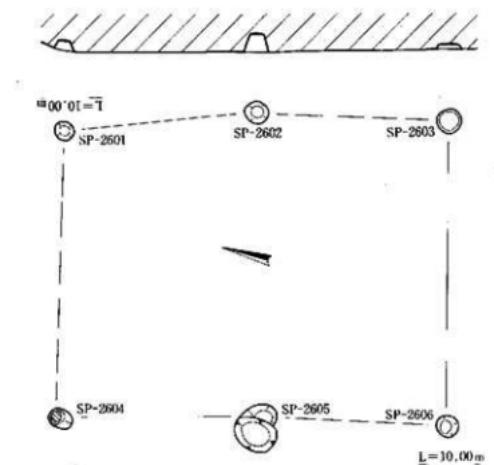


Fig. 32 第26・27号掘立柱建物 (SB-26・27) 実測図

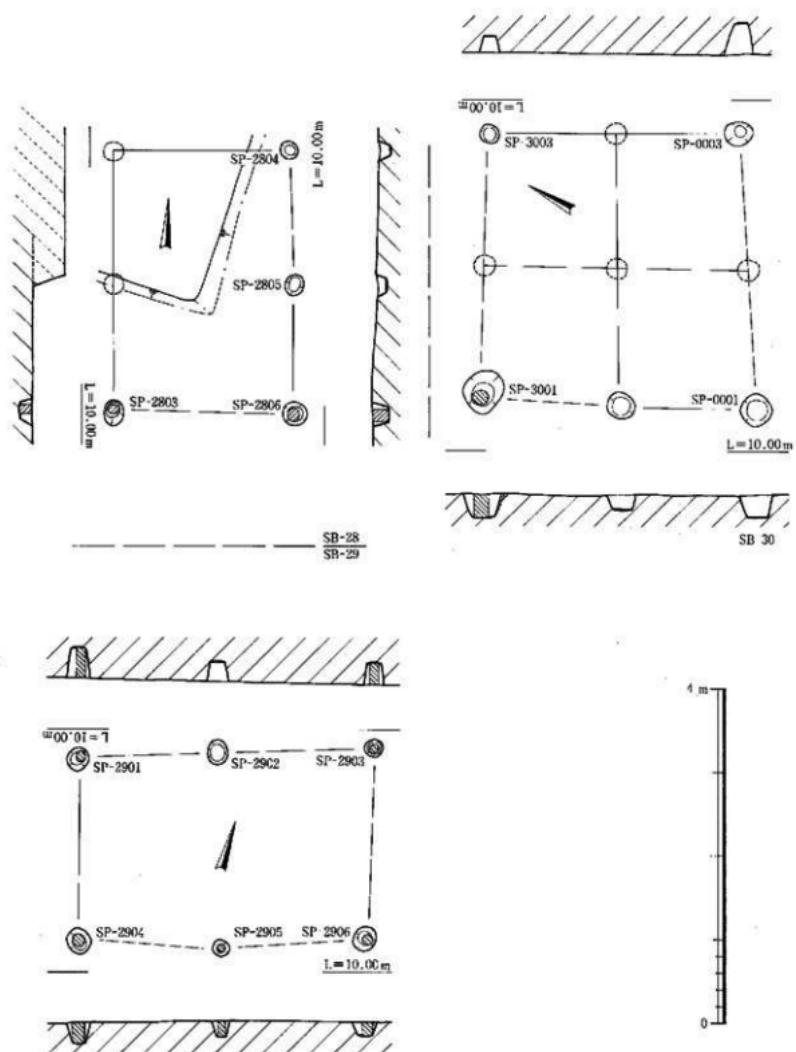


Fig. 33 第28-30号据立柱建物 (SH-28-30) 実測図

2601～2606号柱穴の6個の側柱からなる1間×2間の建物である。柱穴は径20cm前後の掘り方をもち、6～25cm遺存している。梁行柱間は340cm・360cm、桁行は東側が230cmで、南側248cm・218cmである。本建物はN-13.5°-Wに主軸をとる1間×2間の建物で、中世のものであろう。

#### 第27号掘立柱建物 (SB-27) (Fig. 32)

本建物はI区の中央からやや南寄りで検出した。第20・21号建物と切り合い関係にあるが、先後関係はわからない。第0108・2702・2703・2705・2707～2709号柱穴の7個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴は径20cm強～30cm強の掘り方をもち、10～23cm遺存している。なお、柱痕跡から径15cm前後の円柱を用いたと考えられる。梁行380cmで、桁行柱間は北側が235cm、南側が230cmで、梁行の間の柱穴は遺存していない。

以上から、本建物は2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-74°-Eに主軸をとっている。第0108号柱穴から土師器小片が出上しているのみで、時期限定はできないが、中世のものであろう。

#### 第29号掘立柱建物 (SB-29) (Fig. 33)

本建物はI区の中央北側で検出し、一部、調査断念地へ延びている。第2803～2806号柱穴の4個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴は径20～30cmの凹形の掘り方をもち、13～20cm遺存している。梁行柱間は215cm、桁行は159cm・155cmを測る。

以上から、本建物はN-4.5°-Wに主軸をとる1間×2間の建物で、出土遺物はないが中世のものであろう。

#### 第29号掘立柱建物 (SB-29) (Fig. 33)

本建物はI区の中央北側で検出し、第28号建物の北西に位置している。第2901～2906号柱穴の6個の柱穴からなる1間×2間の建物である。柱穴は径20～30cmの掘り方をもち、20～38cm遺存している。なお、柱痕跡から径10～18cmの円柱が用いられていたと考えられる。梁行柱間は220cm・226cm、桁行は北側が163cm・188cm、南側が170cm・175cmである。

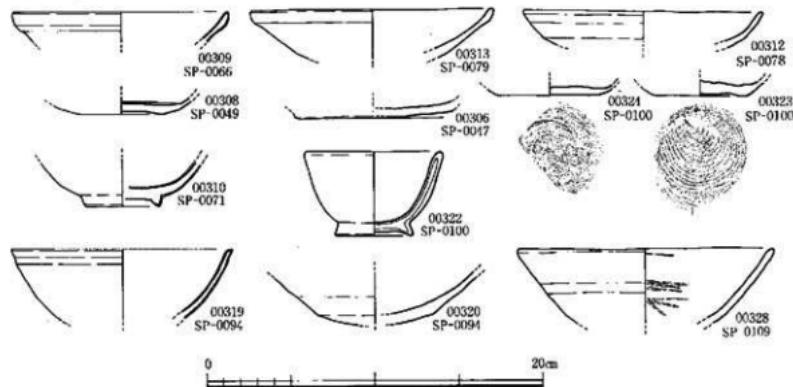
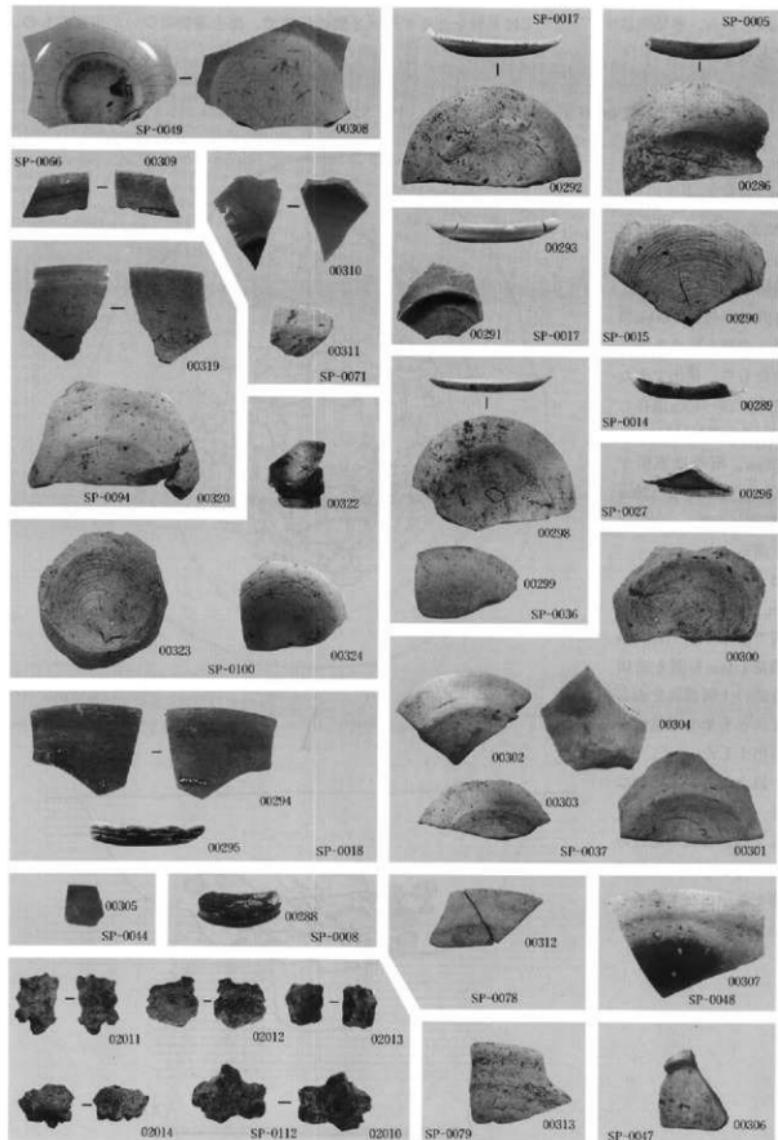


Fig. 34 各掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(2)



Ph.24 各柱穴出土遺物

以上から、本建物はN-72.5°-Eに主軸をとる1間×2間の建物で、出土遺物はないが中世のものであろう。

第30号掘立柱建物 (SB-30) (Fig. 29・33, Ph. 30)

本建物はT区の中央

から西寄りに位置し、

第6号溝を切っている。

第3001・3003・3004・

01・03号柱穴を検出し、

建物としてまとめた。

柱穴は一辺25~40cmの

隅丸方形を呈する掘り

方をもち、検出できた

柱穴は19~40cm遺存し

ている。梁行は314cm・

330cm、桁行は東側が

300cm、西側が330cm

(柱間は170cm・160cm)

を測る。

出土遺物 (Fig. 29,

Ph. 30) : 0285は白磁

碗で、0284は口径8.6cm、

器高1.5cmを測る糸切

り底の土師器皿である。

2点とも第03号柱穴か

ら出土した。

以上から、本建物は

N-28°-Eに主軸をと

る2間×2間の純柱の

倉庫的な建物で出土遺

物から中世後半期のも

のである。

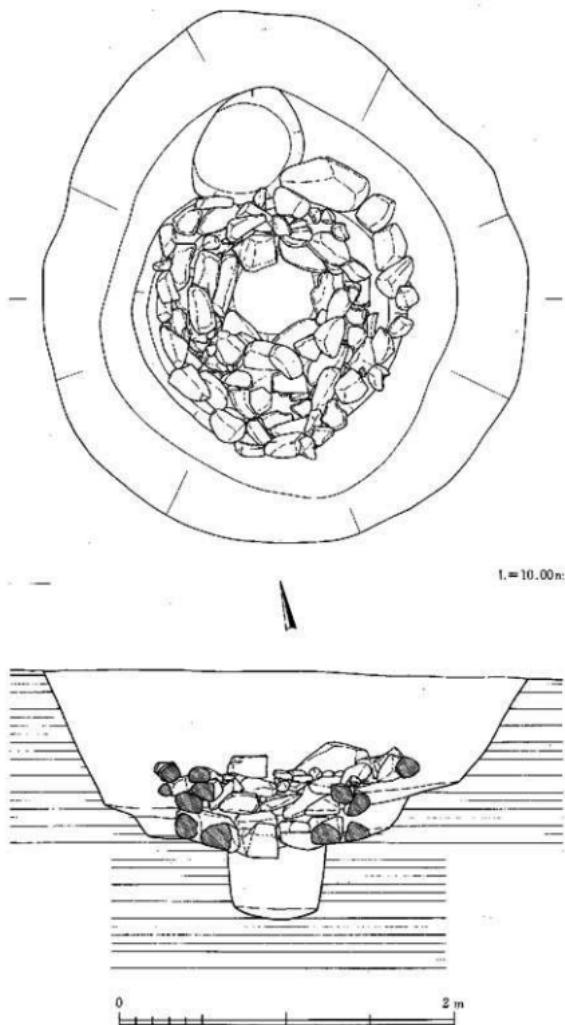


Fig. 35 第1号井戸 (SE 01) 実測図

## その他の柱穴と出土遺物 (Fig. 29・34, Ph. 30)

本調査ではI区全域と0区の東側で多数の柱穴を検出したが、I区西側から0区にかけてとI区の第1号井戸周辺は、検出面が砂礫層のため柱穴すべてを検出できたとはいえない。I区東側においても東西・南北棟の建物の所在が予想できるが、建物としてまとめることはできなかった。

0288・0294・0304～0306・0322は黒色上器で、0294は口径15cm、0322は口径8.2cm、器高5cmを測る。0291・0296は有高台の土師器塹、0324は土師器皿である。以上のはか、平安時代の遺物のみを出土する柱穴があり、平安時代にこの集落が形成されたといえよう。

0310は竜泉窯青磁碗、0309・0319は白磁碗で、0319は口径13cmを測る。0308は青白磁碗か。

0286は瓦器皿で、口径10.4cm、器高2.2cmを測る。0307・0313・0320・0328は上師器塹で口径15cm前後を測る。0289・0295・0298・0299は土師器皿で、0289の外底はヘラケズリ、0298の外底には板状圧痕跡がみられる。口径は9.2cm・9.8cm・9.4cm・8.8cm、器高2.1cm・1.9cm・1.2cm・1.1cmを測る。0290・0292・0293・0300～0303・0312・0323は糸切り底の土師器皿で、0292は口径9.6cm、器高1.5cm、0293は口径11.4cm、器高1.4cmを測る。2010～2014は鉄滓片である。

## (2) 井戸および土壤

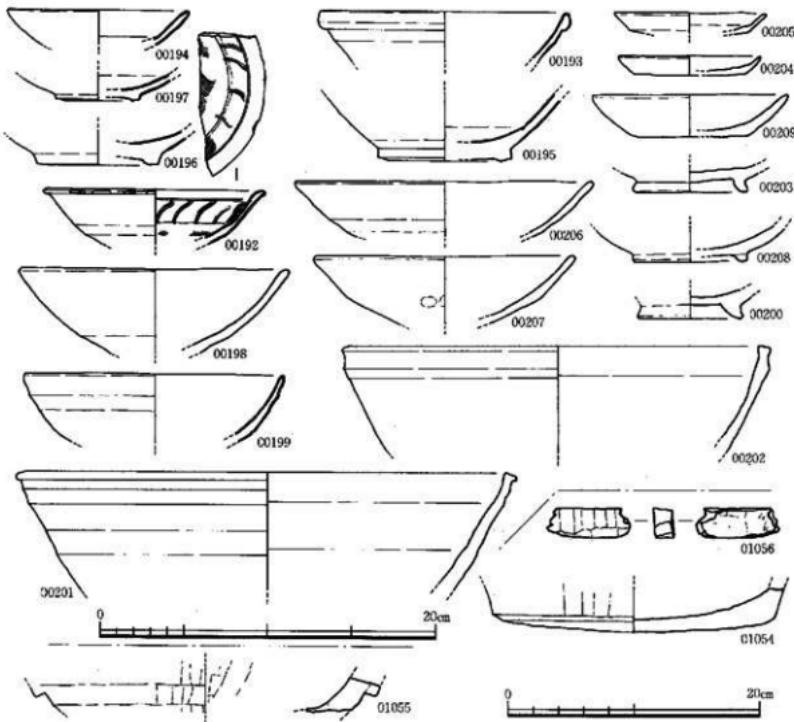
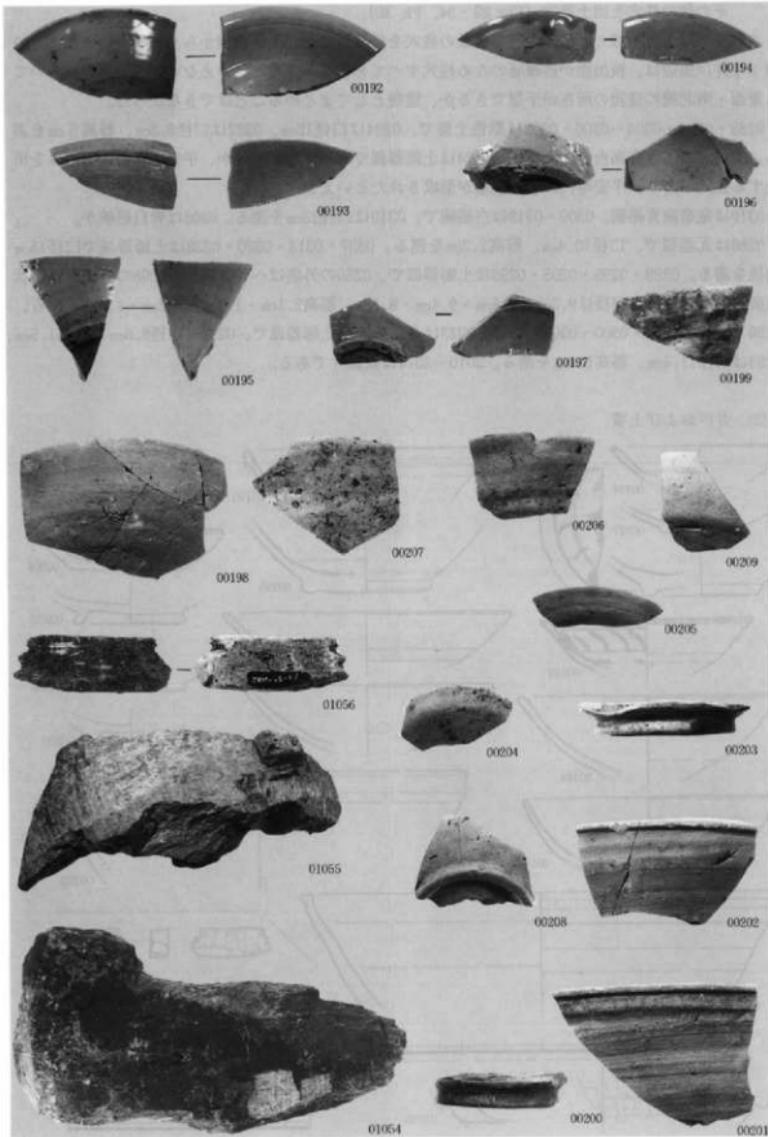


Fig. 36 第1号井戸出土遺物実測図



Ph.25 第1号井戸出土遺物

## 第1号井戸 (SE-01) (Fig. 35・36, Ph. 25・26)

本井戸はI区東側中央の砂礫層面で検出した。径2.9m前後で1m前後遺存する鉢状をなす掘り方をもち、ほぼ中央に井筒が設けられている。井筒は、掘り方床面から20×30×20~20×40×20cmの長方形礫を内面径が50cm弱になるように面を積み4段前後積み、一辺10~40cmの角礫を用いて穴埋め、裏込みを行ない構築し、掘り方床から包水層までは径50cm強で40cmを掘り込んでいる。井筒底の標高は7.99mである。また、石組み井筒構築前は素掘りの井戸で、井戸底は標高8.23mである。

**出土遺物 (Fig. 36, Ph. 25)**: 本井戸からは比較的まとまった遺物が出土した。0192~0198は白磁で、0194・0197は皿、他は碗である。0194は口径10.8cm、0197は底径5cmを測る。0192は口径13.2cmを測り内面に施文をもつ。0193は口径15cmで正絞口縁をもっている。0195・0196はケズリ出しの高台をもち、底径8cm・7.2cmを測る。

0198・0199は瓦器塊で口径16cm・15.4cmを測る。0203~0209は土師器で、0203・0206~0208は塊、他は皿である。塊は有高台で、0206・0207は口径17.6cm・15.4cmを測る。0203・0208は底径6.8cmを測る。0204・0205は口径8.4cm・9cmを測る。0209は口径11.6cm、器高2.5cmを測る。0200は塊で黒色土器か。

0201・0202は瓦質の捏鉢で、口径29.6cm・25.2cmを測る。

1055・1056は滑石製石鍋で、1056は再利用を試みている。

以上から、本井戸は石組みの井筒をもつ井戸で、出土遺物から12世紀前半前後のものといえよう。

## 第2号土壙 (SK-02) (Fig. 37)

本土壙はI区の中央から東寄りに位置し、第3号土壙を切っている。長軸5.5m、短軸3.3mの不整形を呈する土壙で、50cm前後遺存している。0215は口径25.8cmを測る土師器土鍋片である。他に土師器小片がある。

本土壙は、中世後半期頃のものか。

## 第3号土壙 (SK-03) (Fig. 37, Ph. 30)

本土壙はI区の中央からやや南東寄りに位置し、第2号溝に切られている。長軸5.2m、短軸2.2mの不整形を呈する土壙で、40cm前後遺存している。床は皿状をなし、壁はやや開き気味に立ち上がっている。砂礫および暗灰色シルトが埋土として入っている。

**出土遺物 (Fig. 37, Ph. 30)**: 0216は白磁碗で、口径15.4cm、器高6.7cm、底径6.1cmを測る。0217は青磁碗の底部片で見込みに施文があり、底径6cmを測る。0218は瓦器塊の底部片で底径6cmを測る。0219は糸切り底の土師器皿で、口径8.6cm、器高1.1cmを測る。

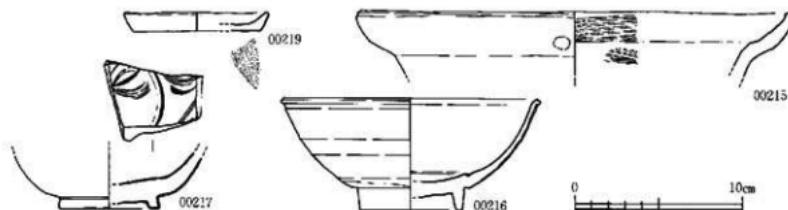


Fig. 37 第3号土壙出土遺物実測図

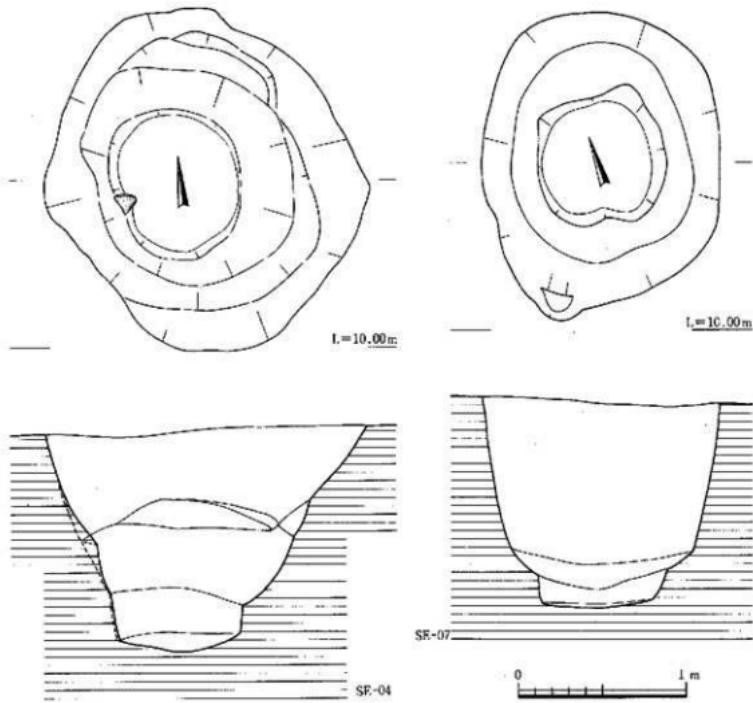


Fig. 38 第4・7号井戸 (SE-04・07) 実測図

以上から、本土壙は13世紀前半前後のものといえよう。

#### 第4号井戸 (SE-04) (Fig. 39)

本井戸はI区の中央から西寄りで検出した。第20号建物の北に近接して位置している。径2m前後で、遺存深1m強の鉢状ななす掘り方をもち、掘り方の中央からやや西寄りに井筒が造られている。井筒は径80cm前後の円形を呈し、掘り方床から30cm掘り込まれている。井筒底の標高は8.18mである。本井戸は土師器の小片のみの出土で、時期限定はできないが、中世のものであろう。

#### 第5号土壤 (SK-05) (Fig. 39~41, Ph. 26~29)

本土壙はI区の中央から西寄りで検出し、第6号溝関連の施設を切り、10個の柱穴に切られている。東西4.07m、南北2.4~2.9mの平面形長方形を呈し、35cm遺存している。床面はほぼ平坦で叩き締められており、壁はやや開き気味に立ち上がっている。一見、竪穴住居状を呈しているが、床面および壁・土壤周辺に柱穴がなく、礫石となるものもないため、土壤とした。床の上に暗褐色~黄灰色シルト~粘質土に堆積し、床からこの堆積層中で比較的まとまった遺物が出上した。その上に暗褐色・



1) 第1号井戸井筒検出状況



2) 第5号土壤遺物出土状態

Ph.26 第1号井戸・第5号土壤

黄色のシルトから粘質土が、さらに検出面までは暗褐色～黒褐色シルト・暗灰色シルト・灰色シルトが堆積していた。第1～3層は人為的に埋められたものか。

**出土遺物** (Fig. 40・41, Ph. 27～29)：本土層からは、遺構実測図でもわかるように床面および床直上からまとまった遺物が出土した。遺物には、青磁、白磁、高麗・新羅陶器、瓦器、土師器、滑石製石鍋がある。

0276・0280は青磁、0277～0279は白磁で、0276・0279・0280は皿、他は碗と考えられる。0276・0279とも無高台で、上げ底気味となり、外底に施釉はみられない。底径は0276が3.7cm、0279が4cmを測る。

0282・0283は新羅陶器で、外面にタタキ痕、内面に受け具痕がみられる。同一個体で壺の底部と胴下半部片とみられる。

0238～0242は瓦器の壺で、内外面は回転ミガキ後ヨコナデ調整が施されている。

0238・0240は口径17.2cm・12cmを測り、0238は器高5cm強か。

0220～0228・0232～0234・0243～0269・0273～0275は土師器で、0220～0228・0232～0234・0243～0260・0275は皿、0264～0266・0274は壺、他は壺である。0220・0221・0224・0225・0232・0234・0243・0245・0250・0252・0254・0258は糸切り底の小皿で、0221・0232・0243・0250・0252の外底には板状圧痕がみられる。0222・0223・0228・0244・0247・0249・0251・0257は、外底に板状工具による調整痕および板状圧痕がみられる小皿である。0226・0227・0246・0248・0253・0255・0256は、外底がヘラ切り離しおよびナデ調整で仕上げられている小皿である。0257がもっとも小さく、口径5.9cm、器高1.1cmを測る。0255・0225・0258は口径7.6cm・7.8cm、器高1.2～1.6cmを測る。0246・0248・0252は口径8.4～8.6cm、器高0.95～1.2cmを測る。0221～0223・0226・0247・0250・0253は口径8.8～9cm、器高0.95～1.6cmを測る。0220・0224・0227・0228・0232・0243・0244・0256は口径9.4～9.6cm、器高1～1.6cmを測る。0234・0245・0251は口径9.8～10cm、器高1～1.5cmを測る。0249・0254が小皿としては大きく、口径10.8cm・10.6cm、器高1.4cm・1.5cmを測る。0233・0259・0260・0275は大皿で、0259・0260は糸切り底、0233・0259は外底に板状圧痕がみられる。0264の外底には板状圧痕がみられ、器内外面は横ナデ調整が施され、口径15.6cm、器高3.15cmを測る。0265・0266は高環か。0261・0262は外底に貼付け高台をもち、底径6.8cmを測る。壺の器内外面は回転横ナデ調整が施され、口径14.6～17.6cmを測る。

1057・1058は滑石製石鍋片で、再加工を加え転用している。

0235～0237・0281は須恵器で、0235・0281は壺、0236・0237は壺。占墳時代の混入品。

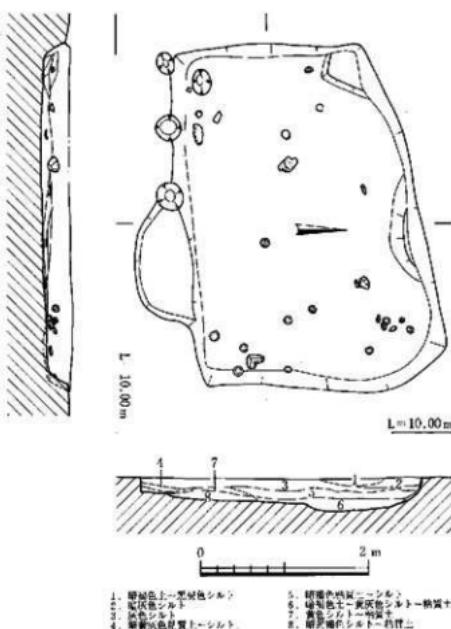
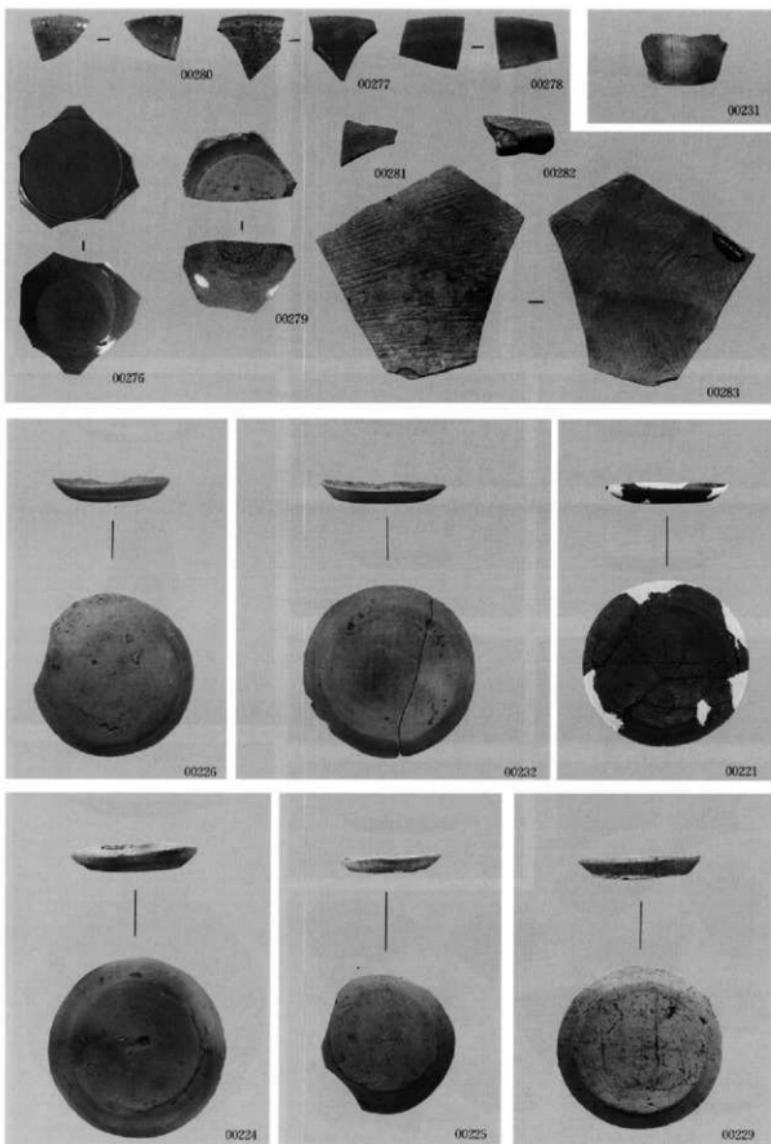
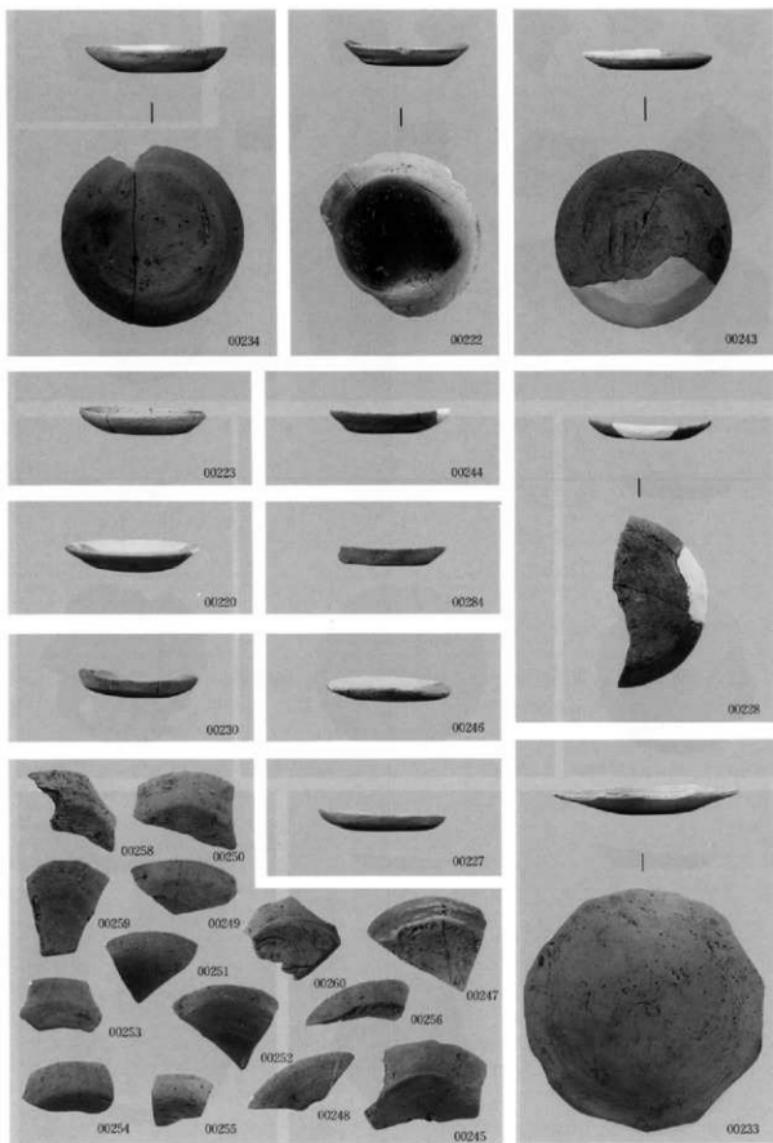


Fig. 39 第5号土壤 (SK-05) 実測図



Ph. 27 第5号土壤出土遺物(1)



Ph. 28 第 5 号土壤出土遺物 (2)

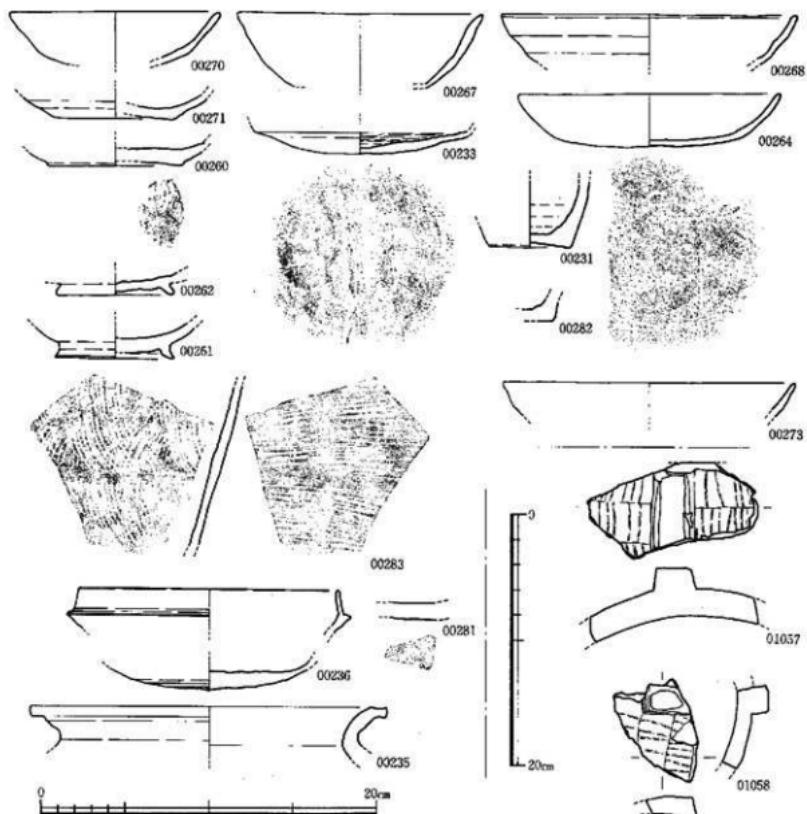


Fig. 40 第5号土壌出土遺物実測図(1)

以上から、本土壌は堅穴住居状をなす上壌で、12世紀から13世紀前半のものといえよう。

#### 第7号井戸 (SE-07) (Fig. 38)

本井戸は、I区の東側中央の砂礫層面で検出した。第1号井戸の南側にあたる。南北1.85m、東西1.4mの平面形隅丸方形で断面が鉗状をなし、1.1m遺存の掘り方をもち、掘り方中央に径70cm前後の隅丸方形を呈する井筒が設けられている。井筒底の標高は8.34mである。

本井戸からは土師器等の小片が出土したのみであるが、中世のものであろう。

#### 第11号井戸 (SE-11) (Fig. 42, Ph. 30)

本井戸は、I区の北東側で検出した。径1.5mで90cm弱遺存する鉢形をなす掘り方をもち、その中央に径50cmを測る井筒が設けられている。掘り方底に井筒をとり囲むように $10 \times 10 \times 10\text{cm} - 20 \times 40 \times$

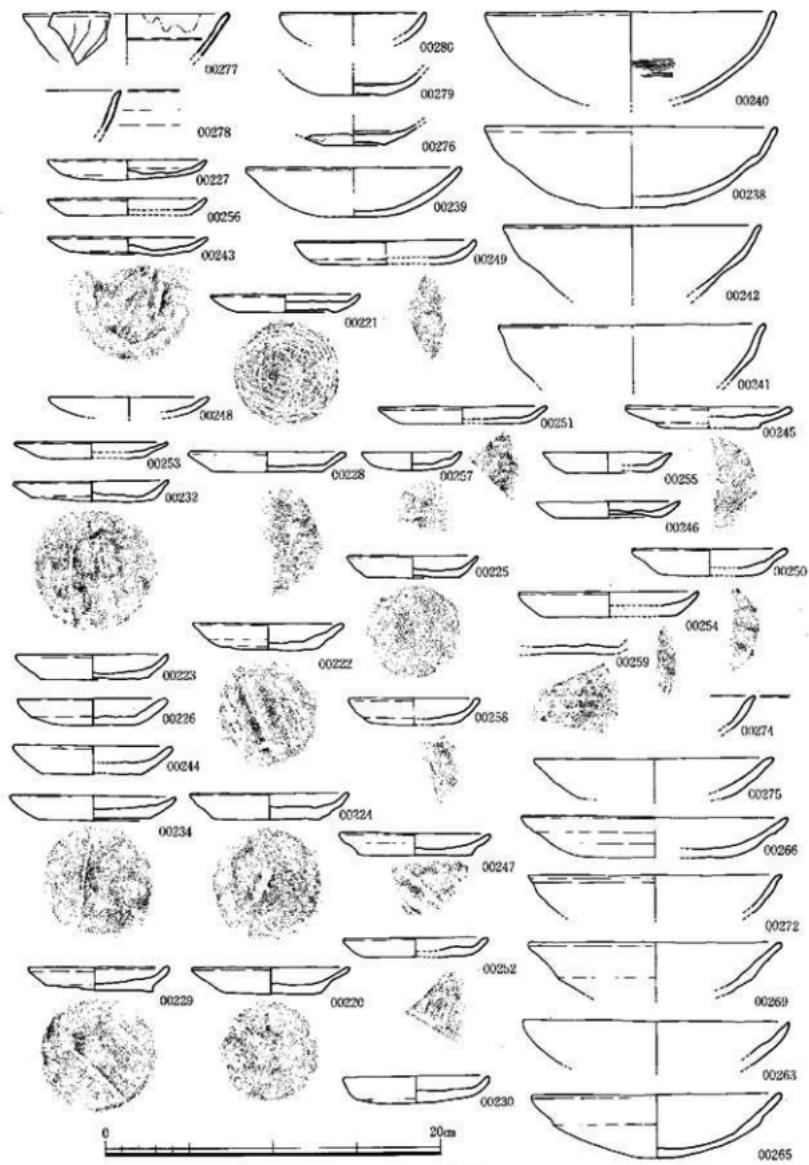
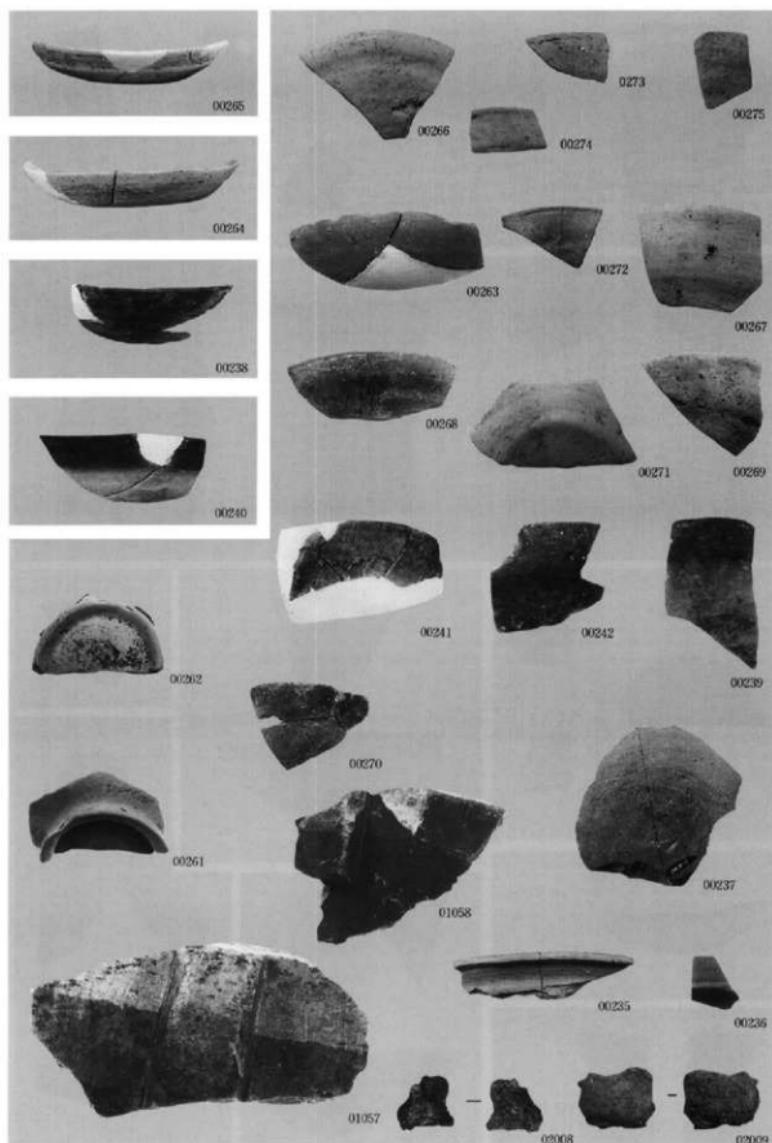
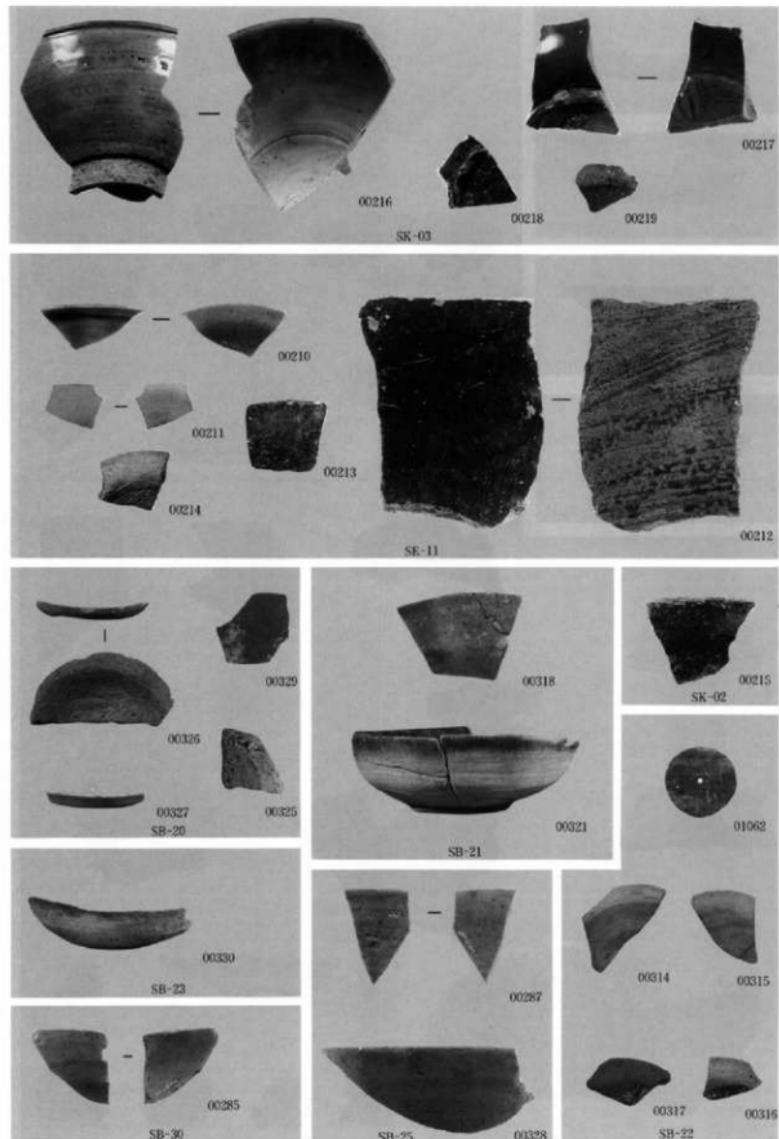


Fig. 41 第5号土壤出土遺物実測図(2)



Ph.29 第5号土塙出土遺物(3)



Ph. 30 各遺構出土遺物



Fig. 42 第11号井戸出土遺物実測図

20cm大の角礫が裏込め状にまとめており、調査中は石組みの井筒が廃棄時に破壊されたものと考えていた。しかし、完掘状況および角礫のあり方と井筒痕跡から、曲物か桶の木製容器を井筒として使用していたと考えられる。井筒底は標高8.22mである。

**出土遺物 (Fig. 42, Ph. 30)**: 本井戸の井筒内外から少量の遺物が出土した。0210は口径13.4cmを測る青磁碗で、竜泉窯か同安窯と考えられる。なお、器面には施釉があり光沢をもち、ガラス質である。0211は口径15.4cmを測る青白磁の皿か。0212は外面に黒色をなす施釉があり、内面には部分的に灰釉がみられる。黒褐釉陶器の甕か。0213は口径12.6cmを測る瓦器壺で、器内外面は磨滅し器面調整はわからない。0214は糸切り底の土器器皿で、口径10.4cm、器高1.2cmを測る。

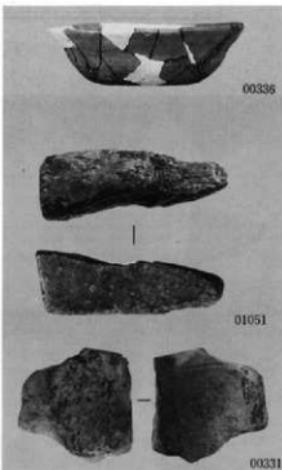
以上から、本井戸は曲物か桶の木製容器を井筒とするもので、出土遺物から13世紀前半後に使用されたと考えられる。

### (3) 溝状遺構

#### 第10号溝 (SD-10)

本溝はI区の中央から西寄りで検出し、第6号溝を切り（遺存状態が悪く明瞭でない）、第20・25号建物に切られている。N-26°-Wに流路をとり、幅30~40cmで0~10cm遺存している。埋土は灰色の砂で、横断面は逆台形をなしている。

本溝の出土遺物はなく、時期限定はできないが、古代末頃のものか。



Ph. 31 第14号溝出土遺物

#### 第14号溝 (SD-14) (Fig. 43, Ph. 31)

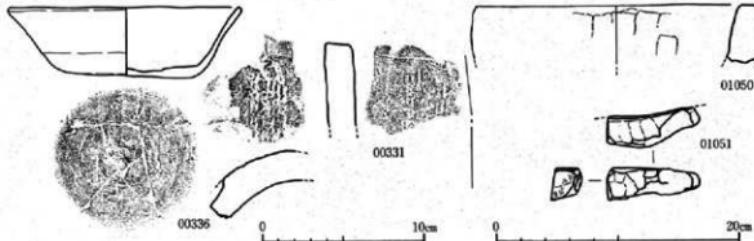


Fig. 43 第14号溝出土遺物実測図

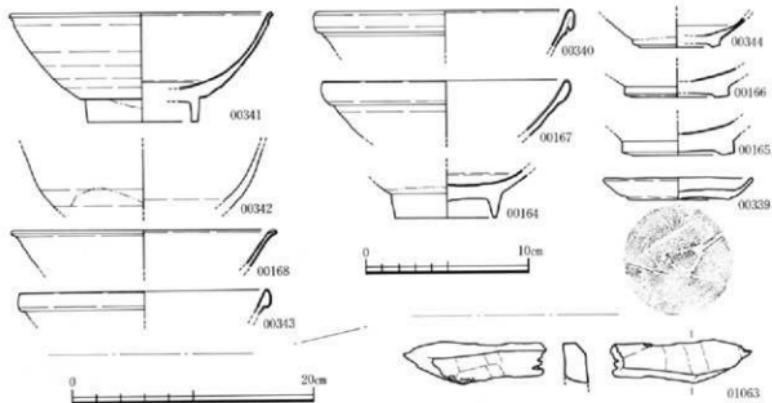
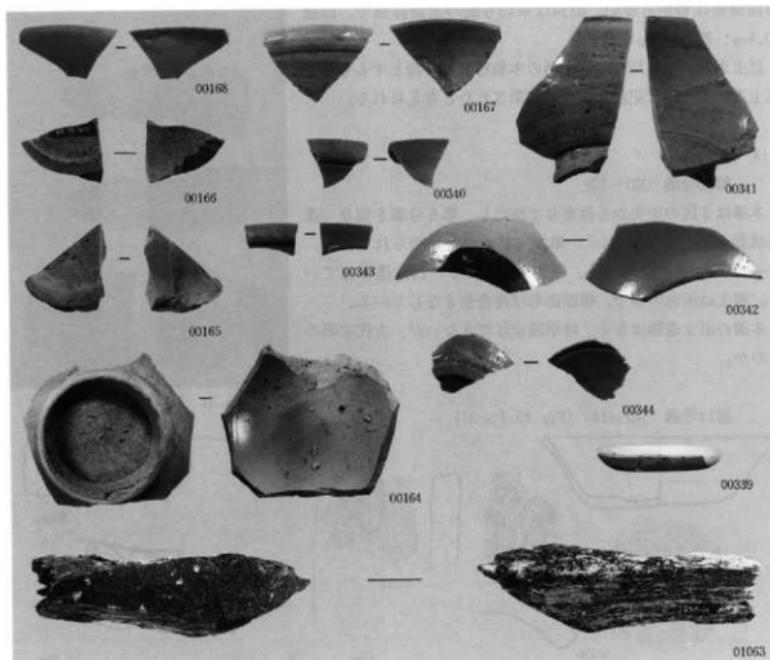


Fig.44 出土古代・中世遺物実測図



Ph.32 古代・中世の出土遺物

本溝は0区のはば中央で検出した。幅1~1.5mで、30~45cm遺存する横断面がU字状をなす溝で、N-41°-Wの流路をもっている。

**出土遺物** (Fig. 43, Ph. 31)：本溝からは少層の遺物が出土した。0336は土師器の坏で、口径14.4cm、器高4.3cmを測る。外底には板状圧痕がみられ、器内外面は横ナデ調整が施されている。また、外底に墨書きがみられる。0331は丸瓦、1050・1051は滑石製石鍋である。

本溝の東側には集落が拡がり、本溝の西側は水田となっており、本溝は集落と水田を区画している。出土遺物は古いものを固化したが、本溝のあり方から、古代末から中世にかけて使用されたものといえよう。

#### (4) その他の出土遺物 (Fig. 44, Ph. 32)

本調査においては、遺構検査作業中に多くの遺物が出土した。いずれも住穴の埋土出土と考えられる。0164~0168・0340~0344は白磁碗で、土縁の口縁をもつものともたないものがあり、底部は削り出しの高台をもっている。0341が口径16.4cm、器高6.6cmを測り大きく、0167が口径15cmと小さい。

0339は外底に板状圧痕をもつ土師器小皿で、口径9.2cm、器高1.3cmを測る。

1063は滑石製鍋の破片に再加工を加えている。

### 5) 本調査の成果

本調査においては、縄文時代の並木式土器、突帯文土器や打製石斧・石匙・削器などの石器、弥生時代の弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代末から中世の土師器・瓦器・白磁・青磁・陶器と滑石製石鍋が出土した。

検出遺構としては、古墳時代（5世紀前半）の溝2条、古代末から中世後半期にかけての掘立柱建物11棟、井戸4基、土壙3基、溝2条、溝状遺構2条、柱穴多数がある。

本調査では、縄文時代中期中頃から弥生時代終末期にかけての遺物があるが、遺構は所在しない。ただ、弥生時代前期から中期初頭の包含層があり、第2次調査を加味すると、本調査地の南東隣接地に集落が所在すると考えられる。

5世紀前半の大溝2条は同一機能をもつ用水と考えられ、第15号溝は第6号溝の切り換え溝といえる。第6号溝での大量の上器出土は、用水廻棄の祭祀のあり方を示しているといえよう。

古代末から中世にかけての掘立柱建物群を中心とする集落の検出は、次郎丸遺跡の広がり、中世の様相把握を可能にしたといえよう。掘立柱建物群は、N-11°~18°-Wの南北棟とN-72°~80°-Eの東西棟で構成されており、今後の早良平野における集落のありかたを考えるうえで参考となろう。出土遺物に視点をあてると、時期的には12世紀後半から16世紀のもので、輸入陶磁器は土師器（瓦器を含む）に比較して少なく、福岡平野では一般的な集落といえる。このようななかで、石組み・木製容器井筒の井戸の検出は特記できる。



1) I区



2) O区

Ph.33 次郎丸遭路調査終了状況

### III 発掘調査の記録

#### 2. 次郎丸高石遺跡第2次調査

遺跡調査番号 9233 遺跡略号 JRT-2 分布地図番号 083-2447  
調査地地籍 早良区次郎丸 丁目58・59・61・65 調査実施面積 1,503m<sup>2</sup>  
調査期間 1992年7月31日～1992年11月3日

### 1) 調査概要 (Fig. 45・46, Ph. 34)

本調査予定地は、東西方向に幅5m、南北方向に幅4mの生活道路があり4区画をなしている。東西方向の生活道路から北側3区画のうち、西側の台形を呈する2区画で試掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代の遺構の所在が確認できたため、この4区画が調査対象となっていた。調査実施にあたっては、試掘が行なわれていなかった生活道路から北側の東の区画と南側の区画での遺構の広がり、遺存状態の把握を目的とした確認調査から実施した。その結果、生活道路北側の東の区画からは遺構が検出でき、遺構が広がっているとして全面的に調査を実施することになった。また、南側の区画においては水道管・ガス管が網目状に入っていること、調査中の止水および廃管が不可能なため、今回の調査実施は断念した。ただし、遺構の遺存は確認できたので、配管切り換え後に本調査を実施することになった。今回調査が不可能な生活道路部については、道路建設工事着手前の生活道路切り換え後に立会調査を実施することになった。本調査は、東から区画ごとにI～III区として各区とも対象地全域の調査を行なった。

I区は、西側は畠地、東側は盛土が行なわれ雑種地となっていた。調査は盛土および現代耕土を除去することから始めた。その結果、調査区の西端から3mまでは標高10.85m前後の暗褐色粘質土の面で、それから東側では標高10.45m～10.70mの淡黄褐色～淡灰色粘質土の面で遺構を検出した。検出遺構としては、井戸2基、土壙5基、溝および溝状遺構3条、柱穴多数がある。出土遺物としては、縄文土器・弥生土器・土師器などがある。なお、本調査区では標高9.7m～10m疊層となっている。

(Fig. 47, Ph. 35)

II区は、東側半分が生活道路まで盛土された宅地として、西側半分は水田として使用されていた。調査は盛土および現代耕土を除去することから始めた。その結果、標高11m前後の暗灰色～黒灰色粘質土の面で、黒褐色土を覆土とする遺構を検出した。検出遺構としては、掘立柱建物8棟、土壙6基、柱穴多数がある。出土遺物としては、弥生土器・土師器がある。なお、本調査区では標高9.9m～10mで疊層となっている。

(Fig. 53, Ph. 41)

III区は、生活道路面



Ph. 34 次郎丸高石遺跡第2次調査術観



Fig. 45 次郎丸高石遺跡第2次調査地形実測図

まで盛土され宅地となっていた。調査は、盛土および現代耕土を除去することから始めた。その結果、標高10.8m～10.95mの黒褐色粘質土・灰色シルト一砂の面で遺構を検出した。検出遺構としては、土壤7基と自然流路1条がある。出土遺物としては、縄文土器・弥生土器・土師器がある。なお、本調査区では東側が標高9.8m、西側が9.6mで疊層となっている。(Fig. 63, Ph. 45)

検出遺構については、掘立柱建物をSB、井戸をSE、土壤をSK、溝および溝状遺構をSDと遺構記号を使用し、各調査区ごとに検出順に通し番号を付した。なお、柱穴はSPの遺構記号を使用し、検出順に4桁の通し番号を付した。本書中では、遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物については、遺跡調査登録番号9233のあとに土器は00001から、石器は01001からの5桁の通し番号を付し、登録番号とした。なお、本書中では土器は下2桁、石器は下4桁で明記していく。

## 2) I 区の遺構と出土遺物

### (1) 第1号井戸 (SE-01) (Fig. 48, Ph. 36)

本井戸は本調査区の西側中央の暗褐色粘質土面で、黒色～黒褐色土を埋土とする形で検出した。長軸1m強、短軸80cm弱の平面形不整円形を呈して、淡黄褐色粘質土を掘り貫き、含水層である灰色シルト一砂まで掘り込み80cm遺存している。本井戸の底の標高は10.07mで、井戸の下部から比較的まとまった遺物が出土した。



Ph.35 I 区俯瞰

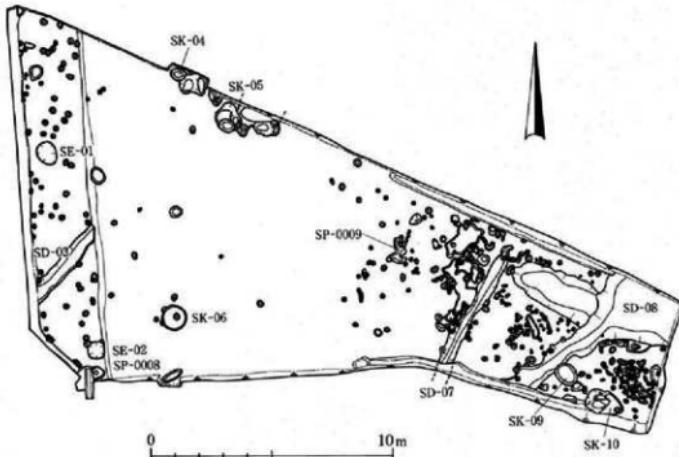


Fig.47 I 区遺構配置実測図

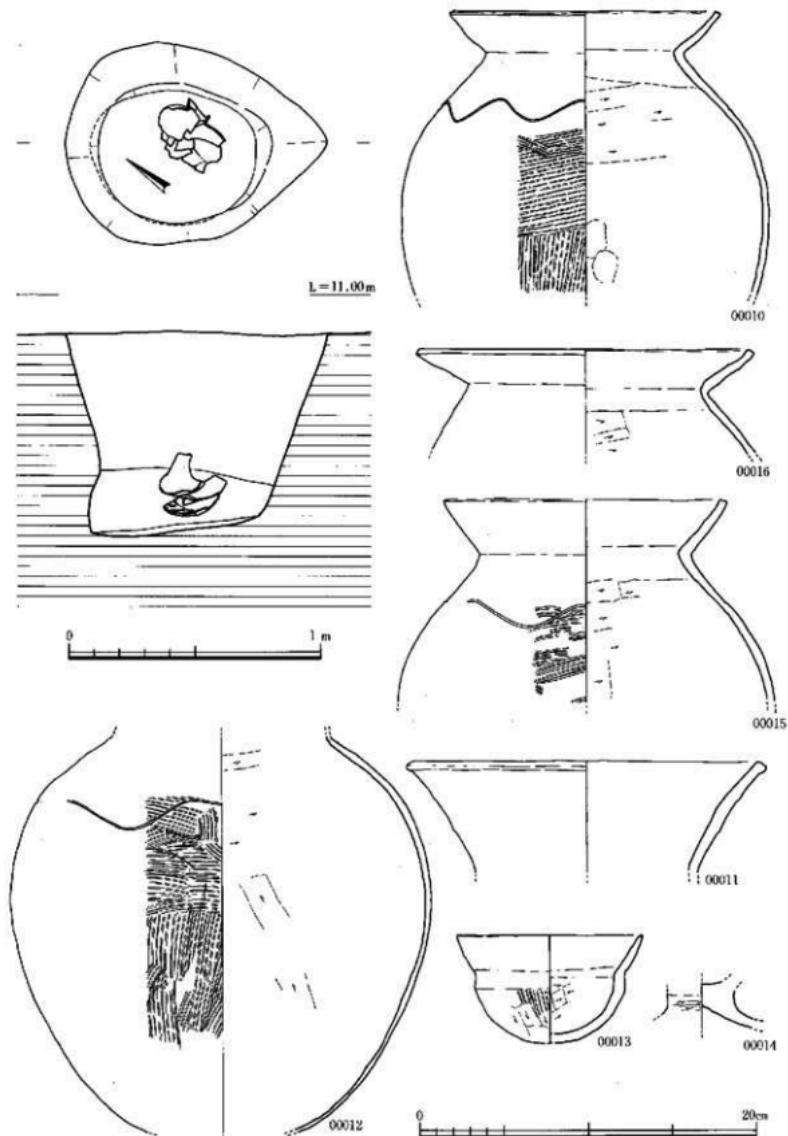
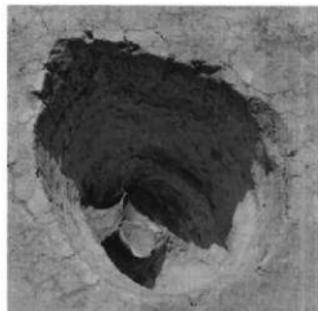


Fig. 48 第1号井戸 (SE-01) および出土土器実測図

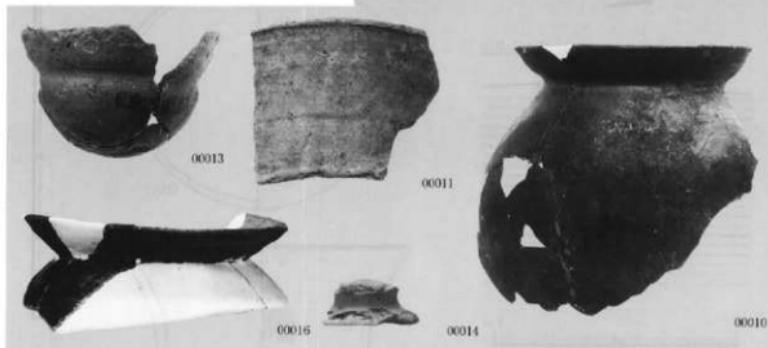
**出土遺物：**本井戸からはコンテナ1箱の遺物が出土し、10・16の7点の土師器を図化した。13が小形丸底土器、14が高坏で、他は壺である。10・12・15・16は丸みをもつ胴から屈曲して開き口縁となる器形をもち、口縁端はコの字状の面をなしている。胴内面の屈曲部から下はヘラケズリ、胴外面はハケ目調整が施され、口縁はヨコナデ調整で仕上げている。10・12・15の胴外面上部には波状沈線が一条巡っている。口径は10が16cm、15が16.8cm、16が20cmを測る。以上の壺の外面には比較的厚く煤が付着している。11は口径21.2cmを測る壺で、前者と比べ器壁がやや厚いもので口縁の立ち上がりが長い。

13は口径11cm、器高6.4cmを測る小形丸底土器で、半球状の胴から屈曲して開き口縁となっている。屈曲部から下の内面はヘラケズリ、胴から底にかけての外面はハケ目調整後ヘラケズリが施され、口縁はヨコナデ調整で仕上げている。14は高坏か台付鉢の軸部片である。

以上から、本井戸は含水層である灰色シルトー砂の水を利用した井戸で、出土土器から4世紀中頃のものといえよう。



第1号井戸遺物出土状態



Ph.36 第1号井戸遺物出土状態および出土土器

(2) 第2号井戸 (SE-02) (Fig. 49, Ph. 37)

本井戸は本調査区西側の南の暗褐色粘質土面で、黒色～黒褐色土を埋土とする形で検出し、一部を柱穴に切られている。長軸80cm、短軸75cmの平面形が不整円形を呈し、淡黄褐色粘質土を掘り貫き、含水層である灰色シルト～砂まで掘り込み60cm弱遺存している。井戸底の形からみると、隅丸方形を意識して造られた可能性もある。上部は黒色～黒褐色土中部は壁の崩落があったと考えられ、暗褐色～黄褐色粘質土に淡黄褐色粘質土のブロックが入り、下部は黒褐色～黒色の粘質土～シルト～砂を埋土としている。遺物は、上部から中部にかけては数点と極端に少なく、底に17・18の完形品が置かれた状態で出土した。本井戸の底の標高は10.295mである。

**出土遺物：**本井戸出土遺物は、完形品2点と数点の土師器のみで、3点を岡化した。17・18は壺、19は壺である。17は球状をなす胴から屈曲して開く口縁をもち、口縁端は丸くおさめている。なお、やや尖り気味となっている。胴外面はハケ目調整が施され、口縁はヨコナデ調整で仕上げているが、外底は磨滅気味であり、胴内面は器壙が荒れている。また、胴外面には煤の付着が著しい。口径11.6cm、頸径9.1cm、器高17.7cm、器壁厚0.3～0.5cmを測る。18は、球状をなす胴から屈曲してふくらみ気味に立ち上がり口縁となり、口縁端はコの字状をなしている。胴外面はハケ目調整、肩曲部下の内面は

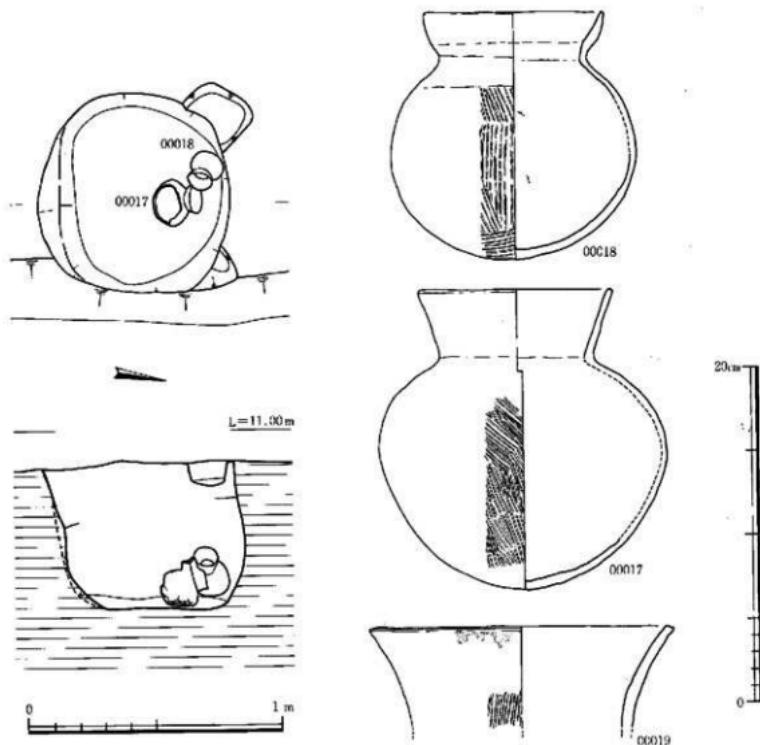
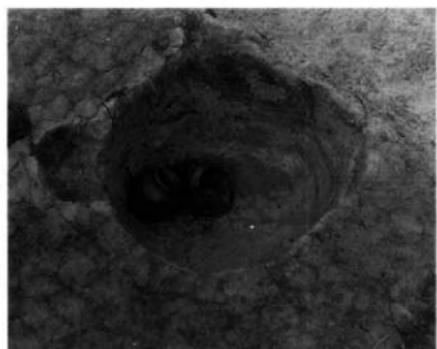
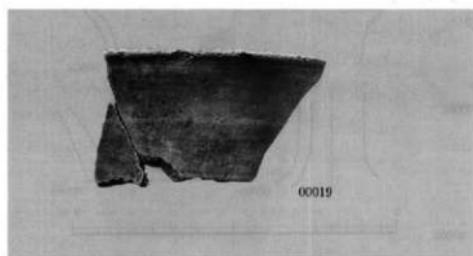


Fig. 49 第2号井戸 (SE-02) および出土土器実測図



第2号井戸遺物出土状態



Ph.37 第2号井戸遺物出土状態および出土土器

ヘラケズリが施され、口縁はヨコナデ調整で仕上げている。口径10.7cm、頸径8.8cm、器高14.7cm、器壁厚0.3~0.6cmを測る。19は口縁がやや開きながら立ち上がる壺で、口縁端は面をなしている。口縁端付近に丹の痕跡が残っており、口径18cmを測る。

以上から、本井戸は含水層である灰色シルトー砂の水を利用した井戸で、出土土器から5世紀初頭前後のものといえよう。

### (3) 第3号溝 (SD-03) (Fig. 50, Ph. 38)

本溝は本調査区西側の暗褐色粘質土面で、黒色~黒褐色土を埋土とする形で検出した。柱穴に切れられ、北東延長部は削平を受けている。検出面では幅55~70cmで、横断面形は逆台形を呈し10~15cm遺存している。N-41.5°-Eの流路をとっている。本溝の遺存状態は良くなかったが、コンテナ半箱ほどの土師器などの土器が出土した。

**出土遺物：**出土遺物は細片が多く、図化可能な9点を図化した。01は弥生土器の壺底部で、底径7.2cm。本溝には直接関連する遺物ではないが、本遺跡の集落の時期を考えるうえでは参考となる土器である。

02~09は土師器で、02~04・06~09は壺、05は高壺である。02は複合口縁をもち、口径16.2cmを測る。03・06・07は、球状または丸みをもつ胴から屈曲してややふくらみをもちながら開き口縁となる

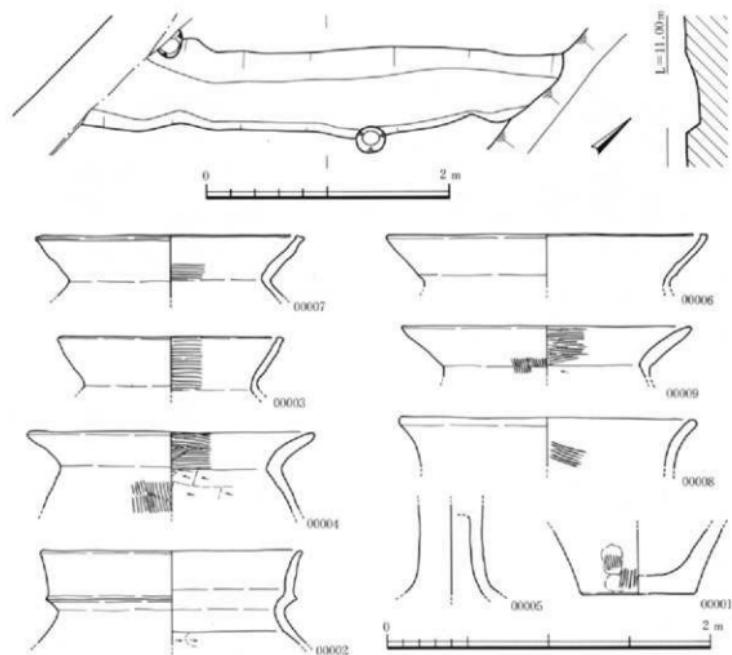
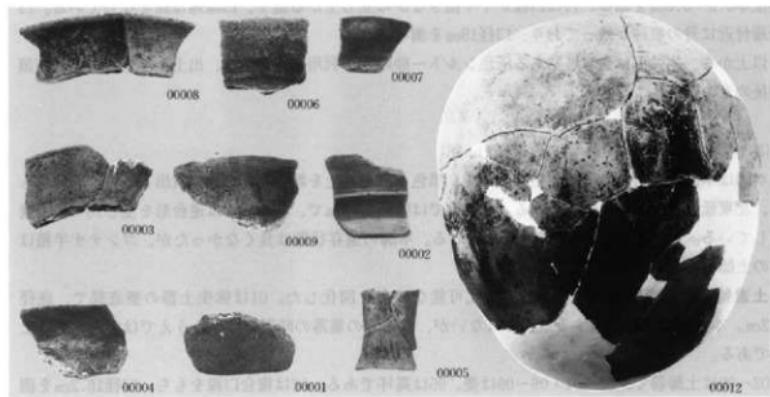


Fig. 50 第3号溝 (SD-03) および出土土器実測図



Ph. 38 第3号溝出土土器

器形をもち、口縁端をつまみ面をなし、内側に突起をなしている。器壁は薄く、03・07の口縁内面にはハケ目調整がみられるが、口縁はヨコナナデ調整で仕上げている。07の外面には煤の付着がみられる。03・06・07の口径は14cm、19.8cm、16.6cmを測る。04・09は丸みをもつ長胴から屈曲して開き口縁となる器形をもち、口縁端は丸くおさめている。屈曲部下の内面はヘラケズリ、胴外面・口縁内面はハケ目調整が施され、口縁端から屈曲部外面はヨコナナデ調整で仕上げている。口径は04・09とも17.8cmを測る。08は、球状または丸みをもつ胴から屈曲してやや開き気味に立ち上がり口縁となる器形をも

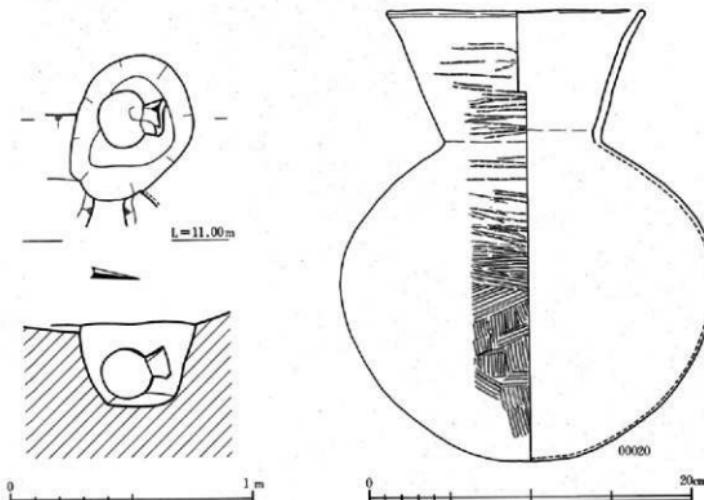
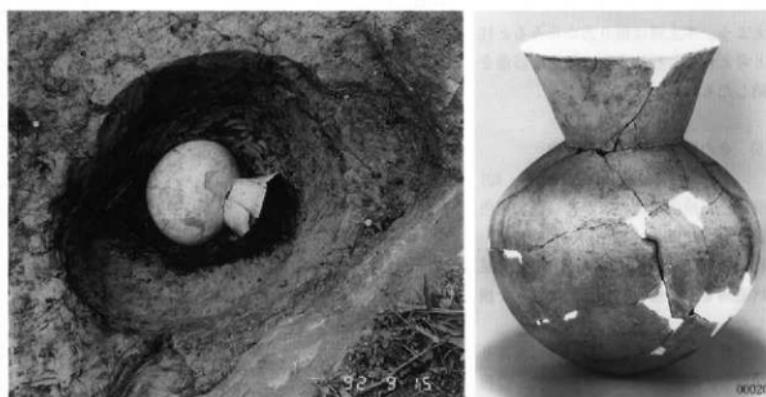


Fig. 51 第4号土壙 (SK-04) および出土土器実測図



Ph.39 第4号土壙遺物出土状態および出土土器

ち、口縁端は丸くおさめている。口径18.4cmを測る。

以上から、本溝はN-41.5°-Eの流路をとる逆台形溝で、出土土器から、4世紀前半から中頃に掘削され5世紀初頭頃まで使用されたといえよう。

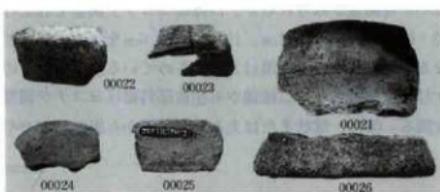
#### (4) 第4号土壙 (SK-04)

(Fig. 51, Ph. 39)

本土壙は本調査区の北側の中央から西

寄りの調査区境界に位置し、淡黄褐色粘質土面で、黒色粘質土を埋土とする形で検出した。東側をローム混じりの黒色粘質土を埋土とする柱穴に切られている。長軸64cm、短軸47cmの平面形不整円形を呈して、鉢状をなす掘り方をもち、底に18.5°の角度でN-8.5°-Wの主軸をとり、土師器壙が埋納されていた。掘り方の遺存は30cm強である。

埋納壙：球状をなす胴から屈曲して開き直線的に立ち上がり口縁となる器形をもち、口縁端は軽くつまみ面をなしている。胴外面下半はハケ目調整、胴上半から口縁にかけてはミガキ後ナデ調整で仕上げている。胴内面はヘラケズリが施されている。器壁は0.5cm以下と比較的薄く仕上げている。口径



Ph.40 I区各柱穴出土遺物

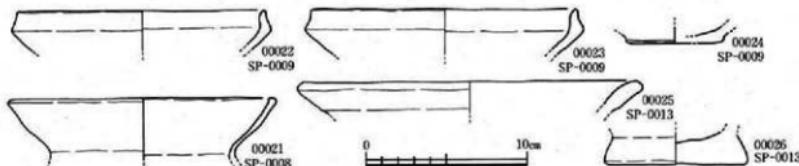


Fig. 52 I区各柱穴出土土器実測図

16cm、器高27.7cmを測る。

以上から、本土壙は土師器壙埋納土壙で、埋納壙から5世紀初頭前後のものといえよう。本土壙は掘り方からみると柱穴と考えられ、柱抜き取り後土師器壙を埋納したものか。

#### (5) その他の遺構と出土遺物

(Fig. 47・52, Ph. 35・40)

前述した検出遺構のほかに、淡黄褐色粘質土面で2基の土壙 (SK-05・06)、溝状遺構2条 (SD-07・08)・柱穴・足跡状遺構を、暗褐色粘質土面で柱穴を検出した。

第5号土壙は北側調査区境界の西寄りで検出し、1.8m×0.6+φmで30cm前後遺存している。第6号土壙は、調査区の



Ph.41 II区俯瞰

南西部で検出した。径1mで45cm前後遺存し、床は皿状をなし、壁は比較的直に立ち上がっている。

第7・8号溝は黒色粘質土を埋土としている。前者は幅50cm前後で10cm遺存し、後者は幅1m前後で北東方向に流路をとり、溜状遺構につながっており10~30cm遺存している。この溝状周辺には黒色粘質土・黒色砂を覆土とする土壤（SK-09・10）や柱穴・足跡状遺構が分布しており、水田に伴う水利施設があった可能性がある。この周辺の出土遺物としては縄文時代晩期の土器、土師器の細片があるがほとんど図化できなかった。

**柱穴等出土遺物：**21は、第2号井戸の南に位置する隅九方形の掘り方をもつ第8号柱穴から出土した土師器甕で、口径16.6cmを測る。22~24は、調査区東側の黒色粘質土を埋土とする落ち込み（第9号柱穴として遺物を取り上げた）から出土した縄文土器である。いずれも浅鉢で、前2者の口径は16.4cm、15.4cm、23は底径6cmを測る。13は第13号柱穴から出土した口径21.4cmを測る土器で、弥生土器の壺か。

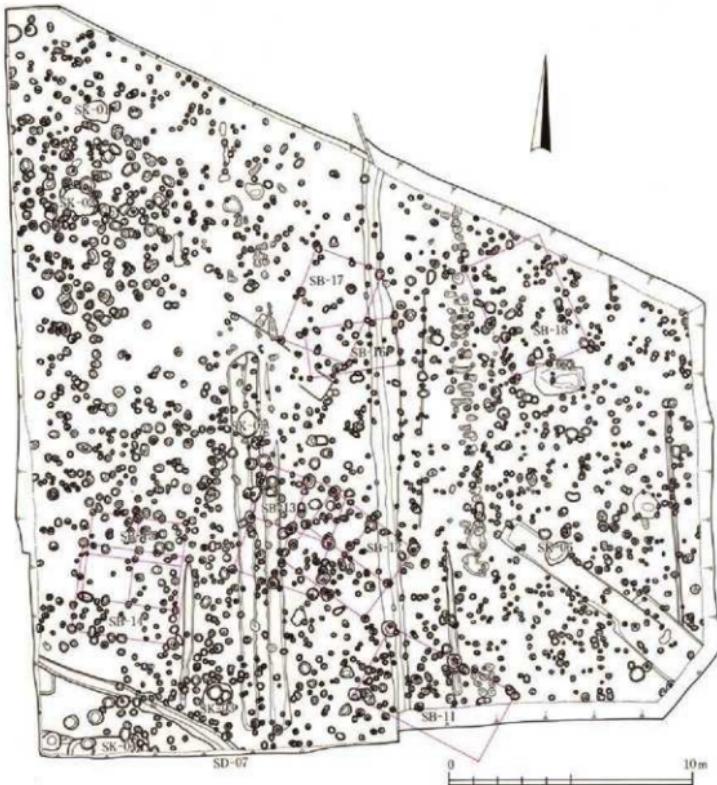


Fig. 53 II区遺構配置実測図

### 3) II区の遺構と出土遺物

#### (1) 第1号土壙 (SK-01) (Fig. 54)

本土壙は、本調査区北西部の暗灰色～黒灰色粘質土面で黒褐色土を埋土とする形で検出した。検出面では長軸1.15m前後、短軸80cm前後を測る隅丸長方形を呈し、黄灰色粘質土・灰色粘質土を掘り貫き、暗灰色疊混じり砂層まで掘り込んでいる。検出面下70cmで床となり、床は長軸95cm前後、短軸55cm前後を測る長方形を呈しほぼ平坦である。床の東西端は幅10cm前後で6cmの掘り込みがあり、南北には幅8cmで深さ5cmの溝状をなす掘り込みがある。壁は内傾気味に立ち上がっている。

以上から、本土壙は木棺墓と考えられる。本土壙からの出土遺物はなく、時期限定はできないが弥生時代のものといえよう。

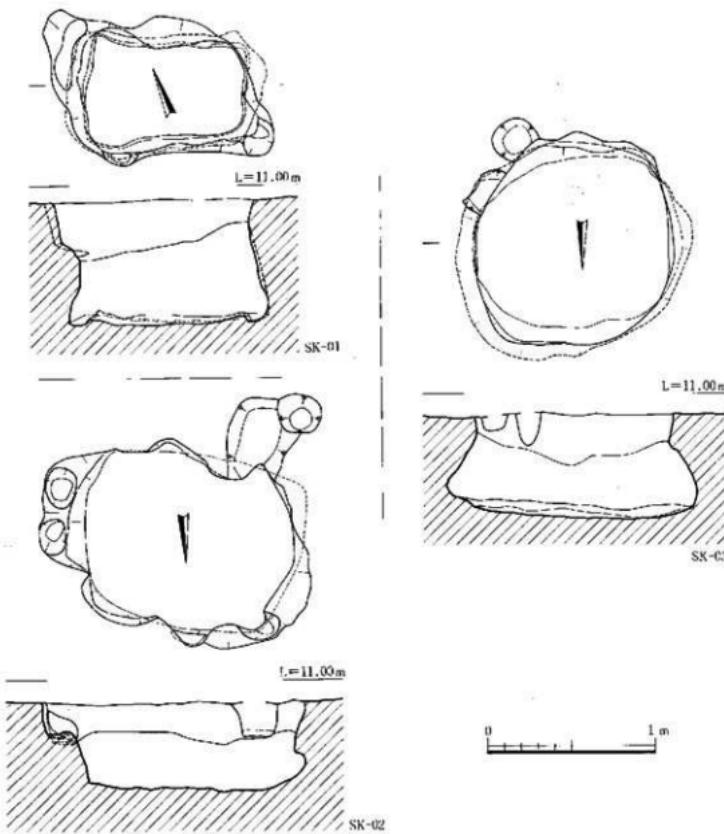


Fig. 54 第1～3号土壙 (SK-01～03) 実測図

## (2) 第2号土壌 (SK-02) (Fig. 54)

本土壌も本調査区北西部で検出し、第1号土壌の南に3m間隔をもち並行している。検出面、埋土も第1号土壌と同様である。本土壌は北側などが柱穴に切られている。検出面では長軸1.4m前後、短軸1.1m前後を測る隅丸長方形を呈し、検出面下50cm強で床となる。床面はほぼ平坦で、長軸1.3m、短軸1.05mを測る隅丸長方形を呈し、壁は東側はやや開き気味に立ち上がり棚をもち、西側は袋部をもっている。

以上から、本土壌は土壙墓の可能性が高いといえよう。第1号土壌と同時期のものか。

## (3) 第3号土壌 (SK-03) (Fig. 54)

本土壌は、本調査区の南西部の暗灰色～黒灰色粘質土面で黒褐色～茶褐色土を埋上とする形で検出し、柱穴に切られている。検出面では径1.1m前後の円形を呈し、検出面下60cmで床となっている。床は径1.2m前後の円形を呈し、皿状をなし、壁は床から内傾しながら45cm前後立ち上がり、屈曲してやや開き気味に立ち上がっている。本土壌からは弥生土器の細片が出土した。

以上から、本土壌は弥生時代の貯蔵穴と考えられる。

## (4) 第4号土壌 (SK-04) (Fig. 55)

本土壌は、本調査区南西隅の黒灰色粘質土面で黒色～黒灰色シルト～砂を埋土とする形で検出した。一部の柱穴を切り、多数の柱穴に切られている。長軸4.4m、短軸70cmを検出したが、西・南の調査区外に延びている。黒色～暗褐色のシルト～砂を埋土とし、検出面下35cmで床となる。床はほぼ平坦で叩き締められており、壁はやや開き気味に立ち上がっている。竪穴住居と考えられ、西側に貼床がみられ、検出面から15cm前後を床とする別の竪穴住居跡を切っていると考えられる。

以上から、本土壌は隅丸長方形を呈する2棟の竪穴住居跡で、出土土器細片から古墳時代前期の

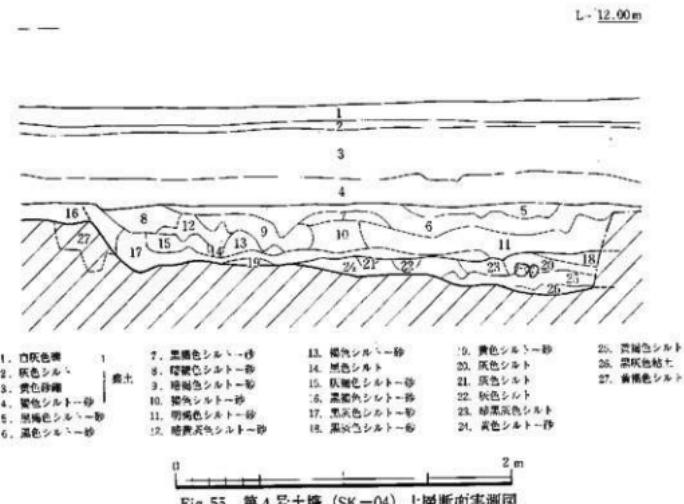


Fig. 55 第4号土壌 (SK-04) 上層断面実測図

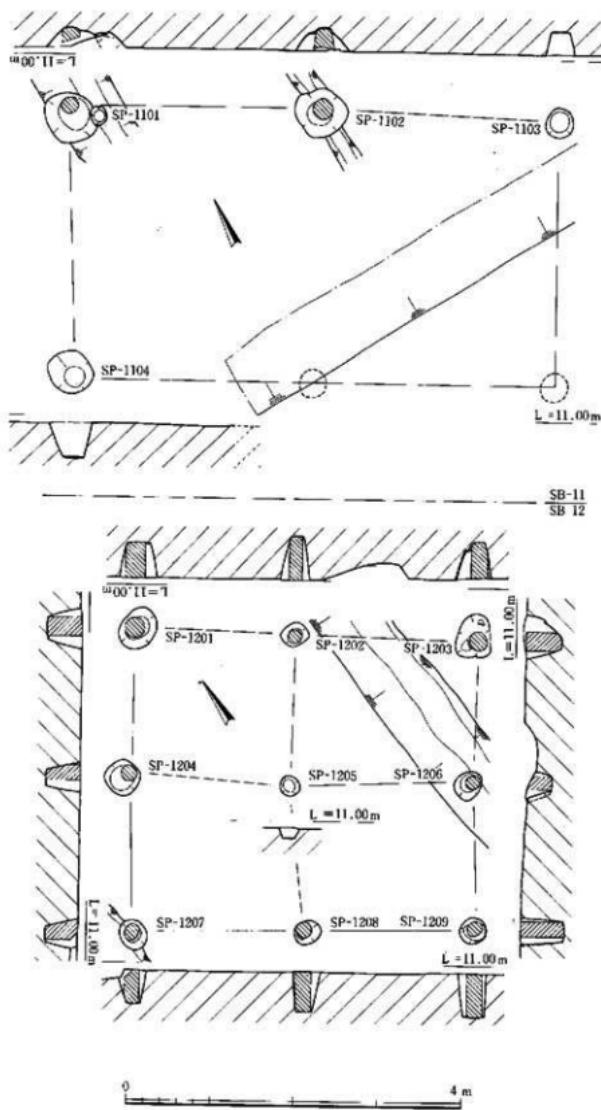


Fig. 56 第11・12号掘立柱建物 (SB-11・12) 実測図

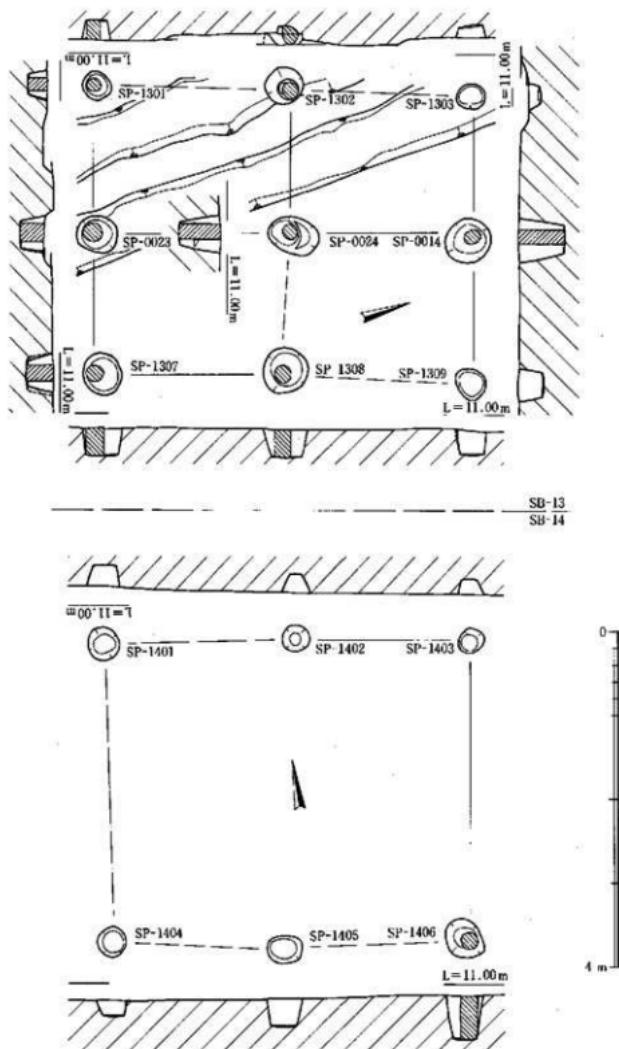


Fig. 57 第13・14号掘立柱建物 (SB-13・14) 実測図

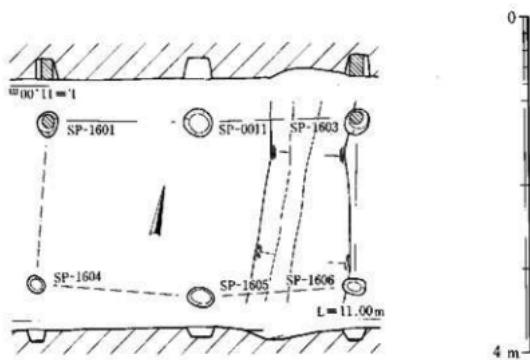
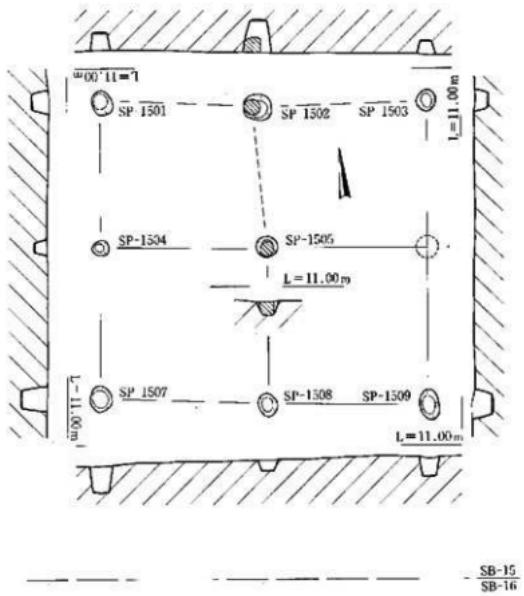
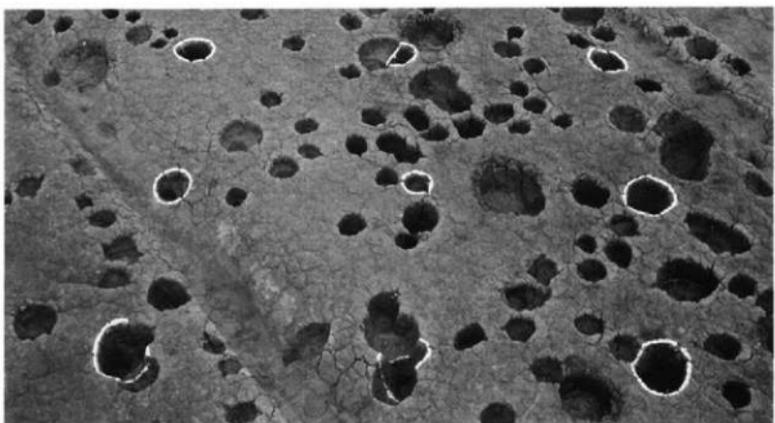


Fig. 58 第15・16号獨立柱建物 (SB-15・16) 実測図



1) 第11号掘立柱建物検出状況



2) 第12号掘立柱建物検出状況



3) 第13号掘立柱建物検出状況

Ph.42 II区検出掘立柱建物

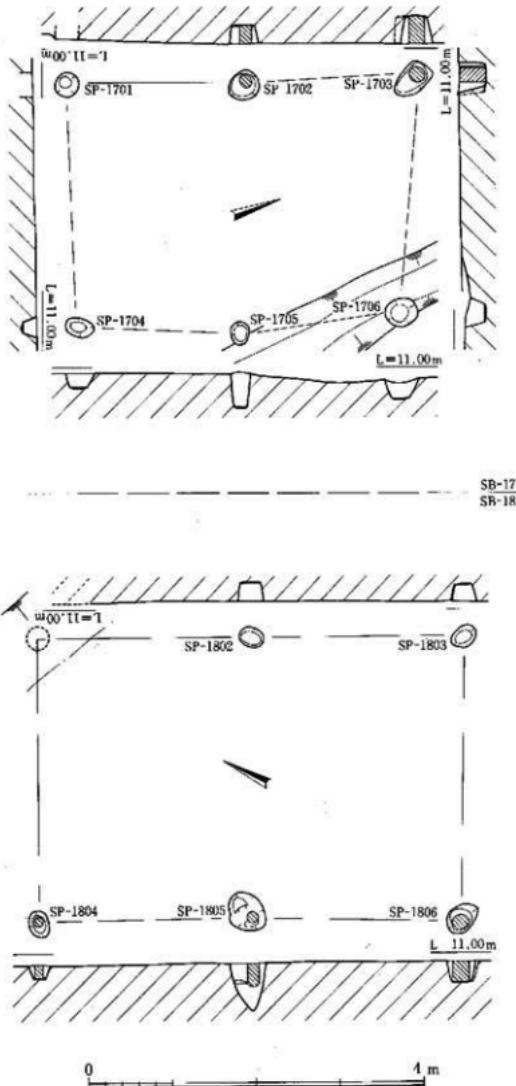


Fig. 59 第17·18号掘立柱建物(SB-17·18)実測図

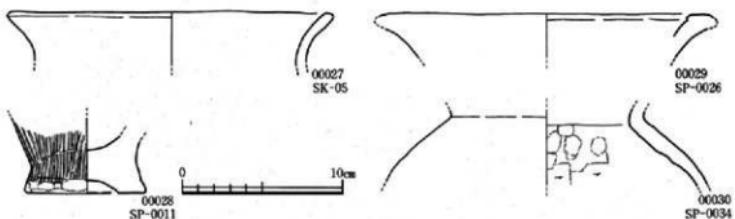
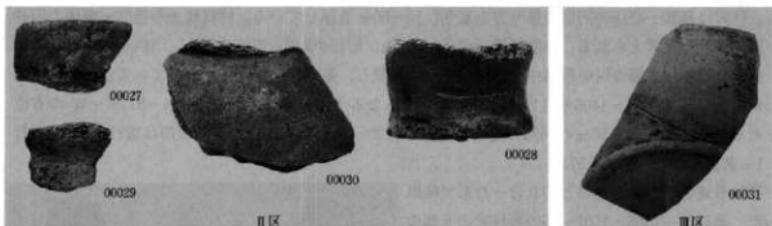


Fig. 60 II区各遺構出土土器実測図



Ph.43 II・III区各遺構出土土器

ものであろう。

#### (5) その他の土壤 (Fig. 53・60)

第1～4号土壤のはかに、2基の土壤 (SK-05・06) を暗灰色～黒灰色粘質土面で検出した。第5号土壤は、本調査区の中央からやや西寄りに位置している。検出面では長軸1.1m、短軸0.9mを測る楕円形を呈し、40cm遺存している。本土壤からは数点の土師器小片が出土し、1点を図化した。27は口径20cmを測る甕の口縁である。

第6号土壤は、本調査区の中央からやや南東寄りに位置している。検出面では長軸1.1m、短軸75cmを測る楕円形を呈し、30cm遺存している。円形堅穴住居跡の中央土壤と考えられるが、住居の柱穴を確定できなかった。出土遺物として、弥生土器の細片がある。

#### (6) 第7号溝 (SD-07) (Fig. 53)

本溝は、本調査区の南西部の黒灰色粘質土面で検出した。検出面では、幅55cm前後で5cm前後遺存している。横断面形は逆台形を呈し、黒褐色砂シルトを埋土としている。本溝からは数点の土師器細片が出土した。なお、N-70°-Wの流路をとっている。

以上から、本溝は逆台形溝で古墳時代前半期のものといえよう。また、I区検出の第3号溝と連続し集落区画溝となる可能性がある。ちなみに、I区第3号溝と本溝は115.1°の角度をもつていて。

#### (7) 捩立柱建物と出土遺物 (Fig. 53)

本調査区では、暗灰色～黒灰色粘質土面で8棟の擗立柱建物（以下、建物とする）を検出 (SB-11～18) した。以下、各建物をみていくことにする。

第11号建物は本調査区の南側中央に位置し、第1101～1104号柱穴の4個の柱穴を検出し、建物とし

てまとめた。柱穴は径50cm前後の隅丸方形を呈する掘り方をもち、20~40cm遺存している。柱痕跡から20cm前後の円柱を用いていたと考えられる。柱間は梁行3.2m、桁行は3m・2.85mを測る。1間×2間の建物で、N-63°-Wの方位をとっている。(Fig. 56, Ph. 42)

第12号建物は調査区中央からやや南寄りに位置し、第13号建物と切り合っているが先後関係はわからない。第1201~1209号柱穴の9個の柱穴からなる2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-56.5°-Wの方位をとる。柱穴は径25~40cmの円形の掘り方をもち、20~50cm遺存している。柱間は梁行が1.8m前後、桁行が2m前後を測る。(Fig. 57)

第13号建物は第12号建物と切り合った形で検出した。第1301・14・1303・1304・24・1305・1307・23・1309号柱穴の9個の柱穴からなる2間×2間の総柱の倉庫的な建物で、N-17.5°-Eの方位をとる。柱穴は径30~45cmの円形の掘り方をもち、10~50cm遺存している。柱痕跡から径20cm前後の円柱が用いられたと考えられる。柱間は梁行が1.7m前後、桁行が2.2m前後を測る。(Fig. 57, Ph. 42)

第14号建物は本調査区の西側中央から南寄りに位置し、第15号建物と切り合っているが先後関係はわからない。第1401~1406号柱穴の6個の柱穴からなる1間×2間の建物で、N-81.5°-Wの方位をとる。柱穴は径30~50cmの円形の掘り方をもち、20~55cm遺存している。柱間は梁行3.5m、桁行2.1m前後を測る。(Fig. 57)

第15号建物は第14号建物と切り合った形で検出した。第1501~1505・1507~1509号柱穴の8個の

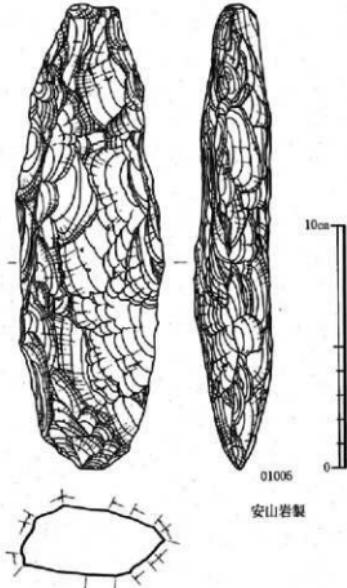
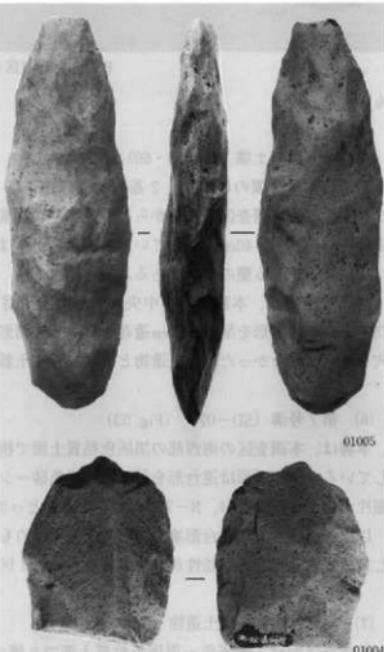


Fig. 61 出土局部磨製石斧実測図



Ph. 44 II区出土石器

柱穴を検出し、2間×2間の純柱の倉庫的な建物であるとした。N-84°-W の方位をとっている。柱穴は径18~30cmの円形の掘り方をもち、15~40cm遺存している。柱間は梁行が1.8m前後、桁行が1.95m前後を測る。(Fig. 58)

第16号建物は本調査区の中央からやや北寄りに位置し、第17号建物と切り合っているが先後関係はわからない。第1601・11・1603~1606号柱穴の6個の柱穴からなる建物で、N-78°-E の方位をとる。柱穴は径20~35cmの円形の掘り方をもち、10~22cm遺存している。柱間は梁行が1.95m・2mで、桁行は1.8m前後を測る。28は第11号柱穴の掘り方から出土した弥生土器の甕の底部で、上げ底をもち底径7.4cmを測る。本建物は弥生時代中期頃のものか。(Fig. 58・60, Ph. 43)

第17号建物は第16号建物と切り合った形で検出した。第1701~1706号柱穴の6個の柱穴からなる1間×2間の建物で、N-18°-E の方位をとる。柱穴は径20~35cmの円形の掘り方をもち、15~40cm遺存している。柱間は梁行が2.9m、桁行が2m前後を測る。(Fig. 59)

第18号建物は本調査区の北西部に位置している。第1802~1806号柱穴の5個の柱穴を検出し、1間×2間の建物としてまとめた。N-26.5°-W の方位をとる。柱穴は径25~50cmの楕円形を呈する掘り方をもち、16~58cm遺存している。柱間は梁行が3.35m、桁行が2.5m前後を測る。(Fig. 59)

そのほか、多数の柱穴のうち柱穴の1/6程度の柱穴から数点ずつの弥生土器・土師器が出土した。29は第26号柱穴から出土した鉢状口縁をもつ壺で口径21cmを測り、弥生時代中期のものである。30は第34号柱穴から出土した土師器甕の胸部片である。(Fig. 60, Ph. 43)

#### (8) その他の出土遺物 (Fig. 61, Ph. 44)

1005は暗灰色~黒灰色粘質土中から出土した石斧で、御子柴文化の系譜を引くものといえよう。

#### 4) III区の遺構と出土遺物

(Fig. 62・63)

標高10.8m~10.92mの黒褐色粘質土・灰色砂シルトの面で、土壌7基、自然流路1条と柱穴を検出した。

土壤のうち3基(SK-01~03)は径1~1.4mを測る平面形円形を呈し、自然流路底から60~110cm掘り込まれている。調査中は粘土探査の可能性を考えたが、床・壁が整っているため、貯木用か、ドングリ等の漬け込み用に使用されたと考えられる。自然流路から縄文時代晩期終末期の土器細片が出土しており、同時期のものか。

自然流路は幅5.5mで、60cm前後の深さをもち流木が全面に散乱していた。この流

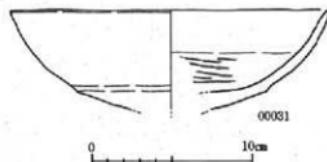
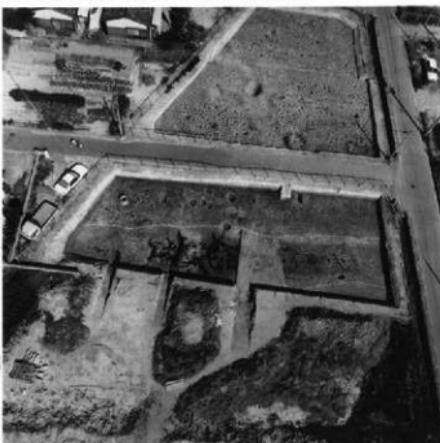


Fig. 62 第20号柱穴出土土器実測図



Ph.45 III区俯瞰

路は N-8°-W の流路をもち、出土遺物から縄文時代晚期終末頃から所在し、5世紀前半では台地際をなしていたと考えられる。

31は第20号柱穴から出土した土師器高壙の壙部で、口径19.8cmを測る。

## 5) 本調査の成果

1979年度の次郎丸中学校建設に伴う第1次調査で、本調査で出土した時期の遺物が出土していたが、次郎丸高石遺跡（以下、本遺跡とする）の様相は漠然としていた、今回の本調査を含む4次の本調査および外環状道路線内の試掘調査実施によって、本遺跡の様相の一部を把握することができた。

本遺跡内には南北方向の自然流路が各時期に所在し、個々の流路は時期によって変化している。これらの自然流路間の沖積微高地には各時代の集落が営まれている。

本調査および第1・4次調査成果から、本調査地周辺は東西幅60mの沖積微高地があり、少なくとも縄文時代終末期から5世紀初頭にかけて集落が営まれている。なお、本調査地の東側は80mの幅をもつ谷となっており、西側は400m前後の幅をもつ谷となっている。

本調査の検出遺構は、I区の井干2基、上壙1基、第3号溝と、III区の土壙3基が時期限定できるが、他の遺構は時期限定ができない。本調査では、縄文時代終末期の上器、弥生時代中期の上器、4世紀～5世紀初頭の土器が出土しており、微高地上検出の掘立柱建物群からなる集落の主体は4世紀中頃から5世紀初頭のものであるといえる。ただし、出土土器から少なくとも弥生時代中期前半には集落が形成されていたと考えられる。

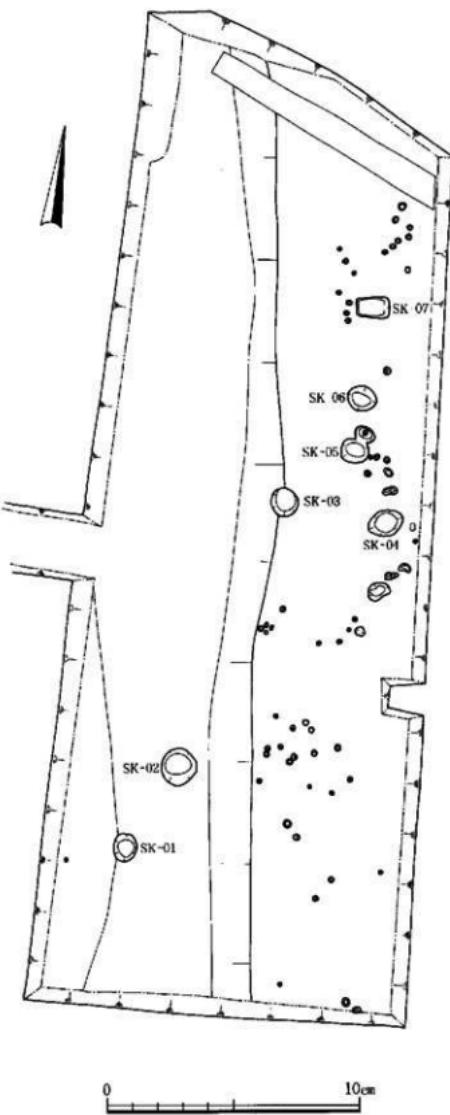


Fig. 63 III区遺構配位置実測図

福岡外環状道路関係  
埋蔵文化財調査報告

—1—

福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・  
次郎丸高石遺跡第2次調査

1996年(平成8年)3月29日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 福岡印刷株式会社  
福岡市博多区東郷町一丁目10-15